

やはり俺が箱庭に行くのはまちがっているのか。

ザンザス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は生まれた時から己が持つ力を恐れ、周りは必死に何かを隠す少年を気味が悪いと忌み嫌い少年に一生消えない傷を付けた。

少年はそれらの仕打ちに対して心が疲れ切ってしまった。

当時小学6年の時、少年が命を絶った……筈だった。

だが、少年は何故か生き返ってしまった。

そのことに絶望していた時、少年は2人の少女と1人の女性に出会う。

自分という存在が必要である事を少なからず知ることができた。

それから暫くして1人の少女と女性はもう1人の少女に伝言を残し、少年の前からいなくなった。

それから、3年の時が経った中学三年の秋、少年ともう1人の少女のもとに一通の手紙が届く。

それにより少年は過去の約束を果たしに箱庭に向かうことになる。

これは比企谷八幡と問題児が紡ぐ物語……

目次

プロローグ

| | |
|-----------------------|-----|
| 少年は約束の地へ、少女は故郷へ…… | 1 |
| YES！ウサギが呼びました！ | |
| 箱庭の世界と問題児たち | 10 |
| 世界の果てと逆廻十六夜という問題児 | 19 |
| サウンドアイズとギフトゲームと再会【前編】 | 35 |
| サウンドアイズとギフトゲームと再会【後編】 | 57 |
| コミュニティの現状・ギフトゲーム前夜 | 68 |
| ハンティング | 86 |
| 過去の仲間とペルセウス | 100 |
| 交渉と過去と宣戦布告 | 112 |
| 決着と星に願いを | 133 |
| あら、魔王襲来のお知らせ？ | |
| 問題児達を追って火龍誕生祭へ | 146 |
| 北側に着いて…… | 149 |

プロローグ

少年は約束の地へ、少女は故郷へ……

千葉市立総武中学、この中学には奉仕部という部活が存在した。

この部活の活動内容は依頼者の問題に対して問題の解決というよりその問題の手助けをするという内容の部活で、少年”比企谷八幡”はその奉仕部の部員だった。

八幡は文化祭の暴言や修学旅行の告白の邪魔などで、学校内では最低の人間として有名になっている。

* * *

(ねえ？君はいつまで自分を傷つけるやり方を続けるの？)

(……………さあな)

(君は今までも信じたと思う人たちに嫌という程嫌われ、蔑まれてきた。……………もう、”本物”なんて諦めてしまえば楽になるよ?)

(そうだな、でも……………こんな俺でも必要としてくれる奴はいる)

(”あの人達?")

(ああ)

(……………ならせいぜい裏切られずに、ね)

「……………余計なお世話だつづうの」

放課後、教室で少し眠ってしまった八幡は夢の中に出てくる過去の自分と対話をし、目を覚ました。

時間としてはホームルームが終わってまだ数十分といったところだ。

「……………帰るか」

荷物をまとめ一瞬、部活に行こうかと思ったがその考えを捨て、下駄箱まで行くと、茶髪の今風のギャルの格好をした女子がいた。

「ヒッキー!!?」

「……………なんだよ、由比ヶ浜」

由比ヶ浜という女子は八幡を呼び止めると、

「修学旅行のこと早く私とゆきのんに謝って!!?」

「断る」

謝れと言ってきた由比ヶ浜に対し八幡は即座に断り帰ろうとする。

「あら？貴方は、自分のやった事が最低の行為だとわからないの？屑谷君？」

「雪ノ下……」

すると、雪ノ下と呼ばれた少女は八幡に返さないとでもいうように話しかけてきた。

「何の用だ？何も無いなら帰らせてもらいたいんだが」

「先程由比ヶ浜さんが言っていたけど、貴方謝る事すらできないの」

「ああ、謝る事がないからな」

「それを本気で言っているのなら、本当に最低の人間ね」

「なんでこんなのが学校に来てんのかな？」

「こんな屑でも高校くらいは卒業しないと駄目だと思ってるからじゃないのかしら」

「あつ！そっかあゝ」

「……で？そんな事、言いに来ただけなのか？なら、帰らせてもらうが」

「あら？逃げるの？」

「いや、逃げるも何も俺は初めから帰る気だったんだが……」

「貴方の場合は、それを逃げるというのじゃないかしら？修学旅行の一件から目を逸らしたいだけではなくて？」

「はあ、あのn「八、遅いぞ。いつまで私を待たせるつもりだ？」……アリス」

「私は言ったよな？今日は一緒に帰ると」

「ここに来てまでという事じゃないだろ？それに学校では話しかけると言っただろ……」

「ふん、私を待たせるから悪いのだ」

「はいはい、悪かったよ。帰りになんでも奢ってやるから」

「☒なら肉だ！肉が食べたい!!？」

「あいよ、なら帰るぞ」

「ああ!!？」

アリスと呼ばれた長い黒髪を少し三つ編みにした小柄の少女が来て場の空気が急激に変わったことに対してついて行けなかった雪ノ下と由比ヶ浜は八幡達が帰ろうとしたところで漸く言葉が出た。

「少し待ってももらえないかしら？何故、ストレンジさんがいるのかしら？」

「どうしてって言われても……八と帰る約束をしてたんだがいつまでたっても来なかったから迎えに来たんだ」

「屑谷君、ストレンジさんを脅してそんなことを言わせるなんて本当、最低ね。ストレンジさん、安心してこんな屑すぐに警察に突き出してあげるわ」

「ヒツキー、最低だし!!？」

雪ノ下と由比ヶ浜が八幡に対してそういうと、アリスは表情をこわばらせ怒気を込めた声で、

「さつきから聞いてればいい気になって、私は八に脅されてるわけじゃない。第一、八とは3年の付き合いだ見知らぬ仲じゃない」

「そんな嘘つく必要ないわ。それにそれがもし本当だとしても、この男の最低振りは知ってるでしょう？」

「そうだよー!」

「知ってるがそれがどうした？」

「……貴女は何も思わないの？」

「あんな事で八を判断する奴はろくな奴じゃないからな。……八、帰るぞ」

「ああ」

八幡とアリスはその場を立ち去ろうとする。

「待ちなさい!!？」

「待って、ヒツキー!!？」

「はあ、流石にしつこいぞ。毎日毎日謝れだとか言ってきたやつで、これまでの依頼もそうだが修学旅行の一件でお前たちは何かしたか？してないだろ、勝手に依頼を受けて解消したと思ったら、やり方が嫌い？人の気持ちを考えてるだあ？なら行動しろよ、海老名さんの気持ちも考えろよ。それが出来ないなら、分からないなら依頼を解消して

やった俺に突つかかってくるなよ」

いつもとは違ったドスの効いた声でそう言った八幡の豹変具合に二人は後ずさった。

それを見た八幡とアリスは今度こそというようにその場を立ち去った。

「はあ、毎日毎日勘弁して欲しいぜ」

「全くだ。見てるこっちは不快になる」

「で、要望の肉が食いたいってのだが、焼肉の食べ放題で良いか？」

「ああ!!？」

そんな話をしながら二人は学校を後にした。

* * *

外食をしてアリスと別れた後、八幡は家に着く。

「ただいま」

「お兄ちゃん!!？」

「……なんだよ、小町」

「今日も結衣さんと雪乃さんにまた謝らなかつたって本当!!？」

(お前もかよ……)

「本当だが、それがどうした」

「早く謝ってよ！小町このままなんてやだよ!!？」

「……アイツらにも言ったが、謝るつもりはない」

「どうして！」

「俺だけが悪いわけじゃないからだ」

「嘘だよ!!？こんな時は大半お兄ちゃんが悪いからだよ!!？」

小町のその言葉に八幡のナニカが一瞬、何が切れた。

「オマエモカ、コマチ……オマエモソウイウノカ」

雪ノ下達にかけたドスの効いた声ではなく今の八幡はどこか壊れたような声だった。

「ヒツ!!？」

小町がそんな八幡に怯えていると、八幡のスマホから着信音が聞こえた。

相手はアリスだった。

「……ナンダヨ、アリス」

『なんだとはなんだ、全くお前がキレたせいでこっちにも感情が流れ込んできたぞ……気を落ち着かせろ、八』

「……………済まん、アリス」

『落ち着いたか?』

「ああ、ありがとう」

『落ち着いたならいい。今度キレたらそっちに行くからな』

「う、わかった」

『ふ、じゃあ切るぞ?』

「ああ、悪かったな」

そうやって通話を切る。

「……悪かったな、小町。だが、俺だって、人間だ。キレル時もあるそれだけは覚えとけ……」

そう小町に言っただけで八幡は自分の部屋へ向かって行った。

* * *

部屋に入って八幡はベッドに寝そべって小町に言った自分の言葉に疑問を持った。

(人間、か。今の俺はどっちなんだろうな?……………)

「何か聴くか」

スマホを取り出し保存してある曲を選ぶ。

「……………これでいいか」

【cruel CRUEL】を選択しそのまま寝に入った。

〜それから二時間後〜

突然八幡の部屋の扉が開き中に父親が怒りの表情で入ってきた。

「ノックぐらいしろよ、親父」

「煩い! さっき家に帰ってきたら小町が玄関で蹲っていたんだが八幡、お前小町に何したんだ☒」

「少しキレちまったただだよ。別に手は出してない」

「嘘をつけ! ならなんであんなに怯えていたんだ!!?」

「知らねえよ」

そんな言い合いをしていると今度は母親も部屋に入ってきた。

「近所迷惑になるから怒鳴るのはやめなさい。それに八幡の言っていることは本当よ、小町は別に怪我をしてなかったから」

「だが!」

「うるせえな、かあちゃんが言ったら近所迷惑だって」

「それに、何も知らないのに俺と小町の喧嘩に入ってくるんじやねえよ」

「っ!お前と言う奴は!!?」

父親は、八幡の態度に堪忍袋の緒が切れたのか八幡に向かって拳を振りかぶり殴った。

その衝撃で後ろに倒れ机の角に肩を打つ。

「八幡!ちよと、アンタ!!?」

「こんくらい大丈夫だ、かあちゃん」

殴られ、肩を打ったはずの八幡は何もなかったように立ち上がる。

「つたく、俺だから良かったが狭い部屋で殴るなよ?普通は怪我じゃ済まないかぜ」

「は、八幡……アンタ」

「ん?……あ」

八幡の服は肩の部分が机の角に引っかかりかなり大きく破れていた。

そこには数え切れないくらいの切り傷や痣などがあつた。

それを見た父親は絶句し、母親は八幡に問いかけた。

「な、何その傷の数!??」

「あ、あく……昔ちよつとな」

「まさか……いじめられてたつて言うの?」

「まあ……な」

「何で言わなかったの!??」

「別に、我慢できる程度だったから」

「が、我慢できるつて……いつからいじめられてたの?」

「大体小学三年の時からだな」

「いまは?」

「まあ、そんなに過激ではないが」

「そ、そんな……どうして」

「昔は知らんが、今はまあ半ば自業自得とまではいかなくても俺が悪いしな」

「だからってそんな傷……」

「気にすんな、かあちゃんの所為じゃないし」

そう言う八幡に母親はどうとう黙ってしまった。

「あー、俺暫く友達の家に行ってくるわ」

そんな空気に罪悪感を感じた八幡は家を出て行った。

* * *

「と、言う訳なんで少し居させてくれ」

「はあ、全く。入れ」

「悪いな」

家を出た八幡はすぐにアリスの家に向かい、アリスに先程の経緯を話した。

「八もつくづく運が悪いな」

「全くだ。まさか服が引つかかって破れるとは思ってもみなかった」

「で、これからどうするんだ？」

「そうだな……向こうが落ち着くまで暫く泊まりたいんだが？」

「いいぞ」

「サンキュー」

「服とかはどうするんだ？」

「あー、一時間くらいしたら一旦戻って取ってくるわ」

「わかった」

それからは雑談やゲームなどをして時間を潰した。

〜一時間後〜

「じゃあ行ってくるわ」

「ああ、気をつけてな」

家に着くとリビングに両親と小町が暗い表情で話し合っていた。

八幡は気付かれないようにゆっくりと自分の部屋へ向かった。

「ふう……気付かれてないよな？」

耳を澄ませるがこちらにくる音はなかった。

大丈夫だと判断した八幡は荷物をまとめていると、扉の向こうで何かが掠れた音がした。

「……………何だ？」

扉を開け辺りを見ると足元に一通の手紙があった。

手紙には達筆な字で『比企谷八幡殿』と書かれていた。

「これは……………まさか！」

八幡はスマホを取り出して、アリスに掛ける。

『どうした。八？』

「いや、俺の部屋の前に手紙が置いてあつてな？さっきまでなかったからもしかしたらこれが三年前アリスが言つてたヤツかと思つてな」

『その手紙の写真を送つてくれ』

「わかつた」

そう言つて八幡は手紙の写メを送つた。

『……………ああ、コレだ。同じものが私の家にもあつたからな』

「じゃあ、これで俺は、”先生”との約束が果たせる」

『そうだな……………行くか？』

「いや、少し待つてくれ」

『どうした？』

「マツ缶の補充と両親と小町、それに戸塚達に手紙が書きたい」

『八の場合ならマツ缶の補充はいつでも出来るだろう。まあ、手紙はわかつた』

「悪いな」

アリスから貰つた靴を履き窓から飛び降り、コンビニでマツ缶を大量に買ったあと、再び家に戻り八幡は適当なノートを破りそれに手紙を書き、机に二通置いた。

「待たせた」

『いや、大丈夫だ』

「じゃあ行こうk 『八』」

「何だ？アリス」

『無茶だけは……しないでくれ』

「分かってる」

『なら、いい』

「じゃあ、」

『ああ、行こう』

そう言つて電話越しだが一緒に手紙を開く。

手紙には、

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族と、

友人と、

財産を、

世界の全てを捨て、

我らの“箱庭”に来られたし』

その瞬間世界が一転した。

(……)が、俺を必要としてくれる世界、か……)

箱庭という世界を見てそう思った。

YES!ウサギが呼びました!
箱庭の世界と問題児たち

八幡が手紙を開き、その次にきたの謎の浮遊感だった。

「わっ!」

「きやあ!」

「ヤハハハハハ!!?」

『にやああああ!』

「……こりや、何の冗談だ?」

「済まない。八、これは流石に予想してなかった……」

八幡とアリスの他には短髪と長髪の少女、金髪の年上と思われる少年と猫がいた。

そして、八幡が下を見るとかなり下に湖があった。

(落下地点が湖か、俺はアレだが他の奴らは落ち方次第で死ぬな……)

「はあ……面倒な。アリス!!?」

「何だ!」

「このまま落下すると危険だから勢いを殺しながらゆっくり着地する!だから、俺の背に乗れ!!?」

「分かった!!?」

そう言ってアリスは八幡の背に乗った。

その時、八幡の背中に影が出来た。

(まずは、羽の形成)

大きな翼の形を徐々に形成しながらゆっくりと空を羽ばたき始めた。

(よし、後は……)

八幡は両手の間に同じ様に影を作りそこから鴉を作り出し一緒に落ちてきた三人と一匹を足で掴ませる。

そして着地地点の軌道を地面の方にずらしつつ空気抵抗を利用し勢を殺しながら、

「衝撃に備えとけ、アリス!!?」

「ああ!!?」

「3 . 2 . 1 !」

ドスツ、と言う少し重い音を上げながら八幡とアリス、鴉に掴まれた三人と一匹は地面に着地した。

「はあく、本当に最近ついてねえな」

「そうだな」

そんな会話をしていると、

「し、信じられないわ!まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放り出すなんて!」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

(石の中に呼び出されてもそれはそれで面倒だぞ)

「……。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう?」

長髪の少女も八幡と少し違うがほぼ同じことを思っていたようだ。

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

二人の男女はフン、と互いに鼻を鳴らしてそっぽを向く。

するともう一人の少女が、

「此処……どこだろう?」

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか?」

(巨大な蛇は見えなかったがな)

短髪の少女の呟きに少年が応える。

その少年の応えに八幡はそう心の中で思っていたらアリスが、

「八、腹減った」

「数時間前にアレだけ食べて?もう少し待たないか?」

「嫌だ」

「はあ…分かったよ」

そう言って八幡は影からパンを5つくらい取り出しアリスに渡す。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が?」

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正して。

——私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱きかかえている貴女は？」

「……春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。次に、私達を助けてくれた目の腐つてる貴方は？」

「……」

「…おい、八呼ばれてるぞ」

「え？あ、ああ悪い。俺は比企谷八幡だ。よろしく？」

「なぜ疑問形なのかわからないけど、よろしく比企谷君。それでさっきからパンを食べている貴女は？」

「アリス・ストレンジだ。よろしく」

「よろしくアリスさん。最後に野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な

逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人

間なので、用法と容量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

心からケラケラと笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。

我関せず無関心を装う春日部耀。

無心にパンを食べているアリス。

三人を観察しながら怠そうに欠伸をする比企谷八幡。

そんな彼らを物陰から見ている人物は思う。

(うわあ……なんか問題児ばかりみたいですねえ……一名様見覚えがあるような感じがしますが?)

召喚しておいてなんだが……彼らが協力する姿は、客観的に想像出来そうにない。その人物は陰鬱そうに重たくため息を吐くのだった。

十六夜は苛立ちながら、

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。」

この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

「いや、お前も人のこと言えないだろ」

(全くです)

物陰から見る人物はこつそりツツコミを入れた。

ふと十六夜がため息混じりに呟く。

「——仕方がねえな。こうなったら、そこに隠れているやつにでも話を聞くか？」

四人の視線が物陰から見る人物に集まる。

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？お前らも気づいてたんだらう？」

「気配が隠しきれないからな」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「……そうだな。俺も同じくだな、気配も匂いも隠しきれない」

と八幡は耀の方を向いて言った。

「……へえ？面白いなお前ら」

そう軽薄そうに言う十六夜の目は笑っていない。

三人は理不尽な招集を受けた腹いせに殺気の籠もった冷ややかな視線を物陰から見ていた人物に向ける。

かく言う八幡とアリスも三人程ではないがかなりイライラした視線を向ける。

視線を向けられ物陰から見ていた人物はやや怯んだ。

「や、やだなあ御五人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んでしまいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「……」

「え、黒……ウサギ?」

三人は断り八幡は黙って黒ウサギを見る。

しかしアリスは黒ウサギを見て驚いていた。

「え、嘘……アリス?」

黒うさぎも目を大きく開き驚愕していた。

理由としてはアリスは昔、これから説明が入るが黒ウサギが入っているコミュニティにいたからだ。

(嘘……アリスは○○と先生と一緒に外界に追い出されたはず……)

アリスがいたことに考えを巡らせながら半ば放心している——
——と、その時に八幡と何か考えながら、耀は不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、黒いウサ耳を根っこから驚掴み、

「そら」

「えい」

「フギャー!」

力いっぱい引つ張た。

「ちよ、ちよつとお待ちを! 触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どう言う了見ですか!!?」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります!」

「……なあ黒ウサギとやら、再開の余韻に浸るより今は説明をしてくれ」

「あ、すみません……」

と八幡が黒うさぎに対して話していたら、

「へえ?このウザ耳って本物なのか?」

今度は十六夜が右から掴んで引つ張る。

「……。じゃあ私も」

「ちよ、ちよつと待——!」

飛鳥が左から。

左右に力いっぱい引つ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

ちなみにアリスは黒ウサギの様に放心状態になりながら喜びで泣いていたので八幡はそつと寄り添った。

「あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのデス」

「いいからさつきと進めろ」

黒ウサギが半ば本気の涙を瞳に浮かばせながらも、話を聞いてもらえる状況を作ること成功した。八幡を含めた四人は話を聞くだけ聞こうと言う程度には耳を傾けている。

黒ウサギは気を取り戻りて咳払いをし、両手を広げて、

「それではいいですか、御五人様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！ようこそ、”箱庭の世界”へ！我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚しました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気がついていらつしやんでしようが、御五人様は皆、普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその”恩恵”を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に作られたステージなのでございますよ！」

（俺、人間かどうか怪しいんだが？）

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。飛鳥が質問のために挙手をする。

「まず初歩的な質問からしていい？貴女の言う”我々”とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活をする

にあたって、数多とある“コミュニティ”に必ず属していただきます
♪

「嫌だね」

「属していただきます！そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの“
主催者”^{ホスト}が提示した商品を得トできるといってもシンプルな
構造となっております」

「……“主催者”って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試す為の試練と称して
開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自
開催するグループもございます。特徴として、前者は自由参加が多い
ですが“主催者”が修羅神仏なだけあって凶悪かつ難解なものが多
く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。“主催
者”次第ですが、新たな“恩恵”を手にすることも夢ではありません
ん。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者
が敗北すればそれらはすべて“主催者”のコミュニティに寄贈され
るシステムです」

「後者は結構俗物ね……チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間……そしてギフト
を賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度
なギフトゲームに挑む事も可能ですよ。

ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才
能も失われるのであしからず」

愛嬌たっぷりの笑顔に黒い影を見せる黒ウサギ。

「？」

それに対して八幡は不信感を感じた。

そして、挑発的な声音で飛鳥が問う。

「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらってもいいかしら
？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期限内に登録して

いただければOK！商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのではよかつたら参加していつてくださいな」

飛鳥は黒ウサギの発言に片眉をピクリとあげる。

「……つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

お？と驚く黒ウサギ。

八幡はその話の間に入り、

「いや、多分だがこの世界でも元いた世界のように禁止されていることがあると思う。例えば強盗や窃盗、誘拐なんか、

それに、商店があるなら金品での商売自体もあるはずだ。

そして、『ギフトゲーム』は商品なんかの景品を手に入れられるが多分それは勝者が一方的になるものだと考えたんだがどうだ黒ウサギ？」

と言ひ黒ウサギに問う。

「ほぼそのとうりです!!？飛鳥さんの言ったことは八割正解の二割間違いです。比企谷さんが言ったように我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。

ギフトを用いた犯罪などもってのほか！そんな不逞な輩は悉く処罰します——が、しかし！『ギフトゲーム』の本質は全く逆！ここも比企谷さんが言っていたような感じで、一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。店頭に置かれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だということですよ」

「そう、中々野蛮ね」

「ごもつとも。しかし、主催者」は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰ぬけは初めからゲームに参加したければいいだけの話でございます」

黒ウサギは一通りの説明を終えたのか、一枚の封書を取り出した。

「さて。皆さんの召喚を依頼して黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間かかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時ま

でも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニティでお話をさせていたいただきたいのですが……よろしいですか？」

「待てよ。まだ俺が質問してないだろ」

静聴していた十六夜が威圧的な声を上げて立つ。

「……どういった質問ですか？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなものはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かってルールを問いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。」

俺が聞きたいのはたった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の三人を見まわし、巨大な天幕によって覆われた都市に向ける。

彼は何もかもを見下すような視線で一言、

「この世界は……面白いか？」

「」

八幡とアリスを除いた他の二人は無言で返事を待つ。

彼らを読んだ手紙にはこう書かれていた。

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

それに見合うだけの催し物があるのかどうかこそ、五人いや、

三人にとって重要なことだった。

「——YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

世界の果てと逆廻十六夜という問題児

黒うさぎの説明が終わり、箱庭の中へ行く途中で十六夜が八幡に声をかけてきた。

「なあ、比企谷すこし世界の果てまで行って見ねえか？」

「……遠慮しとくわ。面倒な事は起こしたくないからな」

「そうか。じゃあちよっくら行ってくるぜ」

「おう」

そう言い十六夜は世界の果てがあるところまで行くのだった。

そして八幡は、

「……さてと、なあアリス」

「ん？何だ八？」

「粗方の事は昔、先生やお前に聞いたんだが、一つ気になることがある」

「何だ」

「魔王って奴に対して俺の力は通用するのか？」

「ああ、勿論通用する。と言うよりも八のギフトはある種の魔王に対してはキラーといっても過言ではない」

「そうか、なら良い。ありがとう」

「なに、別に良いさ。このくらい」

八幡の疑問に答えたアリスは微笑して黒ウサギの方に更に近づいた。

それから間も無くして箱庭に到着した。

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れてきましたよー！」

ジンと呼ばれる少年がはつと顔を上げる。

外門前の街道から黒ウサギと飛鳥と耀、八幡、アリスが歩いてきた。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性三人と男性……が……」

ジンと呼ばれた少年はアリスの姿を見て何故いるのか、と驚いた。

黒ウサギはそれに対して後で話すと言う様な動きを見せ、ジンを落ち着かせた。

「はいな、こちらのアリスを含めた御五人様が——」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。

カチン、と固まる黒ウサギ。

「……え、あれ？もう一人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から“俺問題児！”ってオーラを放っている殿方が」

「ああ、十六夜君のこと？彼なら“ちよつと世界の果てを見てくるぜ！”と言って駆け出していったわ。あっちの方に」

あっちの方に。と指をさすのは上空4000mから見えた断崖絶壁。

街道の真ん中で呆然となった黒ウサギは、ウサ耳を逆立てて三人に聞いたです。

「な、なんで止めてくれなかったんですか！」

“止めてくれるなよ”と言われたもの」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったんですか!?!？」

“黒ウサギには言うなよ”と言われたから」

「え、あ、本当だ居なくなってるぞ」

「嘘です、絶対嘘です！アリスの反応からして本当に知らなかった様ですが、御二人は実は面倒くさかっただけでしょう！」

「うん」

「あ、ちなみに俺も知らなかったって言う雰囲気を出しているけど比企谷君は十六夜君に誘われていたわよ」

「え、八幡さん！どうして黒ウサギに言ってくれなかったんですか!!？」

「二人と同じで面倒くさかったって言うのじゃダメか？」

「ダメです！」

「じゃあ巻き込まれなくなかった、は？」

「それもダメです!!？」

ガクリ、と前のめりに倒れる。新たな人材に胸を躍らせていた数時間前の自分が妬ましい。

まさかこんな問題児ばかり掴まされるなんて嫌がらせにも程があ

る。

そんな黒ウサギとは対照的に、ジンは蒼白になって叫んだ。

「た、大変です！」世界の果て”にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に”世界の果て”付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？……斬新？」

「いや、逆廻なら大丈夫だろ。パツと見は普通の人間だが、アイツは異常だ。」

暫くすれば帰ってくる」

「ああ、あの金髪なら帰ってくると思うぞ」

「冗談を言っている場合じゃありません！」

(冗談じゃないんだが)

ジンは必死に事の重大さを訴えるが、三人は叱られても肩を竦めるだけである。

黒ウサギは溜息を吐きつつ立ち上がった。

「はあ……ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御三人様とアリスのご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに——」

箱庭の貴族”と謳われるこの黒ウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

黒ウサギは立ち上がって怒りのオーラを全身から噴出させ、

艶のある黒い髪を淡い緋色に染めていく。外門めがけて空中高く飛び上がった黒ウサギは外門の脇にあった彫像を次々と駆け上がり、外門の柱に水平に張り付くと、

「一刻程で戻ります！皆さんはゆっくり箱庭ライフをご堪能くださいませ！」

黒ウサギは、淡い緋色の髪を戦慄かせ踏みしめた門柱に亀裂を入れる。全力で跳躍した黒ウサギは弾丸のように飛び上がり、あつという間に四人の視界から消え去っていった。

巻き上がる風から髪の毛を庇う様に押さえていた飛鳥が呟く。

「……。箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが……」

「…一応俺も行こうか」

八幡の発言にジンは、

「な、何を行っているんですか☒先ほど言いましたがウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持合わせた貴種ですよ！今から行っても追いつけませんよ！」

無理ですとでも言う様に手を振った。

「大丈夫だジン。八なら多分余裕で追いつける」

「あ、アリス姉何を…」

「じゃあ行ってくるぞ」

八幡の脚に黒い靄が現れその瞬間、八幡は黒ウサギよりも速い速度で世界の果てまで駆けて行った。

それに対してジンは、

「か、一体彼は何者ですか…」

「ん？まあ…先生にその実力を認められた、ただ異常で悲しい私の幼馴染みだ」

* * *

八幡が黒ウサギを追い始めて数分がたった。

「この辺から黒ウサギの匂いが強くなった、と言う事は……お、やっぱりいた」

焦りと呆れなど様々な気持ちがかもった顔の黒ウサギを見つけた。

黒ウサギの周囲からは怪しい呻き声が聞こえていた。

「お〜い、黒ウサギ」

「え、は、八幡さんどうしてここに！」

「いや、どうしたってお前を追って来ただけだぞ」

(黒ウサギのスピードについて来た?)

「どうだ逆廻はいたか?」

「い、いえまだ…」

「そうか」

「あのー森の賢者様方。つかぬことをお聞きしますが、もしかしてこの道を通った方を御存じでしょうか?よかつたらこの黒ウサギに道を示していただけますか?」

と話していると……

『よかつたら私が案内しましょうか、黒兎のお嬢さん』

茂みから魑魅魍魎とは違う、静かな蹄の音が響く。現れたのは艶のある青白い胴体と額に角を持つ馬——ユニコーンと呼ばれる幻獣だった。

「こ、これはまた、ユニコーンとは珍しいお方が!」一本角”のコミュニケーションは南側のはずですけれども?」

『それはこちらの台詞です。箱庭の東側で兎を見ることなど、コミュニケーションの公式ゲームのときぐらいだと思っていましたよ——と、お互いの詮索はさておき。貴女の探す少年が私の想像通りならば、私の目指す方角と同じです。森の住人曰く、彼は水神の眷属のゲームを挑んだそうですから』

「うわお」

黒ウサギがクラリと立ち眩み、そのままがつくりと膝を折った。

”世界の果て”と呼ばれる断崖絶壁には箱庭の世界を八つに分かつ大河の終着点、トリトニスの大滝がある。

現在その近辺に住む水神の眷属といえは龍か蛇神のいずれかしかない。

「本当に……本当に……なんでこんな問題児をう……!」

『泣いている暇はないぞ。少年が君の知人なら急いだ方がいい。こここの水神のゲームは人を選ぶ。今ならばまだ間に合うかもしれない。背に乗りたまえ』

「は、はい——わわ!」

「おつ、と」

黒ウサギが跨ろうとした、その時だった。

突如、大地を揺らす地響きが森全体に広がったのだ。すかさず大河の方角を見ると、彼方には肉眼で確認できるほど巨大な水柱が幾つもの立ち上がっている。

「まったく、盛大にやってんな。黒ウサギ先、行くぞ」

八幡はギフトを使いトリトニス大河の方へ駆け出した。

「な!?!」

(あれが八幡さんのギフト…)

『彼のギフト、とてつもなく恐ろしいものをですな』

「え?どう言うことでございませうか?」

『貴女も薄々勘付いてはあるでしょう。彼のギフトは一言で言えば魔王に近い“ナニカ”を感じる』

「……」

『まあ、今はそんなことはいいでしょう。行くのでしょうか?少年の所に』

「はい。でも、すみません。やっぱり黒ウサギ一人で向かった方が良さそうです」

『むう……乙女を一人で危地にやるのは気が進まないが……私では不足かい?』

「はい。もしも貴方を守れないかもしれない。それに失礼ですけど、駆け足で黒ウサギの方が速いですから」

ユニコーンは苦笑いしながら数歩下がる。

『気を付けて。君の問題児君にもよろしく』

黒ウサギは領き、緊張した表情のままトリトニス大河を目指して走り出す。そのわずか数秒で森を抜けて大河の岸辺に出た。

「この辺りのはず……」

「あれ、お前黒ウサギか?どうしたんだその髪の色」

「ああ、やっと来たか……」

背後から八幡と十六夜の声が聞こえた。どうやら十六夜は無事だったらしい。

黒ウサギの胸中に湧き上がる安堵、は全くなく散々振り回されても限界だった。

怒髪天を衝くような怒りを込めて勢いよく振り返る。

「もう、一体何処まで来ているんですか!？」

「世界の果て」まだ来ているんですよ、つと。まあそんなに怒るなよ」

十六夜は無傷だがびしょ濡れの姿で、憎たらしい笑顔も健在だった。

「しかしいい脚だな。比企谷にも言えるが、遊んでいたとはいえこんな短時間で俺に追いつけるとは思わなかった」

「むっ、当然です。黒ウサギは『箱庭の貴族』と謳われる優秀な貴種です。その黒ウサギが」

アレ?と黒ウサギは首を傾げる。

(黒ウサギが……半刻以上もの時間、追いつけなかった……八幡さんの場合は逆に追いつかれた……?)

何度も説明してきた話だが、ウサギは箱庭の世界、創始者の眷属である。

その駆ける姿は疾風より速く、その力は生半可な修羅神仏では手が出せない程だ。

その黒ウサギに気づかれることなく姿を消したことも、追いつけなかったことも、思い返せば人間とは思えない身体能力だった。

「ま、まあ、それはともかく!十六夜さんが無事でよかったです。水神のゲームに挑んだと聞いて肝を冷やしましたよ」

「水神?……ああ、アレのことか?」

え?と黒ウサギは硬直し、八幡はめんどくさいな、と呟いた。

十六夜が川面を指しそれを、黒ウサギが理解する前にその巨体が鎌首を起こし、

『まだ……まだ試練は終わってないぞ、小僧オ!!?』

十六夜が指したそれは——身の丈三十尺強はある巨軀の大蛇だった。

それが何者かを問う必要はないだろう。

間違はなくこの一帯を仕切る水神の眷属だ。

「蛇神……いって、どうやったらこんな怒らせられるんですか十六夜さん!？」

ケラケラと笑う十六夜は事の顛末を話す。

「なんか偉そうに『試練を選べ』とかなんとか、上から目線で素敵なお話を言ってくれたからよ。俺を試せるのかどうか試させてもらったのさ。結果はまあ、残念なやつだったが」

『貴様……付け上がるな人間！我がこの程度の事で倒れるか!!?』

「ま、んな事言っても、圧倒的な力量差で負けてるがな……」

蛇神の甲高い咆哮が響き、牙と瞳を光らせる。巻き上がる風が水柱を上げて立ち昇る。

八幡はそんなことを呑気に言っているが、黒ウサギが周囲を見れば、戦いの傷痕を見てとれる捻じ切れた木々が散乱していた。

あの水流に巻き込まれたが最後、人間の胴体は容赦なく千切れ飛ぶのは間違いない。

「十六夜さん、下がって！一応八幡さんも!!?」

黒ウサギは十六夜を庇おうとするが、十六夜の鋭い視線がそれを阻んだ。

「何を言ってるやがる。下がるのはテメエだろうが黒ウサギ。これは俺が売って、奴が買った喧嘩だ。手を出せばお前から潰すぞ」
「了解」

本気の殺気が籠もった声音だった。

黒ウサギも始まってしまったゲームには手出しができないと気付いて歯噛みする。

八幡は言われた通り少し離れたところまで退避する。

十六夜の言葉に蛇神は息を荒くして応える。

『心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

求めるまでも無く、勝者は既に決まっている。

その傲慢極まりない台詞に黒ウサギも蛇神も呆れて閉口した。
八幡は面白いものを見たように少し口角を上げていた。

『ブン——その戯言が貴様の最後だ!』
蛇神の雄叫びに応えて嵐のように川が巻き上がる。

竜巻のように渦を巻いた水柱は蛇神の丈よりも遥かに高く舞い上がり、何百トンもの水を吸い上げる。

竜巻く水柱は計四本。

それぞれ生き物のように唸り、蛇のように襲いかかる。

この力こそ時に嵐を呼び、時に生態系さえ崩す、“神格”のギフトを持つ者の力だった。

「まって、なんで一本俺の方来てるの☒」

何故か水柱の一本は八幡の方へ逸れていった。

「十六夜さん、八幡さん!」

黒ウサギが叫ぶ。

しかしもう遅い。

竜巻く水柱は川辺を抉り、木々を捻じ切り、八幡と十六夜の体を激流に呑み込む——

「——ハッ————しゃらくせえ!!?」

「……はあ、今日は厄日かよ。影よ目の前の障害を切り裂け」

突如発生した、嵐を超える暴力の渦と八幡から伸びる影。

十六夜ら竜巻く激流の中、ただ腕の一振りでなぎ払い、八幡は影操り水柱を細切れに切り裂いた。

「嘘!」

『馬鹿な!』

驚愕する二つの声。

それはもはや人智を遥かに超越した力である。

蛇神は全霊の一撃を弾かれ切り裂かれ放心するが、十六夜はそれを見逃さなかった。

凜猛な笑いと共に着地した十六夜は、

「ま、中々だったぜオマエ」

大地を踏み砕く爆音。

胸元に飛び込んだ十六夜の蹴りは蛇神の胴体を打ち、蛇神の巨軀は空中高く打ち上げられて川に落下した。

その衝撃で川が氾濫し、水で森が浸水する。

また全身を濡らした十六夜はバツが悪ように川辺に戻った。

「くそ、今日はよく濡れる日だ。クリーニング代ぐらいは出るんだよな黒ウサギ」

「それに関しては同意見だ。まったく黒ウサギを追ってなんで俺まで濡れるんだよ」

そんな事を二人は言っているが黒ウサギには届かない。

彼女の頭の中はパニックでもうそれどころではなかったのだ。

（人間が……神格を倒した!? 八幡さんも神格の攻撃を一步も動かずいとも簡単に破った!? そんなデタラメが——!）

ハツと黒ウサギは思い出す。彼らを召喚するギフトを与えた”主催者”の言葉を。

「彼らは間違いなく——人類最高クラスのギフト保持者よ、黒ウサギ」

黒ウサギはその言葉を、リップサービスか何かだと思っていた。信用できる相手だったが、ジンにそう伝えた黒ウサギ自身も”主催者”の言葉を眉唾に思っていた。

（信じられない……だけど、本当に最高クラスのギフトを保持しているのなら……! 私達のコミュニティ再建も、本当に夢じゃないかもしれない!）

黒ウサギは内心の興奮を抑えきれず、鼓動が速くなるのを感じ取っていた。

「おい、どうした? ボーっとしてると胸とか脚とか揉むぞ?」

「え、きやあー!」

「おい、それセクハラ発言」

黒ウサギの背後に回った十六夜は脇下から豊富な胸に、ミニスカートとガードーの間から脚の内股に絡むように手を伸ばしていた。

八幡は呆れ、感動を忘れ叫び黒ウサギは押しつけて跳び退く。

「な、ば、おば、貴方はお馬鹿です!?! 二百年守ってきた黒ウサギの体操

に傷をつけるつもりですか!？」

「二百年守った貞操? うわ、超傷つけたい」

「お馬鹿!! いいえ、お馬鹿!!」

「はぁ……」

疑問形から確定形に言い直して罵る。

ウサギという種は総じて容姿端麗・天真爛漫・強靱不屈で献身的という何処かの誰かの愛玩趣味を詰め込んだような種族である。

故に彼女を狙って襲ってきた賊の数は星の数ほどいた。

しかし、身がすり合う程の距離まで反応できなかつた相手はいなかつたし、ましてや脇の下から胸に触れる寸前まで許してしますようなお馬鹿、もとい変態はいなかつた。

「ま、今はいいや。今後の楽しみにとっておこう」

「さ、左様デスカ」

ヤハハと笑う期待の新星は黒ウサギの天敵かもしれない。

ウサギは一瞬だけ遠い目をした。

「と、ところで十六夜さん。その蛇神様はどうされます? というか生きてます?」

「命まで取ってねえよ。戦うのは楽しかったけど、殺すのは別段面白くもないしな。」世界の果て”にある滝を拝んだら箱庭に戻るさ」

「ならギフトだけでも戴いておきましょう。ゲームの内容はどうであれ、十六夜さんは勝者です。蛇神様も文句はないでしょうから」
「あん?」

十六夜が怪訝な顔で黒ウサギを見つめ返す。

黒ウサギは思い出したように補足した。

「神仏とギフトゲームを競い合う時は基本三つの中から選ぶんですよ。最もポピュラーなのが”力”と”知恵”と”勇気”ですね。力比べのゲームをする際は相応の相手が用意されるものなんですけど……十六夜さんはご本人を倒されましたから。きっと凄いものを戴けますよー。これで黒ウサギ達のコミュニテイも今より力をつける事が出来ますよ♪」

そう言つて黒ウサギは小躍りをしそうな足取りで大蛇に近寄る。

しかし十六夜は不機嫌な顔で黒ウサギの前に立った。

「な、なんですか十六夜さん。怖い顔をされていますが、何か気に障りましたか？」

「……別にイ。お前の言うことは正しいぜ。勝者から得るのはギフトゲームとしては間違いなく真つ当なんだろうよ。だからそこに不服はねえ——けどな、黒ウサギ」

十六夜の軽薄な声と表情が完全に消える。

応じて黒ウサギの表情も硬くなる。

「オマエ、なにか決定的な事をずっと隠しているよな？」

「……なんのことですか？箱庭の話ならお答えすると約束しましたし、ゲームの事も」

「違うな。俺が聞いているのはオマエ達の事——いや、核心的な聞き方をするぜ。黒ウサギ達はどうして俺達を呼び出す必要があったんだ？」

十六夜の質問に表情には出さなかったが黒ウサギは動揺していた。

それは黒ウサギが隠していたものだからだ。

「それは……言ったとおりです。十六夜さん達にオモシロオカシク過ごしてもらおうかと」

「ああ、そうだな。俺も初めは純粋な好意か、もしくは与り知らない誰かの遊び心で呼び出されたんだと思っていた。俺は大絶賛“暇”の大安売りしていたわけだし、他の四人も異論が上がりなかつたってことは、箱庭に来るだけの理由があつたんだろうよ。だからオマエの事情なんて特に気にかからなかつたが——オマエがストレンジを見たときのあの反応。それと、なんだかな。俺には、黒ウサギが必死に見える」

その時、初めて黒ウサギは動揺を表情に出した。

瞳は揺らぎ、虚を衝かれたように見つめ返す。

「これは俺の勘だが。黒ウサギのコミュニティは弱小のチームか、もしくは訳あって衰退しているチームか何かじゃねえのか？だから俺達は組織を強化するために呼び出された。そう考えれば今の行動や、

俺がコミュニティに入るのを拒否した時に本気で怒ったことも合点がいく——どうよ？百点満点だろ？」

「っ……………」

黒ウサギはそのことを知られてしまうのは余りにも痛手で内心で痛烈に舌打ちした。

苦労の末に呼び出した超戦力、手放すことは絶対に避けたかった。

「んで、この事実を隠していたってことはだ。俺達にはまだ他のコミュニティを選ぶ権利があると判断できるんだが、その辺どうよ？」

「……………」

「はあ、黒ウサギオマエの負けだ。話してやれさもないと逆廻は別のコミュニティに行っちゃまうぞ」

「や、だ、駄目です！いえ、待つてください！」

「だから待つてるだろう。ホラ、いいから包み隠さず話せ。ってか、何で比企谷は知ってるんだ？」

「ある人とアリスに昔聞いてたからな。黒ウサギと知り合いだったってのは知らなかったが」

「ほーん」

十六夜は川辺にあった手頃な石に腰を下ろし聞く体勢をとり、八幡は石の上に寝そべった。

黒ウサギはコミュニティの現状を話すのはリスクが大きかった。(せめて気づかれたのがコミュニティの加入承諾をとってからなら良かったのに……………)

承諾をとってしまったえばなし崩しにコミュニティの再建を手伝ってもらうつもりだったのだが、相手は世界屈指の問題児集団なのだ。

「ま、話さないなら話さないでいいぜ？俺はさっさと他のコミュニティに行くだけだ」

「……………話せば、協力していただけますか？」

「ああ。面白ければな」

笑ってはいるが、目が笑っていない十六夜を見て黒ウサギは己の目が曇っていたことによく気付いた。

八幡もそうだが他の二人の少女と違い、この軽薄そうな少年の瞳は

”箱庭の世界”を見定めることに真剣だった。

「まあ、安心しろ黒ウサギ。多分逆廻の好きなタイプの話だから安心して話せ」

「……分かりました。それでは黒ウサギもお腹を括って、精々オモシロオカシク、我々のコミュニティの惨状を語らせていただこうじゃないですか」

「じゃあ、終わったら起こしてくれ」

そして、八幡は自身の影に手を突っ込みヘッドホンとスマホを取り出し、音楽を聴き始めた。

黒ウサギはそれを見て目を丸くしたが、コホン、と咳払いをし内心ではほとんど自棄っぱちだった。

「まず私達のコミュニティには……（略）」

* * *

黒ウサギが話し始めて数分が経過し、

「……さん……八……さん、八幡さん」

「ん？……終わったのか？」

「あ、はい。十六夜さんはコミュニティ再建に協力してくれると言ってくれました!!？」

「そうか、良かったな」

「はい!……それで、八幡さんも私達のコミュニティ再建を手伝っていただけますか？」

「元よりそのつもりだ」

「ありがとうございます!!？」

「で、逆廻は？」

「トリトニスの大滝にいますよ」

「そうか、じゃあ俺らも行くか」

「はい」

八幡と黒ウサギはトリトニスの大滝に行った。

「ん？比企谷は起きたのか」

「ああ、さつきな。……それにしてもいい景色だな。今度アリスを誘って来てみるか」

トリトニスの滝は夕焼けの光を浴びて朱色に染まり、跳ね返る激しい水飛沫が数多の虹を創りだしている。

楕円形のようにも見える滝の河口は遙か彼方にまで続いており、流水は“世界の果て”を通って無限の空に投げ出されていた。

絶壁から飛ぶ激しい水飛沫と風に煽られながら黒ウサギは説明する。

「どうですか？横幅の全長は約2800mもあるトリトニスの大滝でございます。こんな滝は十六夜さん達の故郷にもないのでは？」

「……ああ。素直にすぎえな。ナイアガラのごつと二倍以上の横幅つてわけか。この“世界の果て”の下はどんな感じになってるんだ？やっぱり大亀が世界を支えているのか？」

一部の天動説の地下では、世界は球体ではなく水平に広がり、大亀の背中に追われているというものがある。十六夜はそれが気になっているのだろう。

十六夜は下に大亀がいると思って楽しそうに断崖絶壁に顔を覗き出した。下は奈落のように暗い場所を想像していたのだが、絶壁の下の先も夕焼けで染まった空が広がっている。

「残念ながらNOですね。この世界を支えているのは“世界軸”と呼ばれる柱でございます。何本あるの定かではありませんが、一本は箱庭を貫通しているあの巨大な主軸です。この箱庭の世界がこのように不完全な形で存在しているのは、何処かの誰かが“世界軸”を一本引き抜いて持ち帰った、という伝説もあるのですが……」

「はは、それはすぎえな。ならその大馬鹿野郎に感謝しねえと」

太陽が沈むにつれてより色濃く朱に染まるトリトニスの大滝を眺めつつ、ふと思いついたように黒ウサギに問う。

「トリトニスの大滝、だったな。ココを上流を遡ればアトランティスでもあるのか？」

「さて、どうでしょう。箱庭の世界は恒星と同じ表面積と会う広大さに加え、黒ウサギは箱庭の外の事をあまり存じ上げません。しかし……箱庭の上層にコミュニティの本拠を移せば、閲覧できる資料の中にそういうものがあるかもですよ？」

「ハッ。知りたければそこまで協力しろってことか？」

「いえいえ。ロマンを追求するのであるれば、という黒ウサギの勧めでございませよ？」

「それはどうもご親切様」

絶景を楽しむためのポイントを探し始めた十六夜は、思い出したように語る。

「ま、こんなデタラメで面白い世界に呼び出してくれたんだ。その分の働きはしてやる。けど他の三人の説得には協力しないからな。騙すも誑かすのも構わないが、後腐れないように頼むぜ。同じチームでやっていくなら尚更な」

「あ、三人じゃないぞ、アリスは元から協力するつもりだ。俺の場合ある人との約束つてのものもあるが、アリスがいたコミュニティだ、ここに来た時から協力はするつもりだったからな」

「……はい」

黒ウサギは心の中で深く反省する。

問題児だからといってこれから同じコミュニティで戦っていく仲間なのだ利用するような事をすれば得られる信用も得られなくなる。

コミュニティが大事だったあまり、その意識が黒ウサギの中で低くなっていたのだ。

新たな同士である彼らには失礼極まりない話である。

(初めからちゃんと説明すれば良かったな……ジン坊ちゃん、大丈夫でしようか)

「あ、そうだ。言い忘れてた、アリス達どうやら面倒ごとに絡まれたみたいだぞ」

「へ?..」

サウザンドアイズとギフトゲームと再会【前編】

八幡達が箱庭に戻り、噴水広場で合流。話を聞いた黒ウサギは案の定ウサ耳を逆立てて怒っていた。

突然の展開に嵐のような説教と質問が飛び交う。

「な、なんであの短時間に”フォレス・ガロ”のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!?”

「しかもゲームの日取りは明日!?”

「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!?”

「準備している時間もお金もありません!?”

「一体どういう心算《つもり》があつてのことです!?”

「聞いているのですか四人とも!!?”

「”ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています”」

「黙らっしやい!!!”

誰が言い出したのか、まるで口裏を合わせていたかのような言い訳に激怒する黒ウサギ。

それをニヤニヤと笑って見せていた十六夜が止めに入る。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩を売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

「そうだな。相手が善人ならまだしもコミュニティを大きくする為に人質を取り、ましてやその人質を殺したような奴だ。コイツらの性格なら見過ごす事は出来ないな」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思っっているかもしれないけど、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ?この”契約書類”を見てください」

黒ウサギの見せた”契約書類”は”主催者権限”を持たない者達が”主催者”となつてゲームを開催するために必要なギフトである。

そこにはゲーム内容・ルール・チップ・賞品が書かれており”主催者”のコミュニティのリーダーが署名することで成立する。

黒ウサギが指す賞品の内容はこうだ。

”参加者が勝利した場合、主催者は参加者は言及する全ての罪を認

め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する
”——まあ、確かに自己満足だ。時間をかければ立証できる
のを、わざわざ取り逃がすリスクを背負ってまで短縮させるんだから
な”

ちなみに飛鳥達のチップは”罪を黙認する”というものだ。

それは今回に限ったことではなく、これ以降もずっと口を閉ざし続
けるという意味である。

「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の
子供達は……その、」

「黒ウサギ。今、もし俺達がガルドとかいう奴の事を見逃したら高確
率でそいつは箱庭の外に逃げる。仮に、ノーネームのガキ共が拐われ
た挙句殺されてみる、お前は焦らず怒らず、冷静でいられるか？……
まあ確かに、人質は既にいねえし責め立てれば証拠は出る。だが多
分、ここにいるコイツらはそれを望んじやいねえよ」

「ツーそ、それは……」

黒ウサギは八幡に言われたことに言葉を詰まらせる。

箱庭の法は箱庭内でしか有効ではない、つまり箱庭外に出られたら
裁けないのだ。

しかし”契約書類”による強制執行ならばどれだけ逃げようとも、
強力な”契約”でガルドを追いつめられる。

「そうね、あの外道を裁くのになんか時間をかけたくないの」

「それにね、黒ウサギ。私は道德云々よりも、あの外道が私の生活範囲
内で野放しにされることも許さないの。ここで逃せば、いつかまた
狙ってくるに決まってるもの」

「ま、まあ……逃げれば厄介かもしれないですけど」

「僕もガルドを逃がしたくないと思っっている。彼のような悪人は野放
しにしちやいけない」

ジンも同調する姿勢を見せ、黒ウサギは諦めたように頷いた。

「はあ……仕方がない人達です。まあいいです。腹立たしいのは黒
ウサギも同じです。」フォレス・ガロ”程度なら十六夜さんか、八
幡さんがいれば楽勝でしょう」

しかし十六夜と八幡、飛鳥は怪訝な顔をして、

「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ?」

「当たり前よ。貴方なんて参加させないわ」

「話を聞く限りガルドは大して強くないだろ?アリスがいれば十分だろ?」

「当然だ。あんな外道、正直言って私一人で十分だ」

黒ウサギは慌ててそう言う四人に食ってかかる。

「だ、駄目ですよ!御四人とアリスはコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」

十六夜が真剣な顔をして黒ウサギを右手で制する。

「いいか?この喧嘩は、コイツらが売った。そしてヤツらが買った。なのに俺らが手を出すのは無粋だって言ってるんだよ」

「そうだな、それになコイツらが始めたことに手を出すのはコイツらの実力を信用していないのと同じだ。まあ、俺や逆廻を見た後だとそうなるのも仕方ないかもしれんがな。それでも、コイツらはオマエらと呼んだんだ、信じてみるよ」

「あら、分かってるじゃない」

「…………。ああもう、好きにしてください」

丸一日振り回され続けて疲弊した黒ウサギはもう言い返す気力も残っていない。

どうせ失うものは無いゲーム、もうどうにでもなればいと呟いて方を落とすのだった。

* * *

その後黒ウサギの謝罪、食事お風呂、といった話があった。

そして、ギフト鑑定のために”サウザンドアイズ”というコミュニティに向かうことになった。

道中、八幡・アリス・十六夜・飛鳥・耀の四人は興味深そうに街並みを眺めていた。

商店へ向かうペリベッド通りは石造で整備されており、脇を埋める街路樹は桃色の花を散らして新芽と青葉が生え始めている。

日が暮れて月と街灯ランプに照らされている並木道を、飛鳥は不思議そうに眺めて呟く。

「桜の木……ではないわよね？花弁の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ？気合の入った桜が残っているもおかしくないだろ」

「……？今は秋だったと思うけど」

「今は、冬に入る一歩手前だった筈だが？」

「そうだな」

ん？だと噛み合わない五人は顔を見合わせて首を傾げる。

黒ウサギが笑って説明した。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのです。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系などの所々違う箇所があるはずですよ」

「へえ？パラレルワールドってやつか？」

「いや、立体交差並行世界論ってやつじゃないか？」

「八幡さんよくご存知で、まあコレの説明を始めますと一日二日では説明しきれないので、またの機会ということに」

「八、よく知ってたな」

「ま、まあな」

（黒歴史時代の時の知識とは言いたくねえ）

曖昧に濁らして黒ウサギは振り返る。

どうやら店に着いたらしい。

商店の旗には、蒼い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されている。

あれが”サウザンドアイズ”の旗なのだろう。

日が暮れて看板を下げる割烹着の女性店員に、黒ウサギは滑り込みスタツプを、

「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

……スタツプをかける事も出来なかった。

黒ウサギは悔しそうに店員を睨みつける。

流石は超大手の商業コミュニティ。

押し入る客の拒み方にも隙がない。

「なんて商売っ気の無い店なのかしら」

「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「出禁!?これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ!?!」

喚く黒ウサギに対して店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応する。

「なるほど、”箱庭の貴族”であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか?」

「……う」

一転して言葉に詰まる黒ウサギ。

しかし十六夜は何の躊躇いもなく名乗る。

「俺達は”ノーネーム”ってコミュニティなんだが」

「ほほう。ではどこの”ノーネーム”様でしょう。よかつたら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか?」

ぐ、つと黙りこむ。黒ウサギが言っていた”名”と”旗印”がないコミュニティのリスクとはまさにこういう状況の事だった。

（ま、まずいです。”サウザンドアイズ”の商店は”ノーネーム”御断りでした。このままだと本当に出禁にされるかも）

（成る程な、こりゃ厄介なことだ）

力のある商店だからこそ彼らは客を選ぶ。

信用できない客を扱うリスクを彼らは冒さない。

八幡はノーネームの対応と状況の悪さを感じるいた。

視線が黒ウサギに集中し、心の底から悔しそうな顔をして、小声で呟いた。

「その……あの……私達に、旗はありま」

「いいいいやおおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイ！」

黒ウサギは店内から爆走してくる着物風の服を着た真っ白い髪の少女に抱き（もしくはフライングボディーアタック）つかれ、少女と共にクルクルクルクと空中四回転半ひねりして街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛んだ。

「きやあー……！」

ボチャン。そして遠くなる悲鳴。十六夜達は眼を丸くし、店員は痛そうに頭を抱えていた。

「……おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？なら俺も別バージョンでは非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

「何だこの状況」

真剣な表情の十六夜に、真剣な表情でキツパリ言い切る女性店員。

二人は割とマジだった。

この状況に八幡は呆れた。

フライングボディーアタックで黒ウサギを強襲した白い髪の幼い少女は、黒ウサギの胸に顔を埋めてなすり付けていた。

「し、白夜叉様!?!どうして貴女がこんな下層に!?!」

「そろそろ黒ウサギが来ると予感しておったからに決まってるだろに！フフ、フホフホホ！やっぱりウサギは触り心地が違うのう！ほれ、ここが良いかここが良いか！」

スリスリスリスリ。

「し、白夜叉様！ちよ、ちよつと離れてください！」

白夜叉と呼ばれた少女を無理やり引き剥がし、頭を掴んで店に向かって投げつける。

くるくると縦回転をした少女を、十六夜は足で八幡の方へ蹴り飛ばした。

「ほい、パス」

「コバア！」

「なんで？」

八幡は面倒くさいと思いつつながら白夜叉をキャッチする。

「す、すまんの。お、おんし、飛んできた初対面の美少女を足で蹴り上げるとは何様だ！」

「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ」

ヤハハと笑いながら自己紹介する十六夜。

一連の流れの中で呆気にとられていた飛鳥は、思い出したように白夜叉に話しかける。

「貴女はこの店の人？」

「おお、そうだとも。この“サウザンドアイズ”の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢の割に発育がいい胸をワンタツチ生揉みで引き受けるぞ」

「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります」

何処までも冷静な声で女性店員が釘を刺す。

濡れた服やミニスカートを絞りながら水路から上がってきた黒ウサギは複雑そうに呟く。

「うう……まさか濡れる事になるなんて」

「因果応報……かな」

『お嬢の言う通りや』

悲しげに服を絞る黒ウサギ。

反対に濡れても全く気にしない白夜叉は、店先で十六夜達を見回してにニヤリと笑った。

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たという事は……遂に黒ウサギが私のペットに」

「なりません！ どういう起承転結があつてそんなことになるんですか！」

ウサ耳を逆立てる黒ウサギ。何処まで本気かわからない白夜叉は笑って店に招く。

「まあいい。話があるなら店内で聞こう」

「よろしいのですか？ 彼らは旗も持たない”ノーネーム”のはず。規定では」

”ノーネーム”だと分かっているながら名を尋ねる、性悪店員に対す

る詫びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ」

ルールを守った店員は気を悪くしてま、っとした顔をした。

女性店員に睨まれながら暖簾をくぐった五人と一匹は、店の外界からは考えられない、不自然な広さの中庭に出た。

正面玄関を見れば、ショーウィンドウに展開された様々な珍品名品が並んでいる。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

五人と一匹は和風の中庭を進み、縁側で足を止める。

するとその前には八幡がいた。

「八幡さん？あれ？いつの間そこに……」

「お前らが話し合ってる時に普通に店の中に入って迷子になってた」

「よくあの店員に止められなかったな……」

「気付かれなかった」

「ん”ん”，まあ部屋に入らんか話をしたいのでな」

白夜叉がそう言い個室というにはやや広い和室の上座に腰を下ろし大きく背伸びをしてから八幡達に向き直る。

気づけば白夜叉の着物は乾ききっていた。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている”サウザンドアイズ”幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があったな。コミュニティが崩壊してからもちよちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。

その隣で耀が小首を傾げて問う。

「その外門、って何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つもの達が住んでいるのです」

此処、箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴ってそれぞれを区切る門には数字が与えられている。

外壁から数えて七桁の外門、六桁の外門、と内側に行くほど若くなり、同時に強大な力を持つ。箱庭で四桁の外門ともなれば、名のある修羅神仏が割拠する完全な人外魔境だ。

黒ウサギが描く上空から見た箱庭の図は、外門によって幾重もの階層に分かれている。

その図を見た五人は口を揃えて、

「……超巨大タマネギ?」

「いえ、超巨大バームクーヘンでないかしら?」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

「ああ、バームクーヘンだな」

「バームクーヘン、かあ……八」

「あいよ」

うん、と頷き合う四人。身も蓋もない感想にガクリと肩を落とす黒ウサギ。アリスは八幡に頼み。影から取り出されたバームクーヘンを食べている。

対照的に、白夜叉は呵々と哄笑を上げて二度三度と頷いた。

「ふふ、うまい例え。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は”世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこにはコミュニティに所属していないものの、強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ——その水樹の持ち主などな」

白夜叉は薄く笑って黒ウサギが持つ水樹の苗に視線を向ける。白夜叉が指すのはトリトニスの滝を棲みかにしていた蛇神の事だろう。「して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ? 知恵比べか? 勇気を試したのか?」

「いえいえ。この水樹ら十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

自慢げに黒ウサギが言うと、白夜叉は声を上げて驚いた。

「なんと!? クリアではなく直接的に倒したとな!? ではその童は神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格なら一目見れば分かるはずですよ」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではどんぐりの背比べだぞ」

神格とは生来の神様そのものではなく、種の最高のランクに体を変化させるギフトを指す。

蛇に神格を与えれば巨軀の蛇神に。

人に神格を与えれば現人神や神童に。

鬼に神格を与えれば天地を揺るがす鬼神と化す。

更に神格を持つことで他のギフトも強化される。箱庭にあるコミュニティの多くは各々の目的のため神格を手に入れることを第一目標とし、彼らは上層を目指して力をつけているのだ。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」

小さな胸を張り、呵々と豪快に笑う白夜叉。

だがそれを聞いた十六夜は物騒に瞳を光らせて問いただす。

その表情を見た八幡は嫌な予感を感じていた。

「へえ?じゃあオマエはあのへびより強いのか?」

「ふふん、当然だ。私は東側の”階層支配者”だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニティでは並ぶものがない、最強の主権者なのだからの」

”最強の主権者”——その言葉に、十六夜・飛鳥・耀の三人は一斉に瞳を輝かせた。

「そう……ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかしら?」

「無論、そうなる」

「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」

三人は剥き出しの闘争心を視線に込めて白夜叉を見る。白夜叉は

それに気づいたように高らかと笑い声をあげた。

「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギルドゲームを挑むと?」

「え? ちよ、ちよつと御三人様!?!」

「ああ、やつぱり。予想した通りになった……」

「実力の差も測れないとは……」

慌てる黒ウサギを右手で制す白夜叉。

八幡とアリスは三人の行動に呆れていた。

「良い黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」

「ノリがいいわね? そういうの好きよ」

「ふふ、そうか。——しかし、ゲームの前に一つ確認しておく事がある」

「なんだ?」

白夜叉は着物の裾から“サウザンドアイズ”の旗印——向

かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、

「おんしらが望むのは”挑戦”か——もしくは、”決闘”か?」

刹那、五人の視界に爆発的な変化が起きた。

五人の視界は意味を無くし、様々な情景が脳裏で回転し始める。

脳裏を掠めたのは、黄金色の穂波が揺れる草原。白い地平線を覗く

丘。森林の湖畔。

記憶にない場所が流転を繰り返し、足元から五人を呑みこんでいく。

五人が投げられたのは、白い草原と凍る湖畔——そして、水平に太陽が廻る世界だった。

「……なっ……!?!」

余りの異常さに、八幡達は同時に息を呑んだ。

箱庭に招待された時とはまるで違うその感覚は、もはや言葉で表現出来る御技ではない。

遠く薄明の空にある星は只一つ。緩やかに世界を水平に廻る。白い太陽のみ。

まるで星を一つ、世界を一つ創り出したかのような奇跡の顕現。

唾然と立ち竦む五人に、今一度、白夜叉は問いかける。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は”白き夜の魔王”——
太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への” 挑戦
”か？それとも対等な”決闘”か？」

魔王・白夜叉。少女の笑みとは思えぬ凄味に、再度息を呑む五人。

”星霊”とは、惑星級以上の星に存在する主精霊を指す。妖精や
鬼・悪魔などの概念の最上級種であり、同時にギフトを”与える側”
の存在でもある。

十六夜は背中に心地いい冷や汗を感じ取りながら、白夜叉を睨んで
笑う。

「水平に廻る太陽と……そうか、白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽や
この大地は、オマエを表現してるってことか」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽
こそ、私が持つゲーム盤の一つだ」

白夜叉が両手を広げると、地平線の彼方の雲海が瞬く間に裂け、薄
明の太陽が晒される。

”白夜”の星霊。十六夜の指す白夜とは、フィンランドやノル
ウェーといった特定の経緯の位置する北欧諸国などで見られる、太陽
の沈まない現象である。

そして”夜叉”とは、水と大地の神霊を指し示すと同時に、悪神と
しての側面を持つ鬼神。

数多の修羅神仏が集うこの箱庭で、最強種と名高い”星霊”にして
”神霊”。

彼女はまさに、箱庭の代表ともいえるほど——強大な”魔王
”だった。

「これだけの莫大な土地が、ただのゲーム盤……!?!」

「如何にも。して、おんしらの返答は?”挑戦”であるならば、手慰み程
度に遊んでやる。——だがしかし”決闘”を望むなら話は別。
魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか」

「……………」

「やる訳ねえだろ……挑戦だ」

「同じく挑戦」

「ほう、おんしら二人は挑戦か……して、残りの三人はどうする」

八幡とアリスは即答したが飛鳥と耀、そして自信家の十六夜でさえ即答できずに返事を躊躇った。

白夜叉がいかなるギフトを持つかは定かではない。だが勝ち目がないことだけは一目瞭然だ。

しかし自分達が売った喧嘩を、このよう形で取り下げんにはプライドが邪魔した。

しばしの静寂の後——諦めたように笑う十六夜が、ゆっくりと拳手し、

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」

「ふむ？それは決闘ではなく、試練を受けるという事かの？」

「ああ。これだけのゲーム盤を用意出来るんだからな。アンタには資格がある。——いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

苦笑と共に吐き捨てるような物言いをした十六夜を、白夜叉は堪えきれず高らかと笑い飛ばした。プライドの高い十六夜にしては最大限の譲歩なのだろうが、『試されやる』とは随分可愛らしい意地の張り方があったものだ。白夜叉は腹を抱えて哄笑をあげた。

一頻りに笑った白夜叉は笑いを噛み殺して他の二人にも問う。

「く、くく……して、他の童達も同じか」

「……ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

苦虫を噛み潰したような表情で返事をする二人。満足そうに声を上げる白夜叉。

一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホッと胸をなでおろす。

「も、もう！互いにもう少し相手を選んでください！“階層支配者”に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う“階層支配者”なんて、冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!？」

「何？じゃあ元・魔王様ってことか？」

「はてさて、どうだったからな？」

「おいおい、俺とアリスは何もしてないだろ」

「そうだぞ、黒ウサギ」

白夜叉はケラケラと悪戯っぽく笑い、八幡とアリスは喧嘩を売ったことに含まれたことを否定していた。ガクリと肩を落とす黒ウサギ。

その時、彼方にある山脈から甲高い叫び声が聞こえた。獣とも、野鳥とも思えるその叫び声に逸早く反応したのは、八幡と耀だった。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「野鳥でも、獣でもないどちらかというところと二つが混ざった鳴き声だったな」

「ふむ……あやつか。おんしら三人を試すには打って付けかもしれないの」

「ん？三人？五人じゃなくてか？」

「ああ、おんしら二人は別の挑戦を受けてもらう」

八幡とアリスに言い湖畔を挟んだ向こう岸にある山脈に、チョイと手招きをする白夜叉。すると体長5mはあるうかという巨大な獣が翼を広げて空を滑空し、風の如く五人の元に現れた。

わしの翼と獅子の下半身を持つ獣を見て、耀は驚愕と歓喜の籠った声を上げた。

「グリフォン……嘘、本物!？」

「フフ、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。」力” ” 知恵

” ” 勇気” の全てを備えた、ギフトゲームを代表する獣だ」

白夜叉が手招きする。グリフォンは彼女のもとに降り立ち、深く頭を下げて礼を示した。

「さて、肝心の試練だがの。おんしら三人とこのグリフォンで”力”

” 知恵” ” 勇気” の何れかを比べ合い、背に跨って湖畔を舞う事が出来ればクリア、という事にしようか」

白夜叉が双女神の紋が入ったカードを取り出す。すると虚空から” 主催者権限” にのみ許された輝く羊皮紙が現れる。白夜叉は白い指を奔られて羊皮紙に記述する。

『ギフトゲーム名 ” 鷲獅子の手綱”

・プレイヤー一覧

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・クリア条件 グリフオンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法 ” 力” ” 知恵” ” 勇気” の何れかでグリフオンに認められる。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなかった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。 ” サウザンドアイズ” 印』

「私がやる」

読み終えるや否やピシ！と耀が拳手した。比較的にな大人しい彼女にしては珍しく熱く羨望の視線でグリフオンを見つめていた。

『お、お嬢……大丈夫か？なんや獅子の旦那より遥かに怖そうやしデカイけど』

「大丈夫、問題ない」

「ふむ。自信があるようだが、これは結構な難物だぞ？失敗すれば大怪我では済まんが」

「大丈夫、問題ない」

耀の瞳は真っ直ぐにグリフオンに向いている。その瞳は探し続けていた宝物を見つけた子供のよう輝いていた。隣で呆れたように苦笑いを漏らす十六夜と飛鳥。

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「気をつけてね、春日部さん」

「頑張れ、春日部」

「うん、頑張る」

「おい、春日部」

「ん？」

「お前のその服装じゃかなり寒くなるだろ？だからよ……ほら、気休

めにもならないと思うが俺のブレザー貸しておく。まあ、その……なんだ、無茶な事だけはするなよ」

「うん、ありがとう比企谷。頑張る」

頷き、グリフォンに駆け寄る。だがグリフォンは大きく翼を広げてその場を離れた。

戦いの際、白夜叉を巻き込まないようにする為だろう。

耀を威嚇するように翼を広げ、巨大な瞳をギラつかせるグリフォンを、追いかけるように耀は走り寄った。

数mほど離れた距離で足を止め、まじまじとグリフォンを観察する。

(……凄い。本当に上半身が鷲で、下半身が獅子なんだ)

鷲と獅子。猛禽類の王と、肉食獣の王。数多の動物と心を通わせてきた耀だが、それはあくまで地球上に生息している相手に限る。

”世界の果て”で黒ウサギ達が出会ったユニコーンや大蛇などの生態系を遥かに逸脱した、幻獣と呼び称されるものと相対するのは、コレが初めての経験。まず慎重に話しかけた。

「え、えーと。初めまして、春日部耀です」

『!?!』

ビクンツ!!?とグリフォンの肢体が跳ねた。その瞳から警戒心が薄れ、僅かに戸惑いの色が浮かぶ。耀のギフトが幻獣にも有効である証しだった。

「ほう……あの娘、グリフォンと言葉を交わすか」

白夜叉は感心したように扇を広げた。二種の王であるグリフォンの背に跨る方法は二つある。

一つは、力比べや知恵比べで勝利する事。屈服させることで背に跨る方法だ。

二つ目は、その心を認められる事。王であり誇り高い彼らに認められて跨る方法である。

言葉を交わす事ができるならどんな手段にせよ、自分に有効な交渉を進められる事ができるかもしれない。耀は大きく息を吸って、一息に述べる。

「私をあなたの背に乗せ……誇りを賭けて勝負をしませんか？」

『……何……!?』

グリフォンの声と瞳に闘志が宿る。気高い彼らにとって『誇りを賭ける』とは、最も効果的な挑発だ。耀は返事を待たず、交渉を続ける。「あなたが飛んできたあの山脈。あそこを白夜の地平から時計回りに大きく迂回し、この湖畔を終着点と定めます。貴方は強靱な翼と四肢で空を駆け、湖畔までに私をふるい落とせば勝ち。私が背に跨っていないられたら私の勝ち。……どうかな？」

耀は小首を傾げる。その条件ならば力と勇気の双方を試す事が出来る。どがグリフォンは如何わしげに大きく鼻を鳴らして尊大に問い返す。

『娘よ。お前は私に”誇りを賭ける”と持ちかけた。お前の述べる通り、娘一人振り落とせないならば、私の名譽は失墜するだろう。――

――だがな娘。誇りの対価に、お前は何を賭す?』

「命を賭けます」

即答だった。あまりに突飛な返答に黒ウサギと飛鳥から驚きの声が上がった。

「だ、駄目です!」

「か、春日部さん!?!本気なの!?!」

「貴方は誇りを賭ける。私は命を賭ける。もし転落して生きていても、私は貴方の晩ご飯になります。……それじゃ駄目かな?」

『……ふむ……』

耀の提案にますます慌てる飛鳥と黒ウサギ。それを白夜又と十六夜、八幡とアリスが厳しい声で制す。

「双方、下がらんか。コレはあの娘から切り出した試練ぞ」

「ああ。無粋な事はやめとけ」

「このゲームは、私達が出す事じゃない」

「ああ、春日部が決めたんだ、やらせてやれ」

「そんな問題ではございません!!? 同士にこんな分の悪いゲームをさせるわけには――」

「大丈夫だよ」

耀が振り向きながら飛鳥と黒ウサギに頷く。その瞳には何の気負いもない。むしろ勝算ありと思わせるような表情だ。

グリフォンはしばし考える仕草を見せた後、頭を下げて背に乗るよう促した。

『乗るがいい、若き勇者よ。鷲獅子の疾走に耐えられるか、その身で試してみよ』

耀は頷き、手綱を握って背に乗りこむ。鞍が無いためやや不安だが、耀は手綱をしっかりと握りしめて獅子の胴体に跨る。

耀は鷲獅子の強靱で滑らかな肢体を擦りつつ、満足そうに囁く。

「始める前に一言だけ。……私、貴方の背中に跨るのが夢の一つだったんだ」

『———そうか』

グリフォンは決闘前に何を言っているのやらと苦笑しながら翼を羽ばたかせる。大地から離れてすでに数十m翼を固定したまま空を駆け山脈まで飛んで行った。

「なあ、八」

「ん？なんだアリス」

「いや、あの速度を見ると改めて春日部は大丈夫なのかと心配になってな」

「大丈夫だろ。あの程度で音を上げる様なら箱庭に招待されない」

「そうか」

そんなことを話していると耀がグリフォンに跨ったまま戻ってきた。

だが、耀の勝利が決定したその瞬間———耀の手から手綱が外れた。

『何!?!』

「春日部さん!?!」

安堵を漏らす暇も、称賛をかける暇もなく耀の小さな体は突風に吹き飛ばされたように舞い、慣性のまま打ち上がる。助けようとした黒ウサギの手を、十六夜が掴んだ。

「は、離し———」

「待て！まだ終わっていない！」

焦る黒ウサギを止める十六夜。だが耀の脳裏には周囲の存在が消えて先ほどまでの空を疾走していた感動だけが残っている。

(四肢で……風邪を絡め、大気を踏みしめるように——！)

ふわっと、耀の体が翻る。慣性を殺すかのような緩慢な動きはやがて彼女の落下速度を衰えさせ、遂には湖畔に触れることなく飛翔したのだ。

「……なっ」

誰もが絶句し耀は、ふわふわと不慣れな飛翔をし浮いている。そんな耀に呆れたように笑う十六夜が近寄ってきた。

「やっぱりな。お前のギフトって、他の生き物の特性を手に入れる類のものだったんだな」

そんな十六夜の笑みに、むっとしたような声音で耀が返す。

「……違う。これは友達になった証。けど、いつから知ってたの？」

「ただの推測。お前、黒ウサギと出会った時に、『風上に立たれたら分かる』とか言ってた。そんな芸当はただの人間には出来ない。だから春日部のギフトは他種のコミュニケーションをとるわけじゃない。多種のギフトを何らかの形で手に入れたんじゃないか……と推察したんだが、それだけじゃなさそうだな。あの速度で耐えられる生物は地球上にいないだろうし？ちなみに言うると比企谷も概ね俺と同じような推測してたぞ」

そんなことを言いながら耀のギフトに興味津々な十六夜の視線をフイツと避ける。その傍に三毛猫が駆け寄り耀の肩に乗りオロオロしながら耀に問う。

『お嬢！怪我はないか!？』

「うん、大丈夫。指がジンジンするのは服がパキパキになったぐらいで比企谷に貸してもらったブレザーのおかげでそこまで寒くなかったし」

「お疲れ様」

「あ、比企谷ブレザー貸してくれてありがとう」

「別にいいって、まだ少し寒いだろ？着てろ、それと……ほれ」

「?なにこれ?」

「俺がいつも飲んでるコーヒー」

「ありがとう」

三毛猫を優しく撫でながら八幡と話をしていた。その向こうでパチパチと拍手を送る白夜叉と、感嘆の眼差しで見つめるグリフォン。『見事。お前が得たギフトは、私に勝利した証として使って欲しい』

「うん。大事にする」

「いやはや大したものだ。このゲームはおんしの勝利だの。……ところで、おんしの持つギフトだが。それは先天性か?」

「違う。父さんに貰った木彫りのおかげで話せるようになった」

「木彫り?」

『お嬢の親父さんは彫刻家やとります。親父さんの作品でワシらとお嬢は話せるんや』

「ほほう……彫刻家の父か。よかったらその木彫りというのを見せてくれんか?」

頷いた耀は、ペンダントにしていた木彫りの細工を取り出す。

白夜叉は渡された手の平大の木彫りを見つめて、急に顔を顰める。

八幡、アリス、十六夜、飛鳥もその隣から木彫り細工を覗き込んだ。

「複雑な模様ね。何か意味があるの?」

「意味はあるけど知らない。昔教えてくれたけど」

「……。これは」

白夜叉だけでなく、八幡、十六夜、黒ウサギも鑑定に参加する。表と裏を何度も見直し、幾何学線を指でなぞる。

「材質は楠の神木……? 神格は残っていないようですが……この中心を指す幾何学線……そして中心に円状の空白……もしかしてお父様の知り合いには生物学者がおられるのでは?」

「うん。私の母さんがそうだった」

「生物学者ってことは、ソレは系統樹を表しているのか白夜叉?」

「おそらくの……ならこの図形はこうで……この円形が収束するのは……いや、これは……これは、凄い!!? 本当に凄いぞ娘!!? 本当に人造ならばおんしの父は神代の大天才だ!まさか人の手で独自の系統

樹を完成させ、しかもギフトとして確立させてしまうとは！コレは真正銘”生命の目録”と称して過言ない名品だ！」

興奮したように声を上げる白夜叉。耀は不思議そうに小首を傾げて問う。

「系統樹って、生物の発祥と進化の系譜とかを示すアレ？でも母さんが作った系統樹の図は、もつと樹の形をしていたと思うけど」

「うむ、それはおんしの父が表現したいモノのセンスが成す業よ。この木彫りをわざわざ円形にしたのは生命の流転、輪廻を表現したものの。再生と滅び、輪廻を繰り返す生命の系譜が進化を遂げて進む円の中心、即ち世界の中心を目指して進む様を表現している。中心が空白なのは、流転する世界の中心だからか、生命の完成が未だに視えぬからか、それともこの作品そのものが未完成の作品だからか。――

うぬぬ、凄い。凄いぞ。久しく想像力が刺激されとるぞ！ 実にアーティスティックだ！おんしさえよければ私が買い取りたいぐらいだの！」

「ダメ」

耀はあっさり断って木彫り細工を取り上げる。白夜叉はお気に入りの玩具を取り上げられた子供のようにしよんぼりした。

「で、これはどんな力を持ったギフトなんだ？」

「それは分からん。今分かつとるのは異種族との会話がきると、友になった種からの特有のギフトを貰えるということぐらいだ。これ以上詳しく知りたいのなら店の鑑定士に頼むしかない。それも上層に住む者でなければ鑑定は不可能だろう」

「え？白夜叉様でも鑑定できないのですか？今日は鑑定をお願いしたかったのですけど」

ゲツ、と気まずそうな顔になる白夜叉。

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外もいいところなのだがの」
白夜叉が困った顔をして考えているときに八幡とアリスが、

「おい、白夜叉」

「ん？なんだ？」

「何だ、じゃないだろ。私達の試練がまだ終わってないぞ」

「あ……そうだった」

思い出したように羊皮紙を取り出し記述する。

『ギフトゲーム名 ” 師の与えし試練”

・プレイヤー一覧

比企谷 八幡

アリス・ストレンジ

・クリア条件 ゴーレムの破壊

・クリア方法 二人でゴーレムを破壊

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなかった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。” サウザンドアイズ” 印』

「ふくん、ゴーレムの破壊、ねえ」

「つてか、二人でゴーレムの破壊つて」

「それに、この師の与えし試練っていうゲーム名は何だよ」

「なに、そのままの意味だ。おんしらの師が私に託した試練だ。二人で、と言うのはおんしらのどちらかと言うわけではなく二人同時にゴーレムを破壊すると言う事だ」

「先生が、だと」

「うむ」

「……そうか」

「八」

「ああ、やるぞアリス」

「なら始めるとするか」

サウンドアイズとギフトゲームと再会【後編】

八幡とアリスは十六夜達から少し離れた場所に移動する。

「準備はいいかの?」

「ああ」

「問題ない」

「では、始めるぞ」

白夜叉のギフトカードが輝き、そこから一体八幡と同じくらいの人型ゴーレムが現れた。

「さて、どうする? 最初から二人で行くか?」

「そうだな」

「了解。じゃあ、アリス。タイプ『回転式拳銃』」

「分かった」

八幡がそう言うと、アリスの体が輝き人類が使える大きさではない黒い回転式拳銃になり八幡の手に収まる。

その光景を見た十六夜達は驚きに声を上げた。

「「なっ!?」」

「ほんじゃあ、行くか」

『ああ』

八幡は目にも留まらぬ速さで引き金を引き、三発ゴーレムの首部の関節に打ち込んだ。

ゴーレムはそれを察知し体を捻り弾を避け、瞬時に八幡の元へ距離を詰め、拳を振りかざした。

「なっ! は、速い!?!」

《ヴオオオオオ!!?!》

「ガハアツ!!?!」

ゴーレムの高過ぎる性能に驚き、バキリツと、鳴ってはいけない音を立てて鳩尾辺りに拳を食らってしまう。

数十m飛ばされてしまうが両脚でなんとかブレーキを掛ける。

「ガハツ、ゴボツ。こ、こりゃあ、様子見はできないな」

『なんだこのゴーレムは性能が高い!?!』

「ペツ！ああ、俺もこれには驚いた」

「ちよつとばかり上げていくか」

吐血しながら八幡はそう言うと、体から靄が発生しそれを影に纏わせ羽根のように形成し瞬時にゴーレムの背に回る。

「オラアッ！」

《ヴルアアア》

「逃すか！アリス、タイプ『アックス』」

『了解！』

羽根から棘状の結晶を飛ばし、それから逃げようとするゴーレムに對してアリスを赤と黒色の両刃のアックスに変化させ振りかぶる。

だがそれもゴーレムはいとも簡単に避けてしまう。

「うっそ、だろ！至近距離の攻撃も避けんのか、よッ！」

《ヴルアアア》

「チッ！」

今度は受けまいとかなり無茶な動きで攻撃を避け、距離を置く。

「ああ、クツソ!!？面倒い、大変、疲れる!!？」

「……しゃあねえ！アリストタイプ『籠手』!!？」

『やるのか、八』

「ああ……」

アリスは黒く甲には赤色の宝石のついた鋭い見た目の籠手になり、八幡の体の靄は更に濃くなる。羽根を消し腰に触手状のものを形成、片目だけが黒く瞳孔が紅く染まる。

親指で人差し指を鳴らし、先ほどよりも更に速い速度でゴーレムの正面に移動し、籠手で左腕を殴る。

「ゼリヤア!!？」

《ヴォオオオオ》

自分の腕が壊れたことに驚いたような声を出しながら、ゴーレムは八幡の腕を掴み、その状態で蹴りを噛まそうとする。

だが、八幡は腕を自ら捻り上げ腕の関節が粉々になりながらも蹴りを回避し、触手でゴーレムの体を打ち飛ばす。

外野は八幡の行動に心配の声を上げる。

「八幡さん!!?」

「オイオイ、比企谷の奴。あれじゃ腕が使いものにならなくなっちゃまったじゃねえか」

「でも、それなのに声すら上げないなんて……」

「うん、凄く痛いはずなのに……」

「……ふむ」

周りが心配している中、八幡の腕は瞬時回転しながら元に戻った。

「……これで、終いだ。アリストタイプ『日本刀』」

『……ああ』

鏢はなく、刀身と柄は黒く刃は紫の日本刀に成ったアリスにそう言い、八幡は靄を刀に纏わせゴーレムを、

『ハアアアアアア!!?』

《ヴルアアアア!!?》

斬った。

音も無く斬られたゴーレムは、体がバラバラになり始め最終的に機能を停止した。

「勝負あったの」

* * *

「あ”あ”く面倒だった」

「つたく、無茶するなど箱庭に行くまでにいったのに早速やって……はあ」

愚痴を言いながら八幡と八幡に起こっているアリスが帰ってきた。

「八幡さん、アリス!!?大丈夫ですか!!?」

「ああ、問題ないぜ」

「どこがだよ、ボロボロの癖に」

「は、八幡さん鳩尾や腕の傷の方は!?!」

「腕はもう治った。鳩尾の方もほとんど治ってる」

「はい?」

そう言っただけ鳩尾の殴られたところを見せる。

そこは少し殴られた跡が残っている程度だった。

「一体なにが?」

「3年から治癒力が尋常じゃない程高くなつてな」

「おい、小僧」

「ん？なんだ白夜叉」

「先程のあれはどのような仕掛けがあるのだ？確かゴーレムは再生機能を持っていたはずなんだが、何故斬られたくらいで土塊に戻った？」

「あー、あれか。あれは俺とアリスのギフトを合わせた技だ」

「それはどんな？」

「悪いがそれは言えない」

「そうか……ところでおんし、その身体「言うな」……分かった」

「それにしても、比企谷、お前強いな」

「そうね」

「うん。でも腕が粉々になって治った時は驚いた」

「ああ、悪かったな。心配させて」

そんな話をしている八幡はある事を思い出した。

「そうだ白夜叉、専門外と言っていたが、俺達は今日ギフト鑑定をしに来たんだが？」

「おお、そうだったな。どれどれ……ふむふむ……うむ、五人ともに素養が高いのは分かる。しかしこれではなんとも言えんな。おんしらは自分のギフトの力をどの程度に把握している？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「そこまで把握していない」

「把握済み」

「うおおおおい？いやまあ、仮にも対相手だったものにギフトを教えるのが怖いのは分かるが、それじゃ話が進まんだろうに」

「別に鑑定なんていらねえよ。人に値札貼られるのは趣味じゃない」

はつきりと拒絶するような声音の十六夜と、同意する二人。自身のギフトを使う程度にしか理解してない二人。

困ったように頭を掻く白夜叉は、突然妙案が浮かんだとばかりに二

ヤリと笑った。

「ふむ。何にせよ” 主催者” として、星霊のはしくれとして、試練をクリアしたおんしらには” 恩恵” を与えねばならん。ちょいと贅沢な代物だが、コミュニティ復興の前祝いとしては丁度良からう」

白夜叉がパンパンと拍手を打つ。すると五人の眼前に輝く五枚のカードが現れる。

カードにはそれぞれの名前と、体に宿るギフトを表すネームが記されていた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム ” 正体不明”

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム ” 威光”

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム ” 生命の目録” ” ノーフォーマー”

ブラックとグレー、ホワイト、レッドのカードに比企谷八幡・ギフトネーム ” 闇を宿す者” ” 贖物の本物” ” 影の道化” ” 死を拒絶し死と成った者” ” 愚者” ” 自己犠牲” ” 限定転移”

” 契約を結びし者”

クリムゾンレッドのカードにアリス・ストレンジ・ギフトネーム

” 武器形態” ” 契約”

それぞれの名とギフトが記されたカードを受け取る。

黒ウサギは驚いたようにな、興奮したような顔で五人のカードを覗き込んだ。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「クレジットカード？」

「商品券？」

「ち、違います！というかなんで皆さんそんなに息が合ってるのです！このギフトカードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードですよ！耀さんの” 生命の目録” だって収納可能で、それも好

きな時に顕現できるのですよ!」

「つまり素敵アイテムってことでオツケーか?」

「なんか……俺の影みたいだな」

「だからなんで適当に聞き流すんですか!あーもうそうです、超素敵アイテムなんです!」

黒ウサギに叱られながら五人はそれぞれのカードを物珍しそうにみつめる。

「我らの双女神の紋のように、本来はコミュニティの名と旗印も記されるのだが、おんしらは”ノーネーム”だからの。少々味気ない絵になっっているが、文句は黒ウサギに行ってくれ」

「ふうん……もしかして水樹って奴も収納できるのか?」

何気なく水樹にカードを向ける。すると水樹は光の粒子になってカードの中に呑み込まれた。

見ると十六夜のカードには溢れるほどの水を生み出す樹の絵が差し込まれ、ギフト欄の”正体不明”の下に”水樹”の名前が並んでいる。

「おお?これ面白いな。もしかしてこのまま水を出せるのか?」

「出せるとも。試すか?」

「だ、駄目です!水の無駄遣い反対!その水はコミュニティの為に使ってください!」

チツ、とつまらなそうに舌打ちをする。黒ウサギは十六夜に対してまだ安心できず監視していた。

白夜叉はその様子を高らかに笑いながら見つめた。

「そのギフトカードは、正式名称を”ラプラスの紙片”、即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった”恩恵”の名称。鑑定はできずともそれを見れば大体のギフトの正体に分かるというもの」

「へえ?じゃ俺のはレアケースなわけだ?」

ん?と白夜叉が十六夜のギフトカードを覗き込む。

”正体不明”と刻まれている文字を見て笑う十六夜とは対照的に、白夜叉の表情は劇的だった。

「……いや、そんな馬鹿な」

尋常じゃない雰囲気を出し十六夜のギフトカードを取り上げ、真剣な眼差しでギフトカードを見る白夜叉は、不可解とばかりに呟く。

”正体不明”だと……？いやありえん、全知である。”ラプラスの紙片”がエラーを起こすはずなど」

「何にせよ、鑑定できなかつたってことだろ。俺的にはこの方がありがたいさ」

白夜叉からギフトカードを取り上げ、白夜叉は納得できないように怪訝な瞳で十六夜を睨む。

(そういえばこの童……蛇神を倒したといっていたな)

生来の神々や星霊ほどではないものの、神格保持者は種の最高位。嵐を呼び寄せるほどの力を持つ蛇神が人間に打倒されるというのは、まずあり得ないことだ。

(強大な力を持っている事は間違えないわけか。……しかし”ラプラスの紙片”ほどのギフトが正常に機能しないとはどういう……)

ギフトが正常に機能しない。そこで白夜叉の脳裏に一つの可能性が浮上した。

(ギフトを無効化した……？いや、まさかな)

浮上した可能性を、苦笑と共に切り捨てる。

箱庭の世界において無効化のギフトは珍しくないがそれは単一の能力に特化した武装に限られた話。

十六夜のような強大な奇跡を身に宿す者が、奇跡を打ち消す御技を宿しては大きく矛盾する。その矛盾の大きさに比べれば”ラプラスの紙片”に問題があるという結論の方がまだ納得できた。

「まあ、俺からしたら比企谷のギフトが気になるけどな」

「……」

「おい、比企谷」

「あ？何だ」

「いや、お前のギフトが気になってな」

「あー、悪い流石にこれは見せられねえ」

八幡は俯きながらそう言った。

「……そうか」

その後、ゲーム盤から元の和室に戻り暖簾の下げられた店前に移動し、耀達は一礼した。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦するときは対等の条件で挑むのだもの」

「ああ。吐いた唾を飲み込むなんて、格好つかねえからな。次は渾身の舞台上で挑むぜ」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。……ところで」

白夜又は真剣な顔をして黒ウサギ達を見る。

「今さらだが、一つだけ聞かせてくれ。おんしらは自分達のコミュニティがどういう状況にあるか、よく理解しているか？」

「ああ、名前とか旗の話か？それなら聞いたぜ」

「ならそれを取り戻すために、“魔王”と戦わねばならんことも？」

「聞いてるわよ」

「……。では、おんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに加入するのだな？」

黒ウサギはドキリとした顔で視線をそらす。そして同時に思う。

もしコミュニティの現状を話さない不義理な真似をしていけば、自分がかげがえのない友人を失っていたかもしれない。

「そうよ。打倒魔王なんてカッコいいじゃない」

「“カッコいい”で済む話ではないのだがの……全く、若さゆえのものなのか。無謀というか、勇敢というか。まあ、魔王がどういうものなのかはコミュニティに帰ればわかるだろ。それでも魔王と戦う事を望むというなら止めんが……その娘二人。おんしらは確実に死ぬぞ」

予言したように耀と飛鳥に言う。二人は言い返そうとしたが魔王と同等の力を持つ白夜叉の威圧感を言わさぬものがあり言葉が見つからなかった。

「魔王の前に様々なギフトゲームに挑んで力を付けろ。小僧二人とこの半人半武の小娘はともかく、おんしら二人の力では魔王のゲーム

は生き残れん。嵐に巻き込まれた虫が無様に弄ばれて死ぬ様は、いつ見ても悲しいものだ」

「なんだ、私のことを知ってたのか」

「当然」

「……ご忠告ありがと。肝に命じておくわ。次は貴女の本気のゲームに挑みに行くから、覚悟しておきなさい」

「ふふ、望むところだ。私は三三四五外門に本拠を構えておる。いつでも遊びに来い。……ただし、黒ウサギをチップに賭けてもらうがの」

「嫌です!」

黒ウサギは即答で返す。白夜叉は拗ねたように唇を尖らせた。

「つれない事を言うなよう。私のコミュニケーションに所属すれば生涯を遊んで暮らせると保証するぞ?三食首輪付きの個室も用意するし」

「三食首輪付きってソレもう明らかにペット扱いですから!」

怒る黒ウサギ。笑う白夜叉。

そして、店を出て”ノーネーム”の本拠に向かおうとしたとき、

「ああ、そうだ。ちよつと待ておんしら」

「どうしたのですか?白夜叉様」

「おんしらが帰る前に”ノーネーム”に所属させて欲しい者がおつてな、引き取って欲しいのだが」

「しよ、所属させて欲しい人ですか!」

「うむ、ちよつと待っておれ連れてくるので」

「そう言い店内に再び入っていった。」

「……”ノーネーム”に所属させて欲しい、ねえ」

「一体誰なのかしら?」

「……」

暫くして白夜叉が戻ってきた。

「待たせたの、少々準備に戸惑ってしまったな」

「い、いえ大丈夫ですけど……それで肝心の所属させて欲しい人物は……」

「うむ、もう出て来てくれてよいぞ」

白夜叉がそう言うのと暖簾から肩にかかるくらい白髪で、両目が薄い赤と朱色のオツドアイの小柄な少女が出てきた。

「「なっ!?!」」

その少女を見た八幡とアリス、黒ウサギは驚き声を上げた。

何故なら三人はその少女を知っているから、

「「レン!!?」」

「久しぶり……八幡、アリス、黒ウサギ」

レンと呼ばれた少女はそう言い三人に微笑んだ。

三人は驚きで固まりレンを見ていた。

「おい、驚いてる所悪いがソイツ誰だ?」

「うむ、こやつはレンと言つてな、元は”ノーネーム”所属の者だ」

「へえ、じゃあ所属させて欲しいってより再所属つてどこか」

「そうなの」

「白夜叉様、どうしてレンが”サウンドアイズ”に居るのですか☒

レンはアリス同様先生と一緒に外界に追い出されたはずなのに!?!」

「うむ、それはの「先生が最後の力でギフトを使ってレンを、この”サウンドアイズ”の店舗の前まで飛ばした、とか?」……その通りだ」

「ならどうしてアリスは一緒にではなく今回来たのですか?」

「私は、八のメンタルケアのために外界に残ったんだ」

「メンタルケア? 比企谷の?」

アリスが言った八幡のメンタルケアという言葉に十六夜は疑問を

持った。

「あく、その話は今度でいいか?」

「……仕方ねえ」

「……話を戻すが、レンを再び”ノーネーム”のコミュニティに所属

させてやって欲しい」

「そ、それはいいですけど……ではどうして今になってなのですか?」

「黒ウサギ、お主も知っていると思うが彼奴の出生と持つギフトはか

なり特殊でな、箱庭に戻ってきたときに奴からの手紙でこの二人が来

てその実力が私の感覚で問題ないと思うまでどうにか匿ってくれと

書いてあったのでな。そして、今日その時が来たと言う事だ」

「……」

「そう言う事だったのですね」

黒ウサギは白夜叉から話された話を聞いて漸く合点がいった。

「分かりました。改めてレンの再所属の件、私からも引き受けさせてもらいます」

「うむ」

白夜叉と黒ウサギが話が終わったところで八幡とアリス、レンは顔を見合わせ軽い話をした。

「久しぶりだな、レン」

「私たちの感覚で言えばよ3年振りか」

「うん、久しぶり……八幡、アリス」

「俺がやったヘッドホンまだ持っていてくれたんだな」

「うん、宝物だから」

「大袈裟な」

「そうでもないだろ。レンからしたら」

「そうか？なら良かった」

思い出話に花を咲かせている三人に対して黒ウサギが、

「あの……積もる話もありますしだいぶ時間も経ってしまったので、本拠の方に向かいたいのですが？」

「ああ、悪い。じゃあ案内してくれ”ノーネーム”の本拠に」

「はい」

そして新たにレンを含めた七人と一匹は”サウザンドアイズ”二一〇五三八〇外門を後にした。

コミュニティの現状・ギフトゲーム前夜

”サウザンドアイズ”の支店を後にして噴水広場を超えて七人は半刻ほど歩いた後、”ノーネーム”の居住区画の門前に着いた。門を見上げると、旗が掲げてあった名残のようなものが見える。

「この中が我々のコミュニティでございます。しかし本拠の館は入口からさらに歩かねばならないのでご容赦ください。この近辺はまだ戦いの名残がありますので……」

「戦いの名残？ 噂の魔王って素敵なネーミングの奴との戦いか？」

「は、はい」

「ちようどいいわ。箱庭最悪の天災が残した傷跡、見せてもらおうかしら」

プライドの高い飛鳥からしたら”サウザンドアイズ”で白夜叉に言われた事が気に障り不機嫌だった。

黒ウサギが躊躇いつつ門を開ける。すると門の向こうから乾ききった風が吹き抜けた。

砂塵から顔を庇うようにする六人。視界には一面の廃墟が広がっていた。

「っ、これは……!？」

街並みに刻まれた傷跡を見た飛鳥と耀は息を呑み、八幡と十六夜はスツと目を細める。アリスとレンは悲しそうな辛そうな顔をした。

八幡と十六夜は木造の廃墟に歩み寄って囲いの残骸を手にとる。

少し握ると、木材は乾いた音を立てて崩れていった。

「……おい、黒ウサギ。魔王とのギフトゲームがあったのは——

—今から何百年前の話だ？」

「僅か三年前でございます」

「この有様が三年前だと、壊れ方からして、どんなに頑張ったとしても数百年は優に超えるものだぞ」

「ああ、そうだなどんな力がぶつかっても、こんな壊れ方あり得ない。この木造の崩れた方なんて、膨大な時間をかけて自然崩壊したようにしか見えない」

とてもではないが今の現状を見ると三年前まで人が住み賑わっていたとは思えない有様に、四人は息を呑んだ。

飛鳥と耀も廃屋を見て複雑そうな感想を述べた。

「ベランダのテーブルにティーセットがそのまま出ているわ。これじゃあまるで、生活していた人間がふと消えたみたいじゃない」

「……生き物の気配も全く感じない。整備されなくなった人家なのに獣が寄ってこないなんて」

二人の感想は八幡と十六夜の声より遥かに重い。

黒ウサギとアリス、レンは廃墟から目を逸らし、朽ちた街路を進む。

「……魔王とのゲームはそれほどの未知の戦いだったのでございませう。彼らがこの土地を取り上げなかったのは魔王としての力の誇示と、一種の見せしめでしょう。彼らは力を持つ人間が現れると遊び心でゲームを挑み、二度と逆らえないように屈服させます。僅かに残った仲間もみんな心を折られ……コミュニティから、箱庭から去って行きました」

「数名は箱庭から追い出された。黒ウサギは勘違いしていたけど私とアリスは、正確に言えば仲間が追い出すことで保護したって感じ」

「どう言うことだ？」

「私は特殊でな。私はギフトゲームで見せた武器化、レンは出生と持つギフトが原因でな」

「そう、だったのですか……」

大掛かりなゲームをする時に、白夜又みたいにゲーム盤を用意する理由はこれだ。力あるコミュニティと魔王が戦えば、その傷跡は醜く残る。魔王はあえて楽しんだのだ。黒ウサギは感情を殺した瞳で風化した街を進む。アリスも、レンも、飛鳥も、耀も、複雑ような表情で続く。

しかし十六夜は瞳を爛々と輝かせ、不敵に笑い呟く。

「魔王——か。いいぜいいぜいいなオイ。想像以上に面白そうじゃねえか……!」

八幡は無言、無表情だが、頬に気づいてはいなかったが紅く燃えるような痣が薄く浮かび上がっていた。

七人と一匹は廃墟を抜け、徐々に外観が整った空き家が立ち並ぶ場所に出る。四人はそのまま居住区を素通りし、水樹と呼ばれる苗を貯水池に設置するのを見に行く。貯水池には先客がいたらしく、ジンとコミュニティの子供達が清掃道具を持って水路を掃除していた。

「あ、みなさん！水路と貯水池の準備は整っています！」

「ご苦労様ですジン坊ちゃん♪皆も掃除を手伝っていましたか？」

ワイワイと騒ぐ子供達と黒ウサギの元に群がる。

「黒ウサのねーちゃんお帰り！」

「寝たいけどお掃除手伝ったよー」

「ねえねえ、新しい人達って誰!？」

「強い?!カッコいい!？」

「YES!とても強くて可愛い人達ですよ!皆に紹介するから一列に並んでくださいね」

パチン、と黒ウサギが指を鳴らすと、子供達は一糸乱れぬ動きで横一列に並ぶ。数は二〇人前後だろう。中には猫耳や狐耳の少年少女もいた。

(マジでガキばつかな。半分は人間以外のガキか?)

(じ、実際に目の当たりにすると想像以上に多いわ。これで六分の一ですって?)

(……。私、子供嫌いなのに大丈夫かなあ)

(明るいな、あの頃の俺とは大違いだ……)

(……皆、元気だ。良かった)

六人は心の中でそう呟いた。子供が苦手にせよ、これから彼らと生活していくのなら不和を生まない程度に付き会っていかなければならない。

コホン、と仰々しく咳き込んだ黒ウサギは六人を紹介する。

「右から逆廻十六夜さん、久遠飛鳥さん、春日部耀さん、比企谷八幡さん、そしてアリス、レンです。皆も知っている通り、コミュニティを支えるのは力あるギフトプレイヤー達です。ギフトゲームに参加できない者達はギフトプレイヤーの私生活を支え、励まし、時に彼らの

為に身を粉にして尽くさねばなりません」

「あら、別にそんな必要ないわよ？もつとフランクにしてくれても」

「駄目です。それでは組織が成り立ちません」

今日一日の中で真剣な表情と声音で飛鳥の申し出を、黒ウサギが断じる。

「コミュニケーションはプレイヤー達がギフトゲームに参加し、彼らのもたらす恩恵で初めて生活が成り立つのでございます。これは箱庭の世界で生きていく以上、させる事が出来ない掟。子供のうちから甘やかせばこの子達の将来の為になりません」

「……そう」

そう言う黒ウサギの気迫が飛鳥を黙らせる。三年間、たった一人でコミュニケーションを支えたものが知る厳しさだろうと、飛鳥は同時に思った。

自分が課された責任は、自分の想像より遥かに重いかも知れない、と。

「ここにいるのは子供達の年長組です。ゲームに出られないものの、見ての通り獣のギフトを持っている子もおりますから、何か用事を言い付ける時はこの子供達を使ってくださいな。みんなも、それでいいですな？」

「」「よろしくお願いします！」「」

キーン、と耳鳴りがするほどの大声で二〇人前後の子供達が叫ぶ。

六人はまるで音波平気のような感覚を受けた。

「ハハ、元気がいいじゃねえか」

「そ、そうね」

(……。本当にやっていけるかな、私)

(元気だな……。辛い事に絶望しないで前に進んでいるコイツらが羨ましい)

「相変わらず元気だな」

「うん……。そう、だね」

ヤハハと笑うのは十六夜だけで、飛鳥と耀はなんとも言えない複雑な顔をし、八幡は今よりも幼かった頃を思い出し若干顔を歪めたつつ

微笑。

アリスとレンは、懐かしみながら元気で良かったと、微笑していた。「さて、自己紹介も終わりましたし！それでは水樹を植えましょう！黒ウサギが台座に根を張らせるので、十六夜さんのギフトカードから出してくれますか？」

「あいよ」

水路は水が通っていないだけで残っている。所々ひび割れして砂も要所に溜まっていた。流石に全て取り除くのは難しかったのだろう。

石垣に立ちながら耀が物珍しそうなや辺りを見回す。

「大きな貯水池だね。ちよつとした湖ぐらいあるよ」

『そやな。門をも通つてからあつちこつちに水路があつたけど、もしあれに全部水が通つたら壮观やろなあ。けど使つてたのは随分前の事なんちゃうか？どうなんやウサ耳の姉ちゃん』

黒ウサギは苗を抱えたまま振り向く。

「はいな、最後に使つたのは三年前ですよ三毛猫さん。元々は龍の瞳を水珠に加工したギフトが貯水池の台座に設置してあつたのですが、それも魔王に取り上げられてしまいました」

十六夜は瞳をキラリと輝かせた。

「龍の瞳？何それカッコいい超欲しい。どこに行けば手に入る？」

「さて、何処でしょう。知っていても十六夜さんには教えません」

十六夜に教えれば最後、確実に挑みに行くだろう。龍に挑めば流石に助けようもないので黒ウサギは適当にはぐらかし、ジンが話を戻す。

「水路も時々は整備をしていたのですけど、あくまで最低限です。それにこの水樹じゃまだこの貯水池と水路を全て埋めるのは不可能でしょう。ですから居住区の水路は遮断して本拠の屋敷と別館に直通している水路だけを開きます。此方は皆で川の水を汲んできたときに時々使っていたので問題ありません」

「あら、数kmも向こうの川から水を運ぶ方法があるの？」

苗を植えるのに忙しい黒ウサギに変わってジンと子供達が答えた。

「はい。みんなと一緒にバケツを両手に持って運びました」

「半分くらいはコケて無くなっちゃうんだけどねー」

「黒ウサのねーちゃんか箱庭の外で水を汲んでいいなら、貯水池をいっぱいしてくれるのになあ」

「……。そう。大変なのね」

「……。みんな、ごめんね。アリスはともかく私は、知ってたのに来れなかった……。」

「レン姉さん……。大丈夫だよ。レン姉さんの場合は理由があったんでしょ」

「そうだよ。レンお姉ちゃん」

「ジン、みんな……。本当にごめんね」

飛鳥はちよっぴりガツカリしたような顔をして、レンは辛そうな顔をしてジン達に謝罪した。

画期的なものがあれば黒ウサギも水不足で頭を抱えることもなく、水樹であそこまで大歓喜する必要がなかっただろう。

黒ウサギは貯水池の中心にある柱の台座までピョン、と跳躍すると、

「それでは苗の紐を解いて根を張ります！十六夜さんは屋敷の水門を開けてください！」

「あいよ」

十六夜が水門を開け、黒ウサギが寝の紐を解くと、根を包んでいた布から大波のような水が溢れ返り、激流となって貯水池を埋めていった。

水門の鍵を開けていた十六夜は驚いて叫ぶ。

「ちよ、少しは待てやゴラア!!？流石にこれ以上濡れたくねえぞオイ！」

今日一でずぶ濡れになっていた十六夜は慌てて石垣まで跳躍する。

水樹の根は瞬く間に台座に絡め、水を更に放出し続ける。

「うわおーこの子は想像以上に元気です♪」

水は水門を潜り屋敷の水路を通って満たして貯水池を埋めた。

昔のように並々と満ちていく水源を見てジンは感動的に呟く。

「凄い！これなら生活以外にも水を使えるかも……！」

「なんだ、農作業でもやるのか？」

「近いです。例えば水仙卵華などの水面に自生する花のギフトを繁殖させれば、ギフトゲームに参加せずともコミュニティの収入になります。これならみんなにも出来るし……」

「ふうん？で、水仙卵華ってなんだ御チビ」

と十六夜はジンを尊敬語の嘲笑を交えた、なんとも言えない愛称で呼び説明を持ちかけていた。

「……あれ？そう言えば八幡は？」

「え？……そう言えばいませんね？何処いったんでしよう？」

「そうね、さつきまでいたはずなのに」

「うん」

一方、十六夜がジんに説明を持ちかけているときにレンが八幡がいないことに気づいた。

「多分、気を落ち着かせにいったんだな」

「気を落ち着かせに？どういうことアリス」

「コミュニティの現状と子供達の諦めていない姿を見て昔のことを思い出したんだろう」

そう言うアリスの発言に十六夜とジンとレンを除いたメンバーは疑問を感じた。

「ああ……そう言うこと」

レンは納得して暗く、悲しい顔をした。

「レン？」

「アリス……」

「悪いがそれは私が話していい話じゃないからな。八から直接聞いてくれ……まあ、それは置いといて本拠に行こうか」

「え！八幡さんを待たなくていいのですか!？」

「大丈夫だ。私のギフト”契約”で居場所の把握が可能だから、一人で来れる」

「そ、そうですか」

そう言って六人は本拠の方に歩き出した。

アリス達の前から勝手にいなくなった八幡は少し離れた廃墟の中に居た。

「なんで、一瞬でもあんな事考えちゃったんだ……」

八幡はアリスが言っていたコミュニティの現状と子供達の諦めていない姿を見て心の中で思っていたことに対して険悪していた。

(勝手に、コミュニティの子供達が少し辛そうにしてるとか思っちゃまうとか……)

「はぁ……」

ため息をつく。

「駄目だ、気分が悪い……寝よ……」

影の中からスマホとヘッドホンを取り出し、

「曲は……コレでいいか」

【エウテルペ】を選び聴きながら、寝始めた。

〜八幡が寝てから約一時間後〜

「ん、どのくらい経った？」

スマホの画面をつけ時間を見る。

「……一時間か、」

「……戻るか……え〜と場所は……そこか」

”契約”のギフトを使いアリスの居場所を特定し、本拠に向かう。

「ここか……」

八幡が本拠である屋敷に着く。屋敷の中向かおうとした時に茂みの方から子供ではない匂いがした。

「?誰かいるのか?」

そう思い茂みの方に近付く。

独り言の様に喋りかけた。

「おい、そこにいる奴らなにをやる気か知らんが……出て来い」

八幡が茂みにいる何者かに言うように独り言を言ったその時、

「比企谷か」

「逆廻か、どうしたんだなんか用か?」

「そう言うお前は……成る程俺と同じか」

「同じってことは、そこにいる奴らの事か？」

「ああ、おーい……そろそろ決めてくれねえと、俺が風呂入れねえだろうが」

ザア、と風が木々を揺らす。十六夜は面倒くさそうな顔をしながら誰かに話しかけるように八幡同様独り言を続ける。

「ここを襲うのか？襲わねえのか？やるならいい加減に覚悟を決めてかかってこいよ」

ザザア、ともう一度だけ風が木々を揺らす。十六夜は呆れたように石を幾つか拾い、木陰に向かって軽く投石した。

「よっー！」

ズドガアン！と軽いフォームからは考えられないデタラメな爆発音があたり一帯を木々を吹き飛ばし、同時に現れた人影を空中高く蹴散らせ、別館のガラスに振動が奔る。

別館から何事かと慌てて出てきたジンが十六夜に問う。

「ど、どうしたんですか!？」

「侵入者っぽいぞ。例の”フォレス・ガロ”の連中じゃねえか？」

空中からドサドサと落ちてくる黒い人影と瓦礫。

意識のある者はかろうじて立ち上がり、十六夜達を見つめる。

「な、なんとというデタラメな力……！蛇神を倒したというのは本当の話だったのか」

「ああ……これならガルドの奴とのゲームに勝てるかもしれない……」

侵入者の視線に敵意らしいものは感じられなかった。それに気づいたのか、十六夜は侵入者に歩み寄って声をかける。

「おお？なんだお前ら、人間じゃねえのか？」

侵入者の姿はそれぞれ一部が人間ではなかった。

犬の耳を持つ者、長い体毛と爪を持つ者、爬虫類のような瞳を持つ者。

十六夜は物色するように彼らを興味深く見つめる。

「我々は人をベースにさまざまな”獣”のギフトを持つ者。しかしギ

フトの格が低いため、このような半端な変幻しかできないのだ」

「へえ……で、何か話をしたくて襲わなかったんだろ？ほれ、さつさと話せ」

十六夜はにこやかに話しかけるが侵入者達は全員、沈鬱そうに黙り込む。

互いに目配せした後、意を決するように頭を下げ、

「恥を忍んで頼む！ 我々の……いえ、魔王の傘下にあるコミュニテイ”フォレス・ガロ”を、完膚なきまでに叩きつぶしてはいただけないでしょうか!!？」

「嫌だね」

意を決した言葉をあつさり一蹴りする。侵入者は絶句して固まり、隣で聞いていたジンは呆気にとられたように半口を開けている。

十六夜はつまらなそうな顔になり八幡は目を瞑った。

「どうせお前らもガルドって奴に人質を取られている連中だろ？命令されて拉致しにきたってところか？」

「は、はい。まさかそまで御見通しとは露知らず失礼な真似を……我々も人質を取られている身分、ガルドには逆らうこともできず」

「人質にされた奴らはもうこの世にいねえよ。知らなかったか？」

「……………なっ」

「八幡さん!!？」

ジンが慌てて割って入る。しかし八幡はジンに冷たい声音で接する。

「隠す必要あるか？明日、お前らが勝てば結局知れ渡る話だ」

「そ、それにしたった言い方とかそういうものがあるでしょう!!？」

「此奴らに気を使えと？バカ言ってるんじやねえぞ餓鬼が、此奴らは人質を取られ救う為とはいえ、同じように攫って間接的には此奴らも殺しをやっているの過言じやねえか？」

怒気を含んだ八幡の声に若干怯えながらハッと気づく。

「悪党狩りつてのは悪くねえが、此奴らに頼まれてなら断る」

「そうだな」

八幡の言葉に十六夜も同意した。

「そ、それでは、本当に人質は」

「……はい。ガルドは人質を攫ったその日に殺していたそうです」
「そんな……!」

侵入者達はその場に項垂れる。人質の為にヨゴレ仕事をしてきたというのにその人質がこの世にいないと知った衝撃は計り知れないだろう。

その中で十六夜はふつとあることを閃いたように考える。

(魔王の傘下のゲスイ悪党……もしかしてこれは使えるか?)

そして十六夜は振り返り、まるで新しい悪戯を思いついた子供のよ
うな笑顔で侵入者の肩を叩き、

「お前達、”フォレス・ガロ”とガルドが憎いか?叩きつぶされて欲
しいか?」

「あ、当たり前前だ!俺達がアイツのせいとどんな目にあってきたか
……!」

「そうかそうか。でもお前達にはそれをするだけの力がないと?」

ぐつと唇を噛みしめる男達。

「ア、アイツはあれでま魔王の配下。ギフトの格が遥かに上だ。俺達
がゲームを挑んでも勝てるはずがない!いや、万が一勝っても魔王に
目をつけられたら」

「その”魔王”を倒す為のコミュニティがあるとしたら?」

え?と全員が顔を上げ、八幡はああ、と十六夜が考えたことがわ
かった。十六夜はジンの肩を抱き寄せると、

「このジン坊ちゃんが、魔王を倒す為のコミュニティを作ると言っ
ているんだ」

「な!」

今この場にいる八幡と提案した十六夜以外は驚愕した。それはジ
ンもどうようである。ジンは仲間を救うのと、旗印を奪った魔王をだ
けを倒すつもりでいた。

しかし十六夜は全ての魔王を対象にする活動をするコミュニティ
と言わんばかりの説明をした。

おそらく前例のないコミュニティに侵入者は困惑して聞き返す。

「魔王を倒す為のコミュニティ……？そ、それはいつたい」

「言葉通りの意味さ。俺達は魔王のコミュニティ、その傘下も含め全てのコミュニティを魔王の脅威から守る。そして守られるコミュニティは口を揃え言ってくれ。」押し売り・勧誘・魔王関係御断り。まずはジンⅡラッセルの下まで問い合わせください」

「じよ、」

冗談でしょう!?!と言いたかったジンだかが八幡に口を塞がれる。十六夜はどこまでも本気である。

十六夜は勢いよく立ち上がり、まるで強風を受け止めるように腕を上げ、

「人質のことは残念だった。だけど安心していい。明日ジンⅡラッセル率いるメンバーがお前達の仇を取ってくれる！その後の心配もしなくていいぞ！なぜなら俺達のジンⅡラッセルが”魔王”を倒す為に立ち上がったのだから！」

「おお……！」

十六夜の発言に侵入者達は希望を見る。

ジンは必死に腕の中でもがくが、八幡の異様に強い力に押さえつけられ声も出ない。

「さあ、コミュニティに帰るんだ！そして仲間のコミュニティに言いふらせ！俺達のジンⅡラッセルが”魔王”を倒してくれると！」

「わ、わかった！明日は頑張ってくれジン坊ちゃん！」

「ま……待っ……！」

ジンの叫びも届かず、あつという間に走り去る侵入者一同。

腕を解かれたジンは茫然自失になって膝を折るのだった。

* * *

本拠の最上階・大広間に十六夜を引きずって連れてきたジンは、堪りさねて大声で叫んだ。

「どういうつもりですか!?!」

「”打倒魔王”が”打倒全ての魔王とその関係者”になっただけだろ。”魔王にお困りの方、ジンⅡラッセルまでご連絡ください”——

——キャッチフレーズはこんなところか?」

「全然笑えませんが笑い事じゃありません！魔王の力はこのコミュニケーションの入り口を見て理解できたでしょう」

「勿論。あんな面白そうな力を持った奴とゲームで戦えるなんて最高じゃねえか」

その言葉にジンは絶句し、十六夜の行動を問いたただす。

「お……面白そう？では十六夜さんは自分の趣味の為にコミュニケーションを滅亡に追いやるつもりですか？」

「おい、逆廻。もうちつと言葉を選べ、こいつまだ理解してないんだからよ」

「そうだったな」

「わ、理解してない？どういうことですか八幡さん」

「あのなあ、第一に聞くぞ。ジン、お前は俺たちを箱庭に呼んでどうやって魔王と戦うつもりだった？あの規模の力を出せる奴は相当な力を持つ奴だましてや、白夜又見たいのだったらどうするつもりだった」

ぐつとジンは黙り込む。望みはあっても彼はリーダーとして明確な方針があつたわけではない。

ジンは幼い知恵を駆使して答える。

「まず……水源を確保するつもりでした。新しい人材と作戦を的確に組めば、水神クラスは無理でも水を確保する方法はありましたから。けどそれに関しては十六夜さんが想像以上の成果を上げてくれたので素直に感謝しています」

「おう、感謝しつつせ」

ケラケラと笑う十六夜を無視してジンは続ける。

「ギフトゲームを堅実にクリアしていけばコミュニケーションは必ず強くなります。たとえ力のない同士が呼び出されたとしても、力を合わせればコミュニケーションは大きくできます。ましてやこれだけ才有る方々が揃えば……どんなギフトゲームにも対抗できたはず」

「期待一杯、胸一杯だったわけか」

「……考えが甘い、足りないな」

「え？」

「二つ目、ギフトゲームで力を付けたとしてもそれだけで”魔王”に勝てるのか？無理だ、なぜならもう一つ必要なものがあるそれは人材だ。二つ目、名も旗印もない、コミュニティを象徴できるものが何もない。口コミだけじゃ広まりようがない。俺達を呼んだ理由はそれだろ？それにな、俺達”ノーネーム”は様々な面で信用しては危険な立場にある。そのハンデを背負ったまま、お前は先代を超えなければならぬんだ」

「先代を……超える!？」

ジンはその事実には、金槌で頭を叩かれたような気がした。

箱庭でも一目置かれるほど強力だった、コミュニティ。

成り行きでリーダーになったジンは”打倒魔王”と口でもそれは目を逸らし続けていた現実なのだ。

言い返すことも出来ないジンに、呆れたように追い討ちをかける。

「やっぱ、何も考えてなかったんだなお前。何か考えてれば、逆廻の発言は考えあつてのものだったくらいは察せる」

「……っ」

ジンは悔しさと、言葉にした責任の大きさとそこまでまだ理解が追いついていないがそこまで十六夜が考えていたとは思わなかったことに顔が上げられなかった。

そして八幡はそんなジンを半目で見つめ。

「名も旗もないとなると他はどんな手段がある？」

「えっと……」

「正解はリーダーの名前を売り込むだ」

ハツとジンは顔を上げやっつと八幡の言っていた、十六夜の考えの意図に気づく。

十六夜は侵入者に対してジンの名前と彼がリーダーであることを強調していた。それはつまり、

「僕を担ぎ上げて……コミュニティの存在をアピールするということですか？」

「ああ。悪くない手だろ？」

自慢げに笑う十六夜の顔を、先ほどとは違う視線で見つめ直す。

彼の言葉を脳内で何度も反芻したジンは、その作戦について真剣に考え始める。

「た、確かに……それは有効な手段です。リーダーがコミュニティの顔役になってコミュニティの存在をアピールすれば……名と旗に匹敵する信用を得られるかも」

例えば白夜叉。彼女は”サウザンドアイズ”の一幹部に過ぎないのに、その名前は東西南北に知れ渡るほど強大だ。名の売れたリーダーは、時に旗印に匹敵する。

「けどそれだけじゃ足りねえ。噂を大きく広めるにはインパクトが足りない。だからジン・ラッセルという少年が”打倒魔王”を掲げ、一味に一度でも勝利したという事実があれば——それは必ず波紋になって広がるはず。そしてそれに反応するのは魔王だけじゃない」

「そ、それは誰に？」

「同じく”打倒魔王”を掲げてる奴らに、だろ？」

「正解だ」

魔王は力あるコミュニティに戯れで闘いを挑む。その娯楽の為に箱庭に存在していると言っても過言ではない。その結果としてコミュニティを崩壊させられた者は星の数ほどいるだろう。惜しくも魔王に敗れ去った実力者が、打倒魔王を胸に秘めている可能性は高い。

ジンは想像もしていなかった具体的な作戦に、胸を高鳴らせていた。

彼の口にする事は大いにあり得るから。

「僕の名前でコミュニティの存在を広める……」

「そう。今回の一件はチャンスだ。相手は魔王の傘下、しかも勝てるゲーム。被害者は数多のコミュニティ。ここでしつかり御チビの名前を売れば」

二一〇五三八〇外門付近のコミュニティには、小さいまでも波紋が広がるかもしれない。

魔王の傘下に苦しむコミュニティに恩を売れば、水面下で徐々に噂

は広がっていくだろう。

「ま、御チビ様が懸念するように他の魔王を引き寄せる可能性は大きいだろうよ。けど魔王を倒した前例もあるはずだ。そうだろ？」

黒ウサギはこう説明していた。「魔王を倒せば魔王を隷属させられる」と。これは魔王を倒した者の存在を証明しており、同時に強力な駒を組織に引き入れるチャンスでもあるのだ。

「今のコミュニティに足りないのはまず人材だ。俺並みとは言わないが、俺の足元並みは欲しい。けど伸びるか反るかはおチビ次第。他にカッコいい作戦があるなら、協力は惜しまんぜ？」

ニヤニヤと笑う十六夜の顔をジンは見つめ返す。そこに先ほどまでの怒りは無い。

彼の作戦の筋は通っていた。だから賛成するのは簡単だったが、大きな不安要素があるのも忘れてはいけない。それを踏まえた上で、ジンは条件を出す。

「ひとつだけ条件があります。今回開かれる“サウザンドアイズ”のギフトゲームに、十六夜さん一人で参加してもらっていいですか？」

「なんだ？俺の力を見せろってことか？」

「それもありません。ですが理由はもう一つあります。このゲームには僕らが取り戻さなければならぬ、もう一つの大事な物が出品される」

名と旗印。それに匹敵するほどの大事な、コミュニティの宝物。

「まさか……昔の仲間か？」

「はい。それもただの仲間ではありません。元・魔王だった仲間です」
十六夜と八幡の瞳が光る。

「へえ？元・魔王様が昔の仲間か。これの意味することは多いぜ」

ジンも頷いて返す。

「はい。お察しの通り、先代のコミュニティは魔王と戦って勝利した経験があります」

「そして魔王を隷属させたコミュニティでさえ滅ぼせる————仮

称・超魔王とも呼べる超素敵なネーミングな奴も存在している、と」
「そ、そんなネーミングで呼ばれてはいません。魔王にも力関係はあ

りますし、十人十色です。白夜叉様も”主催者権限”を持っています
が、今はもう魔王とは呼ばれてはいません。魔王とはあくまで”主催
者権限”を悪用する者達の事ですから」

”主催者権限”そのものは箱庭を盛り上げる装置の一つでしかな
かった。

それを悪用されるようになって”魔王”という言葉が出来たのだ
とジンは語る。

「ゲームの主催者はその”サウザンドアイズ”の幹部の一人です。僕
らを倒した魔王と何らかの取引をして仲間の所有権を手に入れたの
でしょう。相手は商業コミュニティですし、金品で手を打てればよ
かったのですが……」

「貧乏は辛いつてことか。とにかく俺はその元・魔王様の仲間を取り
戻せばいいんだな？」

ジンは頷いて返す。それが出来るならば是非にでもお願いした
かった。

「はい。それが出来れば対魔王の準備も可能になりますし、僕も十六
夜さんの作戦を支持します。ですから黒ウサギにはまだ内密に……」

「あいよ」

「なあ、俺は何をすればいいんだ？……とりあえず今回は待機か？」

「そうなります。すみませんが……」

「いや、働きたく無いから良かった。……あ、それとその元・魔王の仲
間を所有している幹部ってどんな奴だ？」

「え？……コミュニティは分かりますが、リーダーの事はよく知らな
いので噂でいいのなら」

「構わねえよ」

「えつと、こんなこと言っただけですけどあまり良い人ではないよ
うです。先祖や親の七光りだとか」

「ほお、成る程サンキュ」

そう言っただけで八幡が席を立つと十六夜も一緒に席を立った。大広間
の扉をかけて自室に戻る時、ふと閃いたようにジんに声をかけた。

「明日のゲーム、負けるなよ」

「はい。ありがとうございます」

「負けたら俺、コミュニティ抜けるから」

「はい。……え？」

「……安心しとけ、アリスもいるんだ負けるわけねえよ」

そう言つて二人は大広間を出て行つた。

(親の七光り、ね……なら、プライドが高く、自己中なお坊ちやま気質の人物かもな……もしもの為の手は一つ作っておくか)

そして、翌日”フォレス・ガロ”とのギフトゲームが始まる。

ハンテイング

昨晚の出来事が終わり、八幡は部屋に戻ろうとする時に書物などがある所はないか、とジンに聞きに行き案内してもらった屋敷の地下にある書庫にそれから朝まで籠っていた。

「ペルセウス、隷属させた魔王……か」

コミュニティの元魔王である仲間を所持しているコミュニティの事を調べつつ、箱庭の事も調べていた。

「しっかし魔王ってのは厄介だな……鬱陶しいほど」

顔を陰しくしそんなことを呟いていると扉からノック音がした。

「八、居るか？そろそろ時間だから。行くぞ」

「分かった」

アリスに呼ばれ八幡は、屋敷を出て”フォレス・ガロ”の住居地に出発した。

* * *

「なあアリス」

「ん、何だ？」

「レンのやつが居ないがどうした？」

「ああ、レンはコミュニティで年少組のお守りだ」

「なるほど」

「それと、懐かしいなその服」

「あ？ああ、この服か。レンが仕立ててくれたんだ」

「そうか」

そんな緊張もない話をしていると黒ウサギの声が聞こえた。

「あ、皆さん！見えてきました……けれど、」

黒ウサギは一瞬、目を疑った。それと言うのも、居住区と言うにはかけ離れ過ぎたものが眼前に広がっていたからである。ツタの絡む門をさすり、鬱葱と生い茂る木々を見上げて耀が呟く。

「……。ジャングル？」

「虎の住むコミュニティだしな。おかしくないだろ」

「いや、おかしいです。”フォレス・ガロ”のコミュニティの本拠は普

通の居住区だったはず……それにこの木々はまさか」

ジンはそつと木々に手を伸ばす。樹枝は生き物のように脈打ち、肌をどうして胎動の様なものを感じさせた。

「やっぱり——」鬼化”してる？いや、まさか」

「ジン君。ここに”契約書類”が貼ってあるわよ」

飛鳥が声を上げる。門柱に貼られた”契約書類”には今回のゲーム内容が記されていた。

『ギフトゲーム名 ”ハンティング”』

・プレイヤー一覧

久遠 飛鳥

春日部 耀

アリス・ストレンジ

ジンⅡラツセル

・クリア条件 ホストの本拠内に潜むガルドⅡガスパーの討伐。

・クリア方法 ホスト側が指定した特定の武具でのみ討伐可能。指定武具以外は”契約”によつてガルドⅡガスパーを傷つける事は不可能。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・指定武具 ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、”ノーネーム”はギフトゲームを開催します。 ”フォレス・ガロ”印』

「ガルドの身をクリア条件に……指定武具で打倒!?!」

「こ、これはまずいです!」

ジンと黒ウサギが悲鳴の様な声を上げる。

「このゲームはそんなに危険なの?」

「いえ、ゲームそのものは単純です。問題はこのルールです。このルールでは飛鳥さんのギフトで彼を操る事も、耀さんとアリスのギフトで傷をつける事も出来ない事になります……!」

飛鳥が黒ウサギに問う。

「”恩恵”ではなく”契約”によつてその身を守っているのです。こ

れでは神格でも手が出せません！彼は自身の命をクリア条件に組み込む事で、御二人の力を克服したのです！」

「すいません、僕の落ち度でした。初めに”契約書類”を作った時にルールもその場で決めておけばよかったのに……！」

ルールを決めるのが”主催者”である以上、白紙のゲームを承諾するというのは自殺行為に等しい事だった。ゲームに参加した事が無いジンは、ルールが白紙のゲームに参加する事がどれほど愚かな事だとは分かっていなかったのだ。

「敵は命がけて五分に持ち込んだってことか。観客にしてみれば面白くていいけどな」

「気軽に言ってくれるわね……条件はかなり厳しいわよ。指定武器が何も書かれていないし、このまま戦えば厳しいかもしれない」

「いや、そうでもないぞ。ガルド自身に”恩恵”が効かないだけで使えはするんだ。そこは本人の技量次第だな」

飛鳥がゲームに挑んだ責任を感じているのに気付いた黒ウサギと耀は、飛鳥の手をギュつと握って励ます。

「だ、だいじょうぶですよ！」契約書類”には『指定』武器としつかり書いてあります！つまり最低でも何らかのヒントがなければなりません。もしヒントが提示されなければ、ルール違反で”フォレス・ガロ”の敗北は決定！この黒ウサギがいる限り、反則はさせませんとも！」

「大丈夫。黒ウサギもこう言ってるし、私も頑張る」

「……ええ、そうね。むしろあの外道のプライドを粉碎するためには、コレぐらいのハンデが必要かもしれないわ」

黒ウサギは飛鳥を励まし、耀はやる気を見せながら二人は飛鳥に檄を入れる。これは売った喧嘩で買われた喧嘩、勝機があるなら諦めてはいけない。

その陰で十六夜はジンに昨日のことを話していた。

「この勝負に勝てないと俺の作戦は成り立たない。だから負けなければ俺はコミュニケーションを去る。予定に変更はないぞ。いいな御チビ」

「……分かっています。絶対に負けません」

八幡とアリスもその隣で話していたら。

「アリス、俺のギフトが使えるからと言つて油断するなよ。探知と逃げには役立つが攻撃は無力化されるんだからな」

「安心しろ。それくらい分かっている」

「気を付けろよ」

「ああ」

* * *

門の開閉がゲームの合図だったのか、生い茂る森が門を絡めるように退路を塞ぐ。

光を遮るほどの密度で木々が生えもはやそこは人が通れる道ではなかった。

緊張した面持ちのジンと飛鳥に、耀とアリスが助言する。

「大丈夫。近くには誰もいない。匂いで分かる」

「そうだな。何か来る気配も察知しないからな」

「あら、春日部さんは犬にもお友達が？」

「うん。二十四ぐらい」

「アリスさんの場合はあの”契約”って言うギフト？」

「ああ、そうだ。あのギフトは正確には契約した主人の”恩恵”を二割くらい使えるっていうギフトだ。居場所の把握はその付属効果だ」

耀のギフトは、獣の友人を作れば作るほど強くなる。身体能力がずば抜けて高いのはそのためだ。五感は十六夜や八幡よりも優れているだろう。

アリスは”契約”の能力で八幡のギフトの”影の道化”を少し使えるようになっていたため陰で周囲を探索していた。

「詳しい情報はわかりますか？」

「それは分からない。でも風下にいるのに匂いがいないのだから、どこかの家に潜んでいる可能性は高いと思う」

「私は、八と違ってあまり影を伸ばせないからまだ分からない」

「ではまず外から探しましょう」

元は人が住んでいたとは思えない廃墟と化していた。

黒ウサギは”フォレス・ガロ”に大きなゲームを仕掛けるのは不可

能だと言っていたが、たった一晩で奇怪な森を作り上げたガルドの力は油断ならないものだろう。

「彼にしてみれば一世一代の大勝負だもの。温存していた隠し球の一つや二つあってもおかしくないということかしら」

「ええ。彼の戦歴は事実上、不戦敗も同じ。明かさずにいた強力なギフトを持っていても不思議ではありません。耀さんとアリス姉はガルドを見つけても警戒は怠らないでください」

三人は散策をしながら指定武器を探す。耀が一番高い木に飛び乗ってガルドを警戒していた。

「……駄目だな。ヒントも武器もない。この状況だとガルド自身がその役目を担っているな」

「そうね。気が乗らないけど、方針を変えましょう。まずは春日部さんの力でガルドを探して」

「もう見つけてる」

ジンと飛鳥、アリスは樹の上にいる耀へ目を向けた。

樹を飛び降りた彼女はレンガの残骸が残る街路を指し、

「本拠の中にいる。影が見えたんだけど、目で確認した」

耀の瞳は普段の瞳と違い、猛禽類を彷彿させるような金の瞳で本拠を見ていた。

鳥の視力をもつてすれば造作もない距離だったのだろう。

「そういうえば鷹の友達もいるのね。けど春日部さんが突然異世界に呼び出されて、友達はみんな悲しんでるんじゃない?」

「そ、それを言われると……少し辛い」

「おい、その話は後にして今はゲームに集中してくれ」

少し落ち込む耀に飛鳥とアリスは肩を叩き、警戒しながら館へ向かった。

館までの道は木々が侵入を阻むように絡み合っている。

(これだけの量を鬼化させるなんて……まさか彼女が……?)

ジンは一人だけ心当たりがあったが、ありえないとその考えを振り払う。

「見て。館まで飲み込まれてるわよ」

” フォレス・ガロ”の本拠に着く。虎の紋様を施された扉は無残に取り払われ、窓ガラスは砕かれている。豪華な外観は塗装もろともツタに蝕まれて剥ぎ取られていた。

「ガルドは二階に居た。入っても大丈夫」

内装は、贅を尽くして作らせた家具は打ち倒されて散乱していると
いう酷いものだった。

流石に四人はこの舞台に疑問を持ち始めていた。

「この奇妙な森の舞台は……本当に彼が作ったものなの？」

「……分かりません。”主催者”側の人間はガルドだけに縛られていますが、舞台を作るのは代理を頼めますから」

「代理を頼むにしては、毘が無かったが？」

「うん」

その疑問にアリスと耀が応える。

「森は虎のテリトリー。有利な舞台を用意したのは奇襲のため……でもなかった。それが理由なら本拠に隠れる意味がない。ううん、そもそも本拠を破壊する必要なんてない」

一番の疑問は、ガルドの野望の象徴とも言える本拠の破壊だった。
普通そんなことをするだろうか。

四人は今までと違う緊張感の中で散策を開始する。

「二階に上がるけど、ジン君。貴方は此処で待ってなさい」

「ど、どうしてですか？僕だってギフトを持っています。足手まといには」

「そうじゃない。久遠は上でないがあるか分からないから二手に分かれて退路を守って欲しいって言ってるんだ。正直に言っただけに久遠にも残って欲しい」

「……どうしてかしら？」

「参加者は私達、四人。私と春日部は攻撃特化の力が、久遠は支援型の力がある。もしも何かあった時に、久遠の力があればガルドの足止めは可能だろう。だから久遠は何かあった時に準備してくれるとありがたいと言うことだ」

「でも、このゲームは私が売ったものでもあるのよ。そんなこと言わ

れても」

「そうだな。じゃあガルドの様子を見てから考えてくれ」

「ええ、分かったわ」

四人は警戒しながら二階へ上がり、その先にあつた扉の両脇に立つて機会を窺う。意を決し勢いよく飛び込むと中から、

「ギ……」

「……………G E E E E Y A A A A a a a !!?!!?」

言葉を失った虎の怪物が、白銀の十字剣を背に守って立ち塞がった。

* * *

門前で待っていた黒ウサギと十六夜、八幡の元に、獣の咆哮が届く。森に忍び込んだ野鳥達は一斉に飛び立ち、一目散に逃げて行つた。

「い、今の凶暴な叫びは……?」

「ああ、間違いない。虎のギフトを使った春日部だ」

「あ、なるほど。ってそんなわけないでしょう!? 幾ら何でも今野は失礼でございますよ!」

ウサ耳を立てて起こる黒ウサギ。

十六夜も本気で言つたわけではなく、肩を竦ませて訂正した。

それに乘じて八幡も冗談を言う。

「じゃあジン坊ちゃんだな」

「いやいや、腹を空かせたアリスだろ」

「ボケ倒すのも大概にしなさい!!?!!?」

専用のハリセンでツツコミを入れる。よつぽど暇を持て余していたのだろう。

十六夜は門からはみ出た奇妙な樹の枝をへし折って笑う。

「今の咆哮といい、この舞台といい、前評価より面白いゲームになってるじゃねえか。見に行つたらまずいのか?」

「お金をとって観客を招くギフトゲームも存在しておりますが、最初の取り決めにない限りは駄目です」

「何だよつまんねえな。」 審判権限” とそのお付きつてことにすればいいじゃねえか」

「だから駄目なのですよ。ウサギの素敵耳は、ここからでも大まかな状況がわかってしまいます。状況が把握できないような隔絶空間でもない限り、侵入は禁止です」

チツ、と舌打ちした十六夜は手の中で蠢く樹を縦に引き裂きながら呟く。

「……貴種のウサギさん、マジ使えね」

「せめて聞こえないように行ってください！本気でへこみますから！」

ペシペシと叩く黒ウサギ。

だが状況がわかってまう黒ウサギは、内心ハラハラしながら三人の無事を祈っていた。

(この鬼化植物……必ず彼女が関わっているはずです。ならゲームは公平なルールで提示されているはずです。三人ともどうかご無事で)「ん?」

「どうした。比企谷?」

「いや、何でもない」

「そうか」

(アリスの動きが若干おかしくなってる?)

”契約”でアリスの動きを把握していた八幡はそう思った。

* * *

目にも留まらぬ突進を仕掛ける虎を止めたのは、飛鳥を庇った耀とアリスだった。

二人は飛鳥を階段に突き飛ばし叫ぶ。

「逃げて(ろ)！」

ワータイガーではなく、虎の怪物そのものになったガルドは四人を待ち構えていた。階段を守っていたジンはガルドの姿を見るや否や、彼の身に何が起こったかを理解した。

「鬼、しかも吸血鬼!やっぱり彼女が」

「つべこべ言っていないでさっさと逃げろジーン!!?久遠頼んだぞ!!?」

「ええ!!?」

はジンの襟を掴んだ階段から飛び降りる。

二人を標的にしたガルドは二人を追い変えようとするが、アリスにそれを阻まれた。

「G E E E Y A A A A a a a !!?」

「行かせるか!!?」

飛鳥とジンが屋敷から出たのを一瞬だけ確認するとアリスは耀に指示を出す。

「春日部、武器を取れ!」

「分かった!!?」

耀が武器を取りに行ったのを察知したガルドはアリスに背を向け耀を追いかけてる。

「G E E E Y A A a a !!?」

「やっぱり追いかけるか、春日部!!? 武器は取れたか!!?」

「うん!」

「よし、私が盾になるからガルドに攻撃しろ」

「分かった」

ガルドが耀に攻撃を仕掛けるが横から入って来たアリスが腕を盾にして防ぎ、その横から耀が回り込んで指定武器で攻撃をする。

「G E E E E Y A A A A a a a a !!?」

「グッ、流石に強い。だが、今だ春日部!!?」

「ハアアアア!!?」

「G E E E E Y A A A A a a a a !!?」

「なっ!」

「え× きゃあ!!?」

「春日部エ!!?」

ガルドに攻撃が当たる、と言う直前急激にガルドの力が強くなりアリスを弾き、耀の右腕を爪で切りつけた。

「春日部、大丈夫か!!?」

「う、うん……」

(マズい、傷も若干深いが出血が……一旦撤退するか)

「一旦この場から逃げるぞ」

「分かった」

アリスは影を使って天井を破壊し、耀を抱えて館を退散した。

「辛い所悪いが、久遠とジンの場所分かるか？」

「うん」

アリスは耀の案内に従って二人の元へ急いだ。

館から少し遠くの茂みに向かうと飛鳥の声が聞こえた。

「誰？」

「私達だ」

二人は耀の右腕を見るや否や悲鳴のような声を上げた。

「か、春日部さん！大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃ……ない。凄く痛い。ちよと、本気で泣きそうかも」

そう言うのと踏ん張っていた力が弱まって崩れ落ちた。

「済まない。剣は取れたんだが想像以上に力があつて春日部に攻撃が行ってしまった」

「ほんとは倒すつもりだった。……ごめん」

何に對しての謝罪かは分からないが、そう言つて耀は氣を失った。

「傷よりも出血が酷い……久遠にジン、ここで待たててくれないか？
直ぐに終わらせてくる」

「いえ、私も行くわ」

「だが……」

「友達がこんなことになつてジツとなんてしてられないわ」

「そうか。なら、行くぞ」

「あ、アリス姉さん」

「大丈夫だ。もう、負けない」

「出血、これで止めておいてくれる」

「え……あ、はいっ」

飛鳥は髪を二つに結んでいたリボンを解く。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってくるわ」

声に反応したのか、耀は左手を振つて“いってらしゃい”を込めて答えるのだった。

* * *

「久遠」

「何かしら?」

「どうやってガルドを屋敷の外に出す?」

「そうね……燃やすっていうのはどうかしら?」

「いいな。それで決まりだ」

「なら、早速」

「ああ、始めよう」

二人は屋敷の前で燃えていた松明を館に投げ込んだ。

それから数分で館全体に燃え広がり、ガルドが屋敷から飛び出してきた。

「G E E E Y A A A A a a a a !!?!!?」

「思っていたより早かったな」

「そうね」

「なら」

「ええ」

「二決着をつけよう(つけましよう)」

そういつて二人は森の一本道へ入って行き、ガルドはそれを追いかけた。

「じゃあ、手筈通りに」

「分かったわ。……今よ、拘束しなさい!」

「影よ、木々を覆え!!?」

一喝、鬼種化した木々が一斉に影で覆われながらガルドへ枝を伸ばした。

「G E E E Y A A A A a a a a !!?!!?」

樹を振り払うように絶叫を上げる虎の怪物。だがそれよりも速く、飛鳥の支配によって破魔の力を十分に発揮する白銀の十字剣が、正眼に構えられた飛鳥の手によって額を貫く。

最後の抵抗で吹き飛ばされた飛鳥は木々に背を強く打ち、咳き込みながら苦笑を交えた皮肉げな顔で言葉をかけた。

「今さら言っってはアレだけど……貴方、虎の姿の方が素敵だったわ」

「大丈夫か、久遠?」

「ええ。さあ、春日部さんの元に急いで行きましょう」

ゲーム終了と同時に木々が霧散した。樹によつては支えられていた廃屋が倒壊していく音を聞いて十六夜と八幡、黒ウサギは一目散に走り出す。

「おい、そんな急ぐ必要ねえだろ？」

「大ありです！黒ウサギの聞き間違いでなければ、耀さんはかなりの重傷のはず……！」

「黒ウサギ！早くこつちに！耀さんが危険だ！」

風より速く走る三人は瞬く間にジン達の元に駆けつけた。廃屋に隠れていたジンは三人を呼び止める為に叫ぶ。黒ウサギは耀の容体を見て思わず息を呑んだ。

「すぐコミュニティの工房に運びます。あそこなら治療器が揃ってますから。御三人はアリスと飛鳥さんと合流してから共に帰ってください」

「わ、わかったよ」

「おい、待て黒ウサギ」

「何ですか。八幡さんこの一大事に！」

「まあ、ちよつと落ち着け。傷はここで治す」

「え？」

八幡は耀に触る。すると傷がだんだん小さくなって行き終いには塞がった。

「こ、これは!!？」

「傷は塞がったが、出血した分の血は元に戻らないから戻って輸血してやれ」

「は、はい!!？」

黒ウサギは耀を抱えて全力疾走で工房へ向かった。

「は、八幡さん。今のは、治療系のギフトですか？」

「いや、違う。アレはただ傷を”移し替えた”だけだ」

「移し替えただと？だったら比企谷、お前の右腕は……」

十六夜の言葉を遮るように、ブシャツと音を立て、右腕に傷が出来

る。

「八幡さん!!?」

「大丈夫だ。直に治る」

「で、ですが……」

「それよりも、お前らはやらなきゃいけないことがあるんだろ?それをやってこい」

「……いいんだな?」

「ああ、問題ねえよ。それとジン、ゲームは終わったんだ、この敷地に入ってもいいのか?」

「え?問題ないと思います」

「そうか。なら、俺は少し用がある。アリス達に伝えといてくれ」

そう行つて八幡は屋敷のあつた方へ歩き出した。

* * *

ガルドの屋敷の跡地に着く。

「……この辺りか。影よ、地を掘れ」

八幡はギフトを使い地面を掘り始めた。

「死体を食わせていたとはいえ好んで骨までいく奴はそういない。それに此処には後悔や恨みといった感情が漂っている点からすると………やっぱりな」

掘り始めた地面から、かなりの数の骨が出てきた。それは、ガルド達が攫い、殺し食わせた者達の骨だった。

「辛かったよな、怖かったよな。冷たく暗い土の中で、彼奴らを恨んだよな。けど、安心しろ今から仲間の元に送り届けてやる」

悲しい様な顔をした八幡はそう言うと、影の中に劣化の具合を見て古い順で遺骨を収納し、アリスや十六夜がいる門前へ向かった。

* * *

八幡が着くと衆人の歓声が上がっていた。丁度、ジンの演説が終わった所だった。

「邪魔するぞ」

「比企谷か?用つてのは済んだのか?」

「いや、これで最後だ。おい!あんたら。これから攫われた者達の遺

骨を返す、ガルドに強制された古い順で並べ」

その一声で、歓声が静かに止み各コミュニティの者達は八幡の前に並んだ。

「ちやんと、埋葬してやれ」

「ありがと……ありがと!!?」

皆、涙を流しながら八幡に感謝した。

「良かったな」

「ああ」

こうしてガルドとのギフトゲームが幕を閉じた。

過去の仲間とペルセウス

ゲーム終了後、本拠に戻った五人は耀の容体を確認する。

見舞いの後に談話室のソファアールで寛いでいた八幡は黒ウサギに呟いた。

「春日部の傷は俺のギフトでどうにかなったが、出血が激しかったから輸血か、増血を施したのか？」

「YES ♪ 輸血となると専門のコミュニティに依頼しなければならぬですし」

「金がかからない方法があるならそっちでいいだろ。それで、例のゲームはどうなった？」

仲間が景品に出されるゲームのことを十六夜が話す。すると、十六夜が参加してくれると聞いて歓喜していた黒ウサギが、申請から戻ると一転して泣きそうな顔になっていた。

「ゲームが延期？」

「はい……申請に行った先で知りました。このまま中止の線もあるそうです」

黒ウサギはウサ耳を萎れさせ、口惜しそうに顔を歪ませて落ち込んでいる。

十六夜は肩透かしを食らったようにソファアールに寝そべった。

「なんてつまらない事をしてくれるんだ。白夜叉に言っただうにかならないのか？」

「どうにもならないでしょう。どうやら巨額の買い手が付いてしまったそうですから」

十六夜の表情が目に見えて不快そうに変わった。

一度はゲームの景品として出たものを、金を積まれたからと言って取り下げるのはホストとしていい事ではない。十六夜は盛大に舌打ちした。

「チツ。所詮は売買組織ってことかよ。エンターテイナーとしちゃ五流もいいところだ。」サウザンドアイズ”は巨大なコミュニティじゃなかったのか？プライドはねえのかよ」

「仕方がないですよ。」サウザンドアイズ”は群体コミュニティです。白夜叉様のように直轄の幹部が半分、傘下のコミュニティの幹部が半分です。今回の主催は”サウザンドアイズ”傘下のコミュニティの幹部、”ペルセウス”。双女神の看板に傷が付く事も気にならないほどのお金やギフトを得れば、ゲームの撤回くらいやるでしょう」

達観したような物言いの黒ウサギだが、悔しさで言えば十六夜の何倍も感じている。

それでも冷静で入られたのは、箱庭においてギフトゲームは絶対の法律だからだ。

敗者として奪われ、所有されてしまった仲間達を集めるのは容易ではない。

しかし仲間を取り戻せるのもギフトゲームしかない、黒ウサギは承知していた。だから今回は純粋に運がなかったと諦めるしかない。

「まあ、次回を期待するか。ところでその仲間ってのはどんな奴なんだ？」

「スパーパーチナブロンドの少女か？」

「え、八幡さん。どうしてそれを……」

「どうしてって、ガルドのギフトゲームの時に空から見ているからな。

……それに今も、出て来いよ。元仲間の吸血鬼さん」

「まさか、気づかれていたとはな」

八幡以外の二人はハツとして窓の外を見た。コンコンと叩くガラスの向こうで、にこやかに笑う金髪の少女が浮いていたのだ。飛び上がって驚いた黒ウサギは急いで窓に駆けやる。

「レ、レティシア様」

「様はよせ。今の私は他人に所有される身分。」箱庭の貴族”ともあろうものが、モノに敬意を払っては笑われるぞ」

黒ウサギが錠を開けると、レティシアと呼ばれた金髪の少女は苦笑しながら談話室に入る。

美しい金の髪を特注のリボンで結び、紅いレザージャケットに拘束具を彷彿させるロングスカートを着た少女は、黒ウサギが敬意を払う

には随分と幼く見えた。

「こんな場所からの入室で済まない。ジンには見つからずに黒ウサギと会いたかったんだ」

「そ、そうでしたか。あ、すぐにお茶を淹れるので少々お待ちください！」

久しぶりに仲間に出会った事が嬉しかったのか、黒ウサギは小躍りするようなステップで茶室に向かう。

十六夜の存在に気が付いたレティシアは、彼の奇妙な視線に視線に小首を傾げる。

「どうした？私の顔に何かついてるのか？」

「別に。前評判通りの美人……いや、美少女だと思って。目の保養に鑑賞してた」

十六夜の真剣な回答だったのだが、レティシアは心底楽しそうな哄笑で返す。

口元を押さえながら笑いを噛み殺し、なるべく上品に装って席に着いた。

「ふふ、なるほど。君が十六夜か。白夜叉の話通りの菌着せぬ男だな。しかし鑑賞するなら黒ウサギも負けてないと思うのだが。あれは私と違う方向性の可愛さがあるぞ」

「あれは愛玩動物なんだから、観賞するより弄ってナンボだろ」

「そうだな。黒ウサギは弄り倒した方が楽しいな」

「ふむ。否定はしない」

「否定してください！」

紅茶のティーセットを持ってきた口を尖らせて怒る。

暖められたカップに紅茶を注ぐ際も少し不機嫌な顔だ。

「レティシア様と比べられれば世の女性のほとんどが鑑賞価値のない女性でございます。黒ウサギだけが見劣るわけではありませんっ」

「いや、全く負けちゃいねえぜ？違う方向性で美人なのは否定しねえよ。好みで言えば黒ウサギの方が断然タイプだからな」

「……。そ、そうですか」

不意打ちの言葉に思わず頬とウサ耳が紅くなった。今までに多様

な惨事や愛の言葉を星の数ほど送られてきたはずなのに、十六夜の言葉は不自然なまでにウサ耳に残った。

「……黒ウサギ。まさか私は無粋な事をしたか？逢引の最中だったとか」

「え？マジ、なら邪魔しちや悪いな。レティシアどうだ、場所移動するか？」

「ふむ。そうだな」

「め、滅相も御座いませぬ！して、どのようなご用件ですか？」

慌てて話題を戻す。レティシアは他人に所有される身分。その彼女が主の命もなく来たという事は、相当のリスクを負ってこの場に来ているのだろう。

ならばただ会いに来たわけではないはずだ。それなら彼女はジンにも顔を見せていただろう。ジンに聞かれてはまずい話をしに来たと推測するが、レティシアは苦笑して首を振る。

「要件というほどのものじゃない。新生コミュニティがどの程度の力を持っているのか、それを見に来たんだ。ジンに会いたくないというのは合わせる顔がないからだよ。お前たちの仲間を傷つける結果になってしまったからな」

「吸血鬼？なるほど、だから美人設定なのか」

「確かに」

「は？」

「え？」

「いや、いい。続けてくれ」

十六夜はヒラヒラと手を振って続きを促す。

「実は黒ウサギたちが”ノーネーム”としてコミュニティの再建を掲げたと聞いた時、なんと愚かな真似を……と憤っていた。それがどれだけ茨の道か、お前がわかっていないとは思えなかったからな」

「……………」

「コミュニティを解散するよう説得するため、ようやくお前たちと接触するチャンスを得た時……看過出来ぬようか話を耳にした。神格級のギフト保持者が、黒ウサギたちの同志としてコミュニティに参加

したとな」

黒ウサギの視線が反射的に八幡と十六夜に移る。おそらく白夜叉にでも聞いたのだろう。

「四桁の外門に本拠を持つ”階層支配者”の白夜叉が、最下層である七桁の外門に足を運んでいた理由は、秘密裏にレティシアをここまで連れ込んで来るためだったのだ。

「ここで私は一つ試してみたくなった。その新人達がコミュニティを救えるだけの力を秘めているのかどうかを」

「結果は？」

黒ウサギが真剣な双眸で問う。レティシアは苦笑しながら首を振った。

「生憎、ガルドでは当て馬にならなかったよ。ゲームに参加した彼女たちはまだまだ青い果実で判断に困る。……こうして足を運んだはいいが、さて。私はお前たちになんと言葉をかければいいのか」

自分でも理解できない胸のうちにまた苦笑する。十六夜は呆れたようにレティシアを笑う。

「違うね。アンタは言葉を掛けたくて古巣に足を運んだんじゃない。古巣の仲間が今後、自立した組織としてやっていける姿を見て、安心したかっただけだろ？」

「……ああ。そうかもしれないな」

レティシアは十六夜の言葉に首肯する。

自嘲が拭えないレティシアに、十六夜は軽薄な声で続ける。

「その不安、払う方法が一つだけあるぜ」

「何？」

十六夜の言葉に八幡がその続きを言う。

「今の”ノーネーム”の目的は”打倒全ての魔王とその関係者”だ。アンタは俺達が魔王相手に勝てるのか不安なんだろ。ならアンタ本人がその身で試せばいいって事だ」

「そう言うことだ」

スツと立ち上がる。八幡と十六夜の意図を理解したレティシアは一瞬唾然したが、すぐに哄笑に変わった。弾けるような声をあげたレ

テイシアは、涙目になりながら立ち上がる。

「ふふ……なるほど。それは思いつかなんだ。実に分かりやすい。下手な策を弄せず、初めからそうしていればよかったなあ」

「ちよ、ちよつと御二人様？」

「ゲームのルールはどうする？」

「どうせ力試しだ。手間暇かける必要もない。双方が共に一撃ずつ打ち合い、そして受け合う」

「地に足を着けて立っていたもの勝ち。いいね、シンプルイズベストって奴」

笑みを交わし二人は窓から中庭へ同時に飛び出した。

開け放たれていた窓は二人を遮る事無く通す。窓から十間ほど離れた中庭で向かい合う二人は、天と地に位置していた。

「へえ？箱庭の吸血鬼は翼が生えてるのか？」

「ああ。翼で飛んでいる訳ではないがな。……制空権を支配されているのは不満か？」

「いいや。ルールにはそんなのなかったしな」

十六夜の飄々としながら自身に不利な戦いというのに意を唱ええない。その態度をレテイシアは評価する。

（なるほど。気前えは十分。あとは実力が伴うか否か……！）

満月を背負うレテイシアは微笑と共に黒い翼を広げ、己のギフトカードを取り出した。

金と紅と黒のコントラストで彩られたギフトカードを見た黒ウサギは蒼白になって叫ぶ。

「レ、レテイシア様!?そのギフトカードは」

「下がれ黒ウサギ。力試しとはいえ、これが決闘である事に変わり無い」

ギフトカードが輝き、封印されていたギフトが顕現する。

光の粒子が収束して外殻を作り、突然爆ぜたように長柄の武具が現れる。

「互いにランスを一打投擲する。受け手は止められねば敗北。悪いが先手は譲ってもらおうぞ」

「好きにしな」

投擲用に作られたランスを掲げる。

「ふっ——」

レテイシアは呼吸を整え、翼を大きく広げる。全身を撓らせた反動で打ち出すと、その衝撃で空気中に視認できるほど巨大な波紋が広がった。

「ハアア!!」

怒号と共に放たれた槍は瞬く間に摩擦で熱を帯び、一直線に十六夜に落下していく。

流星の如く大気を揺らして舞い落ちる槍の先端を前に、十六夜は牙を剥いて笑い、

「カツ——しゃらくせえ！」

殴りつけた。

「——は……!?」

「……へえ」

素つ頓狂な声を上げるレテイシアと黒ウサギ。八幡は関心の声を上げる。

レテイシアが投擲した槍は十六夜の一撃で拉げて只の鉄塊と化し、さながら散弾銃のように無数の凶器となってレテイシアに向けられたのだ。

(ま、まずい……！)

なんと馬鹿馬鹿しい破壊力。これは受けられない。なら避けなければ。

しかし思考に体が追いつかない。否、追いついても意味がない。

鬼種の純血である彼女なら、たかが銃弾如きなら振り払う事もできただろう。しかし第三宇宙速度に匹敵する馬鹿馬鹿しい速度で迫る凶弾を退ける事など、今の彼女には不可能だった。

(……これほどか……！)

着弾する間際、苦笑が漏れた。尋常外の才能を目の当たりにしたレテイシアは、自分の目測の甘さを恥じ入る。しかし同時に安堵した。

これほどの才能ならばあるいは……と、血みどろになって落ちる覚

悟を決めた時、

「影技《悪獣》!!?」

「レテイシア様!」

レテイシアの鼻先まで迫った鉄塊を、窓から飛び出た黒ウサギが振り落とし、八幡が作り出した獣の影が鉄塊を飲み込んだ。レテイシアは驚愕しながら黒ウサギを抱きとめ、翼を畳んで落下する。

「く、黒ウサギ!何を!」

レテイシアが声を上げる。だが決闘を邪魔された事に対してあげた声ではない。黒ウサギの手に握られていた、レテイシアから掠め取ったギフトカードに対する抗議の声だった。

黒ウサギは抗議には乗らず、レテイシアのギフトカードを見つめ震え声で向き直る。

「ギフトネーム:”純血の吸血鬼”……やっぱり、ギフトネームが変わっている。鬼種は残っているものの、神格が残っていない」
「っ……!」

ざつと目を背けるレテイシア。歩み寄った十六夜は白けたような呆れた表情で肩を竦ませた。対して八幡は納得した感じだった。

「なんだよ。もしかして元・魔王様のギフトって、吸血鬼のギフトしか残ってねえの?」

「やっぱりな。じゃなきや弱すぎる」

「武具は多少残してありますが、自身に宿る恩恵は……」

十六夜は隠す素振りもなく盛大に舌打ちした。

そんな弱りきった状態で相手をされた事が不満だったのだろう。

「ハッ。どうりで歯ごたえが無いわけだ。他人に所有されたらギフトまで奪われるのかよ」

「いいえ……魔王がコミュニケーションから奪ったのは人材であってギフトではありません。武具などの顕現しているギフトの違い、”恩恵”とは様々な神仏や精霊から受けた奇跡、云わば魂の一部。隷属させた相手から合意なしにギフトを奪う事は出来ません」

それはつまり、レテイシアが自分からギフトを差し出したという事だ。三人の視線をうけて苦虫を噛み潰したような顔で目を逸らすレ

テイシア。黒ウサギは苦い顔で問う。

「レテイシア様は鬼種の純血と神格の両方を備えていたため”魔王”と自称するほどの力を持たはず。今の貴女はかつての十分の一にも満ちません。どうしてこんなことに……」

「……それは」

言葉を口にしようとして飲み込む仕草を幾度か繰り返す。しかし打ち明けるには至らず、口を閉ざしたまま俯いてしまった。十六夜は頭を書きながら鬱陶しそうに提案する。

「まあ、あれだ。話があるならとりあえず屋敷に戻ろうぜ」

「……そう、ですね」

二人は沈鬱そうに頷いた。

そして戻ろうとする三人に八幡が叫んだ。

「ツ！お前ら、急いで下がれ!!？」

その瞬間遠方の方から褐色の光が四人に射し込み、レテイシアがハツとして叫ぶ。

「あの光……ゴーゴンの威光!?! まずい、見つかった!」

焦燥の混じった声と共に、レテイシアは光から庇うように三人の前に立ち塞がる。

光の正体を知る黒ウサギは悲痛の声を上げて遠方を睥んだ。

「ゴーゴンの首を掲げた旗印……!?!だ、駄目です! 避けてくださいレテイシア様!」

黒ウサギの声も虚しく、褐色の光を全身に受けたレテイシアは瞬く間に石像となって横たわった。更に光の射し込んだ方角から、翼の生えた空をかける靴を装着した騎士風の男達が高举して押し寄せてきたのだ。

「いたぞ！吸血鬼は石化させた！すぐに捕獲しろ！」

「例の”ノーネーム”もいるようだがどうする」

「邪魔をするから構わん、斬り捨てろ！」

空を駆ける騎士達の言葉を聞いた十六夜は不機嫌そうに、尚且つ獐猛に笑って呟く。

「まいったな、生まれて初めておまけに扱われたぜ。手を叩いて喜べ

ばいいのか、怒りに任せて叩き潰せばいいのか、二人はどっちだと思
う?。」

「呆れてろ」

「と、とりあえず本拠に逃げてください!」

石になったレティシアの事は気にかかるが、今はそれどころではな
い。

レティシアは今“ペルセウス”に所有される身、それに“ペルセウ
ス”は“サウザンドアイズ”の幹部を務めているコミュニティ。万
が一揉め事を起こしてはただでは済まない。

本拠に引くと、三人の騎士男がレティシアを取り囲み安堵したよう
に縄をかけ始める。

「これでよし……危うく取り逃がすところだったな」

「ギフトゲームを中止してまで用意した大口の取引だ。台無しになれ
ば“サウザンドアイズ”に我ら“ペルセウス”の居場所は無くなっ
ていたぞ」

「それだけじゃない。箱庭の外とはいえ、交渉相手は一国規模のコ
ミュニティだ。もしも奪われでもしたら——」

「箱庭の外ですって!?!」

黒ウサギの叫び声に、男達の手が止まった。彼らは明らかな敵意を
込めて見る。しかし黒ウサギは男達の視線など気にも留めず、走り
寄って抗議の声を上げた。

「一体どういうことです!彼らヴァンパイアは——」箱庭の
騎士”は箱庭の中でしか太陽の光を受けられないのですよ!?!その
ヴァンパイアを箱庭の外に連れ出すなんて……!」

「我らの首領が取り決めた交渉。部外者は黙っている」

騎士は突き放すように語り、翼の生えた靴で空を舞う。空にはまだ
百に匹敵する軍勢が“ノーネーム”の本拠の上に待ち構えていた。

本来ならば本拠への不当な侵入はコミュニティへの侮辱行為であ
り、世間的にもよろしくない。これは明らかに、黒ウサギ達を”

ノーネーム”と見下した上での行為だ。

「おい、アンタ達。これだけ無遠慮に無礼を働いておきながら、詫びの

言葉一つもないのか？それでよく双女神の旗を掲げていられるな、アンタ達は」

激昂する黒ウサギの横で、八幡が冷静に言うのと「ペルセウス」の男達は鼻で笑った。

「ふん。こんな下層に本拠を構えるコミュニケーションに礼を尽くしては、それこそ我らの旗に傷が付くわ。身の程を知れ”名無し”が」
「なっ……なんですって……!!!」

黒ウサギからバチコン！と、堪忍袋が爆発する音がした。レティシアの扱いやコミュニケーションを侮辱する行動と発言の数々に、黒ウサギの沸点は一気に振りきれたのだ。

怒りに震える黒ウサギを見下す騎士達は、その姿を鼻で笑う。

「フン。戦うというのか？」

「愚かな。自軍の旗も守れなかった”名無し”など我々の敵でないぞ」

「恥知らず共め。我らが御旗のもとに成敗してくれるわ！」

口々に罵り猛る騎士達。彼らは旗を大きく広げると、陣形を取るように広がる。

しかし壮絶か薄ら笑いを浮かべる黒ウサギには侮蔑の言葉は届かない。

彼女は騎士達を睨むと、らしくない物騒な笑顔で罵った。

「ふ、ふふ……いい度胸です。多少華のあるギフトで武装しているようですが、そんなレプリカを手にして強くなった気にいるのですか？」

「何!？」

今度は騎士達の怒声上がる。黒ウサギは黒髪を淡い緋色に変幻させ、高く舞い上がらせて威嚇した。

その状況に八幡が黒ウサギの前に出て、いつもとは違うドスの効いた声色で声を発した。

「おい、お前らそろそろ落ち着け」

「……ッ!!??」

(この後のことを考えて少しだけ……)

八幡の声が聞こえた瞬間”ペルセウス”の騎士達は自分の心臓が掴まれたような気がした。

その隙に八幡が騎士達にゆっくりと影を伸ばしていた。

「八幡さん！止めないでください!!？」

「黒ウサギ、コミユニティとレティシアを侮辱されて怒るなどは言わない。だが状況を考えろ相手は”サウンドアイズ”の幹部コミユニティだ、下手に刺激して手を出せばもつと状態が悪くなるし、最愛の場合はウチの子供達もタダでは済まなくなる」

「ツ、す、すみませんでした」

「なあ”ペルセウス”の騎士さん達。目的も完了したことだし、ここは一旦落ち着いて帰ってくれないか？」

「可笑しな事を言う！先に口出ししてきたのはその……ッ！」

「何度も言わせるな……ここはおとなしく帰ってくれって行ってるんだ、分かったか」

「ッ！わ、分かった」

騎士達はどこか慌てた様に帰っていった。

「さてと、んじやあ他の連中を呼んで来るか」

「え？」

「詳しい話を聞きたいなら順序を踏むもんだ。事情に詳しそうな奴がいるだろ」

八幡の言ったことに頭が追いつかなかったが十六夜の発言ではっと思いつく。レティシアを連れてきたのが白夜又ならば、詳しい事情を知っているかも知れない。

「で、でも昼間の事がありますし」

「なら御チビとお嬢様だけでもいい。どうもキナ臭い。最悪その場でゲームになることだってあり得る。なら頭数はいた方がいいだろ」

ジンは看病に残ると言い、八幡、十六夜、飛鳥、アリス、レン、黒ウサギの五人は”サウンドアイズ”二一〇五三八〇外門支部を指すのだった。

交渉と過去と宣戦布告

夜も更け、夜空には星が輝いていた。一晚遅れの満月が箱庭を照らしている。

街灯ランプは仄かな輝きで道を照らしているが、周囲から人影らしいものは一切感じられない。道中、十六夜は早足なまま空を見上げて呟く。

「こんなにもいい星空なのに、出歩いている奴はほとんどいないな。俺の地元なら金とれるぜ」

「そうだな。俺の地元にもそれなりに建物があつたからこんないい星空は見れなかつたな」

箱庭に来る以前、八幡と十六夜は眠らない夜の街に生きてきた。

眩いばかりのネオンライトや、昼夜問わず道路を走る車と騒音。

歓声と娯楽。騒音と人波。醜悪な誘惑が蔓延る時代で生きてきた二人にとって、人里で見上げる満天の空は新鮮に感じられたのだ。対照的に、戦後間もない時代からきた久遠飛鳥にとって、この満天の星が見える星空は疑問の対象である。

「これだけハッキリ満月が見えているのに、星の光が霞まないなんておかしくないかしら？」

「箱庭の天幕は星の光を目視しやすいように作られていますから」

「そうなの？ だけどそれ、何か利点があるのかしら？」

太陽の光から吸血鬼などの種を守ると言うのは理解できる。しかし星の光を際立たせたところで意味なるのとは思えない。黒ウサギは焦るような小走りだったが、歩幅を緩め、

「ああ、それはですね」

「おいおいお嬢様。その質問は無粋だぜ。」夜に綺麗な星が見れますように” っていう職人の意気込みが分からねえのか？」

「あら、それは素敵な心遣いね。とてもロマンスがあるわ」

「……。そ、そうですね」

黒ウサギはあえて否定しなかった。納得したのなら今はそう言う

事にしておこう。話せば長くなるし、店先までほんの僅かだ。

”サウザンドアイズ”の門前に着いた四人を迎えたのは例の無愛想な女性店員だった。

「お待ちしておりました。中でオーナーとルイオス様がお待ちです」
「黒ウサギ達が来ることは承知の上、ということですか？あれだけの無礼を働いておきながらよくも『お待ちしておりました』なんて言えたものデス」

「黒ウサギ、今はそんな事を言いに来たわけじゃ、ない」

定例文にも似た言葉に憤慨しそうになる黒ウサギをレンが止める。

「……事の詳細は聞き及んでおりません。中でルイオス様からお聞きください」

店内に入り、中庭を抜けて離れの家屋に黒ウサギ達が向かう。

中で迎えたルイオスは黒ウサギを見て盛大に歓声を上げた。

「うわお、ウサギじゃん！うわー実物初めて見た！噂には聞いていたけど、本当に東側にウサギがいるなんて思わなかった！つかミニスカにガーターソックスって随分エロいな！ねー君、うちのコミュニティに来いよ。三色首輪付きで毎晩可愛がるぜ？」

ルイオスは地の性格を隠す素振りも無く、黒ウサギの全身を舐めまわすように視姦してはしゃぐ。黒ウサギは嫌悪感でさつと脚を両手で隠すと、飛鳥も壁になるように前に出た。

「これはまた……分かりやすい外道ね。先に断っておくけど、この美脚は私たちのものよ」

「そうですそうです！黒ウサギの脚は、って違いますよ飛鳥さん!!？」

突然の所有宣言に慌ててツツコミを入れる黒ウサギ。

そんな二人を見ながら、十六夜は呆れながらもため息をつく。

「そうだけお嬢様。この美脚は既に俺のものだ」

「そうですそうですこの脚はもう黙らっしやいッ!!」

「よかろう、ならば黒ウサギの脚を言い値で」

「売・り・ま・せ・ん！あーもう、真面目なお話をしに来たのですからいい加減にして下さい！黒ウサギも本気で起こりますよ!!？」

「馬鹿だな。怒らせてんだよ」

店員の助け舟が出される。

「あの……御来客の方も増えましたので、よろしければ店内の客間に移りましょうか？ 見れば割れた食器の破片も散らかってますし」

「そ、そうですね」

「すみません。本当に」

一度仕切り直すことになった一同は、”サウザンドアイズ”の客室に向かうのだった。

* * *

座敷に招かれた五人は”サウザンドアイズ”の幹部二人と向かい合う形で座る。長机の対岸に座るルイオスは舐め回すような視線で黒ウサギを見続けていた。

黒ウサギは悪寒を感じるも、ルイオスを見無視して白夜叉に事情を説明する。

「——”ペルセウス”が私達に対する無礼を振るつたのは以上の内容です。ご理解いただけただけででしょうか？」

「う、うむ。”ペルセウス”の所有物・ヴァンパイアが身勝手に”ノーネーム”の敷地に踏み込んで荒らした事。それらを捕獲する際における数々の暴挙と暴言。確かに受け取った。謝罪を望むのであれば後日」

「結構です。あれだけの暴挙と無礼の数々、我々の怒りはそれだけでは済みません。”ペルセウス”に受けた屈辱は両コミュニティの決闘を持って決着をつけるべきかと」

両コミュニティの直接対決。それが黒ウサギの狙いだった。

レテイシアが暴れまわったと言うのは捏造だが、レテイシアを取り戻すにはなりふり構っていられる状況にはない。使える手段は全て使う必要があった。

”サウズンドアイズ”にはその仲介をお願いしたくて参りました。もし”ペルセウス”が拒むようであれば”主催者権限”の名の下に「いやだ」

唐突にルイオスは言った。

「……はい？」

「いやだ。決闘なんて冗談じゃない。それにあの吸血鬼が暴れ周ったって証拠があるの?」

「それなら彼女の石化を解いてもらえれば」

「それは、悪手だよ。黒ウサギ」

「レンの言う通りだ。コイツはレティシアの元の所在を知ってる。それに、物的証拠のない証言じゃ口裏を合わせるという事と元仲間という事で反撃される」

「証言だけの証拠じゃ、決め手にならない。それに、レティシア姉さんは、立场上所有物だから石化をわざわざ解除するとは思えない」

「何だ。その二人は分かっているじゃないか。それに、そもそも、あの吸血鬼が逃げ出した原因はお前達だろ? 実は盗んだんじゃないの?」

「な、何を言いだすのですかッ! そんな証拠が一体何処に」

「事実、あの吸血鬼はあんたのところに居たじゃないか」

ぐつと黙り込む。それを疲れては言い返せない。黒ウサギの主張も、ルイオスの主張も、第三者がいけないという点では同じなのか。ルイオスはヘラッと笑って畳み掛ける。

「まあ、どうしても決闘に持ち込みたいというなら調査しないとね。……もつとも、ちゃんと調査されて一番困るのは全く別の人だろうけど」

「そ、それは……!」

視線を白夜叉に移す。彼女の名前を出されては黒ウサギとしては手が出せない。この三年間、”ノーネーム”を存続出来たのは彼女の支援があつたからだ。

今回の一件で更なる苦勞をかけるのは避けたかった。

「じゃ、さっさと帰ってあの吸血鬼を売り払うか。愛想のない女って嫌いなんだよね、僕。特にアイツは体も殆どガキだしねえ——

——だけどほら、あれも見た目は可愛いから。その手の愛好家には堪らないだろ? 気の強い女を裸体のまま鎖で繋いで組み伏せ啼かず、つてのが好きな奴もいるし? 太陽の光っていう天然の牢獄の下、永遠に玩具にされる美女つてのもエロくない?」

ルイオスは挑発半分で商談相手の人物像を口にする。

案の定、黒ウサギはウサ耳を逆立てて叫んだ。

「あ、貴方という人は……!」

「しっかし可哀想な奴だよねーアイツも。箱庭から売り払われるだけじゃなく、恥知らずな仲間の所為でギフトまでも魔王に譲り渡すことになっちゃったんだもの」

「……なんですって?」

「……やっぱりな」

飛鳥は声を上げて驚き。黒ウサギは声には出さなかったが表情にはハツキリと動揺が浮かんでいる。八幡は概ね予想が出来ていたような反応だった。

飛鳥と黒ウサギの様子をルイオスは見逃さなかった。

「報われない奴だよ。」恩恵はこの世界で生きていくのに必要不可欠な生命線。魂の一部だ。それを馬鹿で無能な仲間の無茶を止めるために捨てて、ようやく手に入れた自由も仮初めのもの。他人の所有物っていう極め付けの屈辱に耐えてまで駆けつけたのに、その仲間があっさり自分を見捨ててやがる!目を覚ましたこの女は一体どんな気分になるだろうね?」

「……え、な」

黒ウサギは絶句する。そして見る見るうちに蒼白に変わっていった。

同時に幾つもの謎が解けた。魔王に奪われていたはずのレティシアがこの東側に居るのも、ギフトカードに記されたネームのランクが暴落していたもの、それな理由だった。

魂を砕いてまで——レティシアは、黒ウサギ達の元に駆け付けようとしてくれたのだ。

ルイオスにはこやかに笑うと、蒼白な黒ウサギのにスツと右手を差し出す。

「ねえ、黒ウサギさん。このまま彼女を見捨てて帰ったら、コミュニケーションの同士として義が立たないんじゃないか?」

「……?どういふことですか?」

「取引をしよう。吸血鬼を”ノーネーム”に戻してやる。代わりに、僕は君が欲しい。君は生涯、僕に隷属するんだ」

「ちよつと待った」

「何だよ。今、僕は君達にとつてもいい話をしてるんだけど？」

「そうか……じゃあこれを見てくれ」

そう言つて八幡は影の中から”ペルセウス”の騎士達が付けていた兜を取り出した。

「これに見覚えは？」

「そ、それはハデスの兜!!? どうしてここに!？」

「いや何、お前の部下からこつそりとな」

「八幡。どうしてバレなかつたの？」

「コイツの部下が黒ウサギと口論しているときに口を挟んで威圧してな。一番怯えている奴の意識が一番遠のいた一瞬に俺が作った兜と入れ替えた」

「兜を……作つただと!!?」

「俺のギフトの一つに”贗物の本物”偽りの本物つて言うものがある。これは本当に限りなく性質の近い偽物を作り出すことが出来る。ま、今頃お前の部下が付けている方は消えているがな」

「それで、八幡はどうするの？」

「このギフトには欠点があつてな作つた贗物にせものは長く持たない、そして贗物を作るのには実物を見なければ入れない。さらに……」

影からボイスレコーダーとスマホを取りだし、録音させられてる音声
を流し、写真も見せる。

そこにはゴーゴンの威光を八幡達がいるのにもかかわらず使用している写真と”ノーネーム”に対する暴言などがあつた。

「コレは外界の道具なんだが、ここにあるものは全部本物だ。さて、ア
ンタはリーダーとしてこのことに関して落とし前をつけなくちゃい
けない」

「だが、僕達は逃げ出した商品を捕獲するためにやったことだ。何ら
問題はない」

「そうか……なあ白夜叉」

「ん？何だ？」

「捕獲するためとは言え石化のギフトを”ノーネーム”の敷地内で振り構わず使うのはどう思う？」

「そうだな。些かやり過ぎではないか、とは思う」

「だよな。なあ、”ペルセウス”のリーダーさん交渉をしようぜ」

「交渉だと？」

「ああ、正直黒ウサギの言ったレティシアが暴れ回ったという話は盛っている。が、過剰な捕獲行動をした事と暴言などは本当のことだ。それに対する詫びの交渉だ。内容は簡単だ。一つ、レティシアを売り払う期間を明日から一週間伸ばす。二つ、俺達”ノーネーム”はその期間の間に”ペルセウスの挑戦権”をクリアし、お前達に正当な手順を踏んだギフトゲームを申し込む。でどうだ？」

「ふくん、僕は別にいいけどそれで、こっちにはどんな利点があるのかな？」

「黒ウサギ」

「は、はい」

「この交渉にはお前も必要な一部だ、覚悟はいいか？」

「ちよ、どう言う事比企谷君!!？」

「……勿論です」

「黒ウサギ……」

「ならOKだ。この交渉の内容が失敗した場合、其方には黒ウサギの所有権と俺の”恩恵”をやる」

「」「なっ!？」」

「オイ、小僧!!？お主自分が何を言っているのか分かっておるのか！」

「そうだよ、八幡!!？」

「こんな外道との取引で黒ウサギと”恩恵”を交渉に使わなくても!!？」

「こうしなきゃ交渉が成立しない」

「へく、良いけど君の”恩恵”を手に入れて僕としてはメリットらしいものがあるのか？」

「俺の”恩恵”は複製以外にも傷の移し替え、影の使役など使い勝手

がいい。此方が失敗すれば其方はただで俺の持つ合計八つの”恩恵”を手に入れることが出来る」

「成る程ね。で、こっちは何を交渉材料に出せば良いのかな？」

「其方が出すのはギフトゲームが成立し、そのゲームをクリアした場合のみ有効の内容だ。此方がその時に欲しい材料はギフトゲームクリア後の報酬を自由に三つ叶える事、どうだ？其方は”箱庭の貴族”と複製の”恩恵”を含めた俺の命との言える”恩恵”を八つ手に入れることができる。此方は条件を満たした場合、其方には好きな要望をすることが出来る」

「良いねえ！君達”ノーネーム”如きがクリア出来るわけない条件だ
が、いいののか？」

「勿論だ。白夜叉」

「何だ？」

「改めて聞くがアンタは、今ある意味立会人として、と言う認識でいいんだよな？」

「うむ、その認識で良いぞ」

「分かった。なら、交渉成立だ」

「そうだね。一週間後楽しみにしているよ」

そう言ってルイオスは帰って行った。

「あれが”ペルセウス”のリーダーか、完全に名前負けだな。期待した俺がバカだった」

「そうだなっ、と！レン、どうした？」

「八幡……駄目だよ。”恩恵”なんて賭けちゃ……！」

「黒ウサギもよ！本当にあの男のものになってもいいと言うの!?!」

「……………」

スタスタと早足で帰ろうとする黒ウサギに飛鳥は鬼気迫る表情で背中を掴み、釣り上げた目つきのまま、自分たちを召喚した招待状を胸に突き付ける。憤りを抑えないままに、その文面を口にした。

「”家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い”——

——そうやって私達を炊き付けた本人である貴女がコミユニティを離れるのは、責任の放棄に他ならないわ！」

「……そんな、つもりは」

「いいえ、嘘よ！今のあなたの顔を見れば分かるわ！貴女は仲間のために自分を売り払って構わないと思っっている！だけどそんな無駄なこと、私たちが絶対に許さないわ！」

「む、無駄って……どうしてそこまで言われなきやいけないのですか！！？」

黒ウサギも堪らず叫んだ。ルイオスにせよ、飛鳥にせよ、どうして周りからこんな責められなければならないのか分からなかった。

「確かに、家族や仲間の為に自分の身を犠牲にして守る、と言うのは素晴らしい事だ。だが、それは一部の例だ。自分の”恩恵”を魔王に差し出してまで自分達のことを気にかけてくれていたレテイシアの都合は、自分の代わりに黒ウサギ自身が犠牲になって戻って来たところで気は晴れないし、根本的に解決したことはないんだよ。そう言うところを言えば発案者の身だが、無駄な事だと思う」

「ツ!!? だったら！八幡は自分の命をかけなければ良かったじゃん!!？」

八幡が言ったことに対して、初めて会った時から小声だったレンが初めて大声を出した。

「……え？」

「自分の命を賭ける？」

「どう言うことだ、比企谷？」

「……………」

「八幡の命は「やめろ……レン」ツ……!!?」

「そのことに関してはperlセウスの試練をクリアしてから話す」

そう言っつて八幡は一人コミュニティに帰って行った。

* * *

八幡は”ノーネーム”に着いてすぐ荷物をまとめ、置き手紙を書いて部屋を出て行く。

それから約一日が経過し、八幡は“ペルセウス”の旗が掛かっているある場所、海魔とグライアイのいるところに向かった。

「さて、ここか」

「挑戦者よ、よくぞ参った」

「汝、試練を乗り越え我らを打倒せよ」

『ギフトゲーム名 ”ペルセウスの挑戦権”

・プレイヤー一覧

比企谷八幡

・クリア条件 海魔とグライアイの打倒

・クリア方法 海魔とグライアイを打ち負かす

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなつた場合

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、”ノーネーム”はギフトゲームに参加します。 ”ペルセウス”印』

「時間が無いんだ。さっさと終わらせてもらおう」

「我々がそう簡単に終わるものかッ！」

「影技《ドツペルゲンガー》、拳の構え・鬼神 一ノ技
《c l o w n s t a g e 》」

影で分身を作った八幡は、右拳を前に左腰に構え、影と同時に同じ攻撃を繰り出す。

音も立てない初速だったのだが、一步踏み出すと二歩目から速度が急激に増し、分身も同じ速度で突撃して行く。

それはさながら道化師とそれに操られたマリオネットのような光景だった。

数は優っていたが、八幡の圧倒的な戦闘センスの前には手も足も出なかった。

勝負は一瞬でついた。

「ま、まさか我々がこうもあつさり」と

「さ、挑戦権の報酬をくれ」

「分かった」

八幡は挑戦権の報酬を受け取ると無言でコミュニティへ帰って行った。

* * *

”ノーネーム”では、交渉のことを知ったジンが黒ウサギを謹慎処分にし八幡も同様の処遇を与えようとした。しかしその時には既に部屋には居らず現状は黒ウサギだけが罰を与えられている。

外は、雨が降っており自室の窓に滴る雫を指でなぞりながら、黒ウサギは雨の降る箱庭を見る。

(ああ、定期降雨の時期でしたっけ。南側と違って東側は天幕の開放がないですね)

人工的に作り出したあるはずのない雨雲を作った上で雨を降らせているのだ。

これほどの奇跡の御技で趣味趣向で振るうことが許される懐の広さも、箱庭らしいと言えらしいのだが。

(まあ、箱庭の機能なんて娯楽で設置される物が殆どですし、気にしたら負けかな)

雨風は風物詩を彩る大事なファクターの一つ。古来天運天災に身を潜める修羅神仏にとって、雨雲の有無というのは意味合いが大きい。

(そういえばレティシア様は雨が苦手でしたっけ？血の臭いが湿気と共に立ち籠めるのは宜しくない、とか何とか)

吸血鬼のくせに何を言っているのやら。思い出して黒ウサギは苦笑した。

憂鬱そうに窓の外を見ると、コンコンと控えめなノックが響く。

「はーい、鍵もかかっていますし中に誰もいませんよー」

「……。入っていいという事かしら？」

「そうじゃないかな？」

声は飛鳥と耀のものだった。『誰もいない』と主張しているのに『入ってよし』と判断するのはいかなものだろうか？

「あら、本当に鍵がかかってるわ」

「ん……ホントだ。こじ開ける？」

「それは流石に修理が面倒になるからダメ。アリス」

「了解！」

どうやらアリスとレンもいたようだが、二人が一緒にいる事に黒ウサギはある事を思い出した。

「レ、レン！アリス！だ、ダメですよ、ラッチだけを壊すして部屋に入ろうとするのはダメですからね!!？」

「アリス、go」

「ラジャー」

レンが指示をするとアリスは指を一本細い刃物に変えて扉の隙間に通しラッチを真つ二つにした。

「手慣れてるわね」

「うん」

「昔、レンが黒ウサギと遊びたいと言い出した時にこの手口で部屋に入って居たからな」

「その度に、先生達に怒られたけど」

「当たり前です！修理する部分が一部だけで面倒くさいんですから!!？」

綺麗に切られたラッチを見てどこか懐かしく、どこか悲しくなつた。

そんな事を心の底で思いながらも、自前の湯沸かし器でお茶を入れる。その間に四人は持ちこんだ布袋を小皿に広げる。中には手作りと思われるお菓子が入っていた。

「……まさか御四人が？」

「私とアリス、子供達を作った」

「あの子達がこれ持って『お願いですから、黒ウサギのお姉ちゃんとお仲直りしてください!』————つりりや他の年長組の子がな」

五人はなんともいえない複雑な表情に顔を歪ませる。

「三日前、”サウザンドアイズ”での事を話した時。案の定、ジンも耀も黒ウサギを引き止めた。ジンはコミュニティのリーダーとして、耀は新たな友人として引き止めた。アリスに至っては八幡が己の”恩恵”を賭けたと聞いて暫く放心状態になった。

互いに悪気があったわけではない。ただ互いにカツとなつてしまつて言い過ぎてしまった。そこに飛鳥も参戦して大事になり、結局、全員頭を冷やすために謹慎になったという事なのだ。

ただ一人傍観していた十六夜は「ちよつくら箱庭で遊んでくる」と言い残したまま一度も帰つてこない。皆が”ノーネーム”に愛想を尽かしたのかと思つた。

そんな雰囲気の子供達は察したのだろう。

自分達に出来る事を、と必死に考えたのがこの小皿だった。

「子供つて卑怯だわ。あんな泣きそうな目をお願いされたら、断れるのは鬼か悪魔ぐらいよ」

「ダメだよ飛鳥。きつかけをくれたんだからちゃんと仲直りしないと」

フン、と顔を背ける飛鳥となだめる耀。

それを見た黒ウサギも、困つたように笑つた。

「そうですね……黒ウサギ達がしつかりしないと、コミュニティのみんなが困りますよね」

「そういうこと。だから貴女には悪いけど、他所に行かせるわけにはいかないわ。コミュニティの中心はジン君でもなければ私達でもない。私達を招き入れ、ずっと一人で支え続けた貴女なのよ、黒ウサギ」

「……はい」
それはジンにも言われた事だ。今黒ウサギが脱退しては、コミュニティが持たないと。

任された子供達。招き入れた八幡達の事。

それら全てを背負っているのは、他でもない黒ウサギなのだ。

「……飛鳥達から聞いた話だけど。黒ウサギのいう”月の兎”ってあの逸話の？」

「YES。箱庭の世界のウサギ達は総じて同一の起源を持ちます。そ

れが”月の兎”でございます」

——”月の兎”。傷ついた老人を救うために、炎の中に飛び込んで自らを食べるように捧げた、仏話の一つ。仏門における自殺は本来、大罪の一つにあげられるが、その兎の行為は自己犠牲の上に成り立つ慈悲の行為として認められ、帝釈天に召され”月の兎”と成る。

箱庭の兎はその”月の兎”から派生した末裔なのだ。

「我々”月の兎”は箱庭の中枢から力を引き出している為、力行使した際に髪やウサ耳が影響を受けて色が変わるのですよ。個体差はありますけれどね」

「そうなんだ」

「それに一部の兎は創始者の眷属だから、インドラの武器の使用権限がある。」

黒ウサギも持つてるぞ」

「はい。そんじょそこらの相手には負けませんとも！まあ、出場制限があるのでギフトゲームには参加しにくいですが」

「昔は私達と互角だったけど」

「そうなの？」

「レンの”恩恵”は攻守どちらにも使えて応用が効きますし、アリスは他人の動きに合わせるのが上手かったので」

「まあ、今じゃブランクもあるから多分負けるな」

「けど驚いた。”月の兎”と言えば万葉集にも載っているぐらい有名なもの。私の世界じゃちよつとした有名人だよ」

「そ、そうですか」

「うん。」

——— だけど私達は、黒ウサギを炎に飛び込ませるつもりはない。勿論、八幡も。それに、私達五人は……黒ウサギの書いた手紙に招かれたんだもの」

耀は黒ウサギの手にそつと手を重ねる。その手には例の招待状があった。

”家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に来い”。

召集された八幡とアリスを除いた三人は皆、このフリーズを何より

気に入っていた。

世界に飽いていた三人を奮い立たせたのは、他でもない黒ウサギの口説き文句なのだ。その彼女が居なくては何の為に箱庭の世界にきたというのか。

黒ウサギは決意したような、諦めたような笑顔で答える。

「……はい。無責任な事を言って申し訳ありません。もう大丈夫です」

「ま、こればかりは黒ウサギだけが悪いわけじゃないからな。八だって悪い」

「うん」

「そうだね。ならそろそろ作戦を考えよう」

「そうね。何か建設的なプランがあるといいんだけど」

——へ？と間の抜けた声を上げる黒ウサギ。二人が気にせず話を続けようとして、アリスとレンが話に入り。

「多分、必要ないと思うよ」

「そうだな。八の事だ無責任な事は言わないだろう」

「じゃあ比企谷君は何か考えがあつて、あんな交渉をしたの？」

「その可能性が高い、が私達は未だに”恩恵”を賭けた事には怒っている」

「うん」

アリスとレンは何も考え無いでいた訳ではないと話していたその時。

「黒ウサギ、居るか？」

「は、八幡さん!!？」

「居るのか。なら、失礼するぞ」

「邪魔するぞ」

八幡が部屋に入ると一緒に十六夜も部屋に入ってきた。

「い、十六夜さん！二人とも今まで何処に……!!？」

「八、良くのことこのこと入って来れたな……」

「……そうだね」

「ふ、二人共。説教は後にしていただけます？先ずは話さなくちゃい

けない事があるから」

「わかった」

「サンキュー」

「……話さなくちゃいけない事って？」

「交渉の際に言ったペルセウスの挑戦権を入手した」

「ほ、本当ですか！」

「ああ、置き手紙にも書いていたろ。挑戦権を入手して来るって」

「まさか本当に……」

「俺は入手しに行く途中でちようど終わった比企谷に会ってな」

「十六夜さんも行こうとしていたのですか」

「先を越されちまったけどな」

「十六夜君、こういう面白い事を企むなら……次からちゃんと一声かける事。いいわね？」

「そりゃ悪かったな。次は声をかけるぜお嬢様」

二人は悪戯っぽく笑みを交わす。

「今回ばつかしは時間との勝負だったからな」

「あ、そうだよな」

「……で、話は終了か？」

「八幡、お説教」

「りよ、了解……」

重要事項を話し終えた八幡はアリスとレンからこつ酷く説教を受けた。

* * *

「さて、説教も終わったし。黒ウサギ、今から宣戦布告しに行くのか？」

「いえ、その前に八幡さんにお聞きしたい事が……」

「あの夜、レンが命を賭けなくても。と言った事についてか？」

「……はい」

「……正直なところ余りいい話じゃないから話したくなかったが、コミュニティの同志として話そう」

「俺は、お前達と同じで生れながら他の人とは違う力を持っていた。」

最初は無意識のうちに使っていたが、五、六歳位の頃に己の意で使える様になつていった。同時に自分以外の人間はこんな力を持つていない事を認識するようになり、両親には話そうかと思つていたが、結局力の事は胸の内に隠して生活していた。だが、それから二年後俺は失態を犯した」

「失態？」

「最初に持つていた力は傷の移し替えと影を操る事。俺は、傷を移し替える力を傷ついた猫に対して使つちまつたんだ」

「その何処が失態だというの？」

「見られてたんだよ。その頃通つていた小学校の同級生の一人に」

「……ッ!!?」

「それからはこの目と見られてしまった力の所為で化け物だ。と、言われ過剰な虐めを受けた。ま、力を見られなくても余り酷くはない虐めは受けていたと思うがな」

「ど、どうしてですか？」

「俺の態度が気に入らなかつた奴もいたからな？余り人と関わらず本を読んで大人ぶつてている事が気に食わなかつたからつていう理由。話に戻るが、それで虐めが酷くてな。カッターで切りつけられたり、階段から突き落とされたり、見えないところを火で炙られたり、な」

「おいおい、それ虐めどころか犯罪じゃねえか。良く黙つていられたな」

「辛かつたけど、周りが力の事を知っているから無理に手を出せなかつた。力を使つたら最悪何処かの研究所で実験される可能性があつた。それに、俺が耐えれば両親に迷惑がかからないからな」

「で、でもそれじゃあ比企谷の心身が保つはず……!」

「無いんだよな、保つ筈」

「!？」

「……虐めは小学六年まで続いてな、流石の俺も心身が保たなかつた。なあ、死の受容のプロセスつて知ってるか？」

「ああ、第一段階が否認・第二段階が怒り・第三段階が取引・第四段階が抑うつ・第五段階が受容つて言うエリザベス・キューブラーロース

が説いた説だよな」

「ああ、最初の頃は自殺程度では死ぬ筈がない。その次はどうしてこんな力を持って生れたんだ、どうしてこんな目に合わなくちゃいけないんだという怒り。まだ生きていたいという願望。そして、暫い絶望感故の無気力感に襲われ、もう死んでもいいと思ひ自殺を図り死んだ筈だったが、俺は……何故か、生き返った」

「はあ？」

「い、生き返った？」

「ハチの言っていることは確かだ」

「八幡は一回死んで生き返った」

周りが驚くなか、アリスとレンが事実だと言う。

「箱庭から外界に来て、数日が経過した時に拠点にしてた場所の付近で頭から血を流していた八幡を見つけて病院に名前を伏せて通報しようとした時に重症のはずなのに起き上がった」

「それが私達と八幡の出会い」

「そ、それは……なんと」

「まあ、この話には続きがあつてな」

「ま、まだあるの」

「その時、重症の状態だった俺の身体は見る見るうちに治っていった元の状態に戻った。それから、俺はどんなに虐められて傷を負っても勝手に治るし、どんなに死ぬような行為をしようが死ねない体になった」

「つまり、比企谷は不死になったって事か」

「そんな事って……」

「辛すぎるよ」

「だが、この力のおかげで俺はアリスやレン、そして俺と言う存在を必要としてくれる人に出会えた」

そう言つて八幡はアリスとレンに多分家族にも余り見せた事のない微笑みを浮かべた。

「なら、比企谷の”恩恵”を差し出すって事は……」

「自分の命を差し出すって事になる」

「ま、そういう事だ」

「は、八幡さんはどうして自分の”恩恵”も賭けたんですか……」

「なんでだろうな」

「え？」

「正直、自分でもよくわからない。でも、自分ではどうにもならないんだと思う」

「……それは、八幡は優しいから」

「自己犠牲の精神の塊みたいなものだからな」

「らしい」

「……そうですね」

「うん。比企谷は優しい」

「ええ、こんな短期間でも分かるくらい比企谷君は優しいわ」

「普通の人間じゃ、まず自分の保身のことを考えるからな」

「……そうか、ありがとう」

(箱庭に来てよかった)

八幡はそう思い俯いて微笑んだ。

そして、八幡と黒ウサギは宣言する。

「条件は満たした。あとはペルセウスに勝利するのみ」

「我々の同士・レティシア様を取り返しませう」

——二六七四五外門：”ペルセウス”本拠。

白亜の宮殿の門を叩いた”ノーネーム”一同を迎え、謁見の間で両者は向かい合う。

テーブルには”ゴーゴンの首”の印がある赤と青の宝石が置いてある。

目の前にいるルイオスは何処が苦い顔をしている。

「よお、ペルセウスのリーダーさん。条件を満たして参ったぜ」

「ま、まさかのノーネーム如きが魔海とグライアイ打倒したと!」

「まあな。さて、”ペルセウス”への挑戦権を入手したんだ。ラストゲームと行こうか」

「決闘の方式は”ペルセウス”の所持するゲームの中でも最も高難度

のもので構いません」

「何？」

ルイオスは拍子抜けしたように声を上げた。

「お前らのプライドを壊し、此方はそれに加えて相手の力量も分からない可哀想な雑魚にハンドをくれてやるって事だ」

八幡がそう言うのとルイオスの不快感は絶頂に達していた。

「ハッ……いいさ、約束通り相手してやるよ。もともとのゲームは思い上がったコミュニケーションに身の程を知らせてやる為のもの。二度と逆らう気が無くなるぐらい徹底的に……徹底的に潰してやる」

華美な外套を翻して憤るルイオス。

それを睨み、黒ウサギは宣戦布告する。

「我々のコミュニケーションを踏みにじった数々の無礼。最早言葉は不要でしょう。”ノーネーム”と”ペルセウス”。ギフトゲームにて決着をつけさせていただきます」

決着と星に願いを

”^{ギアスロール}契約書類” 文面

『ギフトゲーム名』 FAIRYTALE in PERSEUS”

・プレイヤー一覧

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

比企谷 八幡

アリス・ストレンジ

レン・ライト

・”ノーネーム”ゲームマスター ジンIIラツセル

・”ペルセウス”ゲームマスター ルイオスIIペルセウス

・クリア条件 ホスト側のゲームマスターを打倒

・敗北条件

プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・舞台詳細・ルール

*ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

*ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

*プレイヤー達はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはいけない。

*姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

*失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行する事は出来る。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、”ノーネーム”はギフトゲームに参加します。”ペルセウス”印』

”契約書類”に承諾した直後、五人の視界は間を置かずに光へと吞

まれた。

次元の歪みは門前へと追いやり、ギフトゲームの入口へと誘う。門前に立った八幡達が不意に振り返る。白亜の宮殿の周辺は切り離され、未知の空域に浮かぶ宮殿に変貌していた。此処は最早、箱庭であつて箱庭ではない場所なのだ。

「姿を見られれば失格、か。つまりペルセウスを暗殺しろつてことか？」

白亜の宮殿を見上げ、胸を躍らせるような声音で十六夜が呟く。その呟きにジンが答える。

「それならレイオスも伝説に倣つて睡眠中だという事になりますよ。流石にそこまで甘くはないと思いますが」

「YES。そのレイオスは最奥で待ち構えているはずだ。それにまずは宮殿の攻略が先でございます。伝説のペルセウスと違い、黒ウサギ達はハデスのギフトを持っておりません。不可視のギフトを持たない黒ウサギ達には綿密な作戦が必要です」

黒ウサギが人差し指を立てて説明する。今回のギフトゲームは、ギリシャ神話に出てくるペルセウスの伝説の一部倣つたものだ。

「宮殿内の最奥まで」主催者、側に気づかれず到達せねば、戦うまでもなく失格となる。

”契約書類”に書かれたルールを確認しながら飛鳥が難しい顔で復唱する。

「見つかった者はゲームマスターへの挑戦資格を失つてします。同じく私達のゲームマスター————ジン君が最奥にたどり着けず失格の場合、プレイヤー側の敗北。なら大きく分けて三つの役割分担が必要になるわ」

飛鳥の隣で耀が頷く。本来ならこのギフトゲームは百人、少なくとも十人単位でゲームに挑み、その一握りだけがゲームマスターに辿りつけるというもの。

そんなゲームを、実戦経験の少ない彼らはたった七人で挑まなければならぬ。役割分担は必須だった。

「うん。まず、ジン君と一緒にゲームマスターを倒す役割。次に索敵、

見えない敵を感知して撃退する役割。最後に、失格覚悟で囧と露払いをする役割」

「春日部は鼻が利く。耳も眼もいい。不可視の敵は任せるぜ」

十六夜の提案に黒ウサギが続く。

「黒ウサギは審判としてしかゲームに参加することができません。ですからゲームマスターを倒す役割は、八幡さんか十六夜さんをお願いします」

「あら、じゃあ私達は囧と露払いの役かしら？」

「悪いが、アリスは俺が戦闘するのに必須でな、レンの場合は自由にしていると思ってる」

「どうしてかしら？」

「俺やレンのギフトは攻守一体の万能型なんだよ。俺は影や贖物を作り戦闘の幅を広げる」

「私は、光の物質化や反射。他にも相手の位置が分かったり、炎や水など属性の付与も出来る」

「成る程……なら、二人は自由にしている。囧になるもルイオスのところに行くのも良しだ」

「助かる」

「さて、それじゃあちやつちやと勝ってレテイシア取り戻しますか」

「残念ですが、そう簡単に事が運ぶかどうか……。油断しているうちに倒さねば、非常に厳しい戦いになると思います」

七人の目が一齐に黒ウサギに向く。飛鳥がやや緊張した面持ちで問う。

「……あの外道、それほどまでに強いのか？」

「いえ、ルイオスさんご自身の力はさほど。問題は彼が所持しているギフトなのです。もし黒ウサギの推測が外れていなければ、彼のギフトは――」

「隷属させた元・魔王（様）」

「そう、元・魔王の……え？」

八幡と十六夜の補足に黒ウサギは一瞬、言葉を失った。

しかし素知らぬ顔で十六夜は構わず続ける。

「もしペルセウスの神話どおりなら、ゴーゴンの生首がこの世界にあるはずがない。あれは戦神に献上されているはずだからな。それにかかわらず、奴らは石化のギフトを使っている、————星座として招かれたのが、箱庭の”ペルセウス”ならさしずめ、奴の首にぶら下がっているのは、アルゴルの悪魔ってところか？」

「……アルゴルの悪魔？」

十六夜の話が分からない飛鳥達は顔を見合わせ、小首を傾げる。

「ペルセウス座の固有名だ。食変光星の代表。アルゴルってのはアラビア語アル・グールって意味で悪魔を意味する。」

んで、アルゴルはペルセウス神話に出てくるメデューサの首元にあたる。恒星としては最も明るく、神話では『悪魔の星』と呼ばれている」

黒ウサギは驚愕したまま固まっていた。

彼女だけが今の答えに帰結することの異常さに気がついていたらだ。

「八幡さん、十六夜さん……まさか、箱庭の星々の秘密に……？」

黒ウサギは信じられないものを見る目で首を振りながら問いかける。

「まあな。このまえ星を見上げた時に推測して、ルイオスを見た時にほぼ確信した。あとは手が空いた時にアルゴルの星を推測して、答えを固めたってところだ。まあ、機材は白夜叉が貸してくれたし、難なく調べることができたぜ」

「俺は違うな。元からあった知識と箱庭に来て初日に書庫でいろいろ調べたからな。まあ、これくらいなら元あった知識で十分考察できたな」

十六夜がフフンと自慢げに笑い。黒ウサギは含み笑いを滲ませて、八幡と十六夜の顔を覗き込んだ。

「八幡さんは何となくですが、もしかして十六夜さんってば、意外に知能派でございませう？」

「何を今さら。俺は生粋の知能派だぞ」

「……さて、無駄話もそこまでだ。そろそろゲームを始めるぞ」「そうだな」

「うん」

「了解だ」

レンと耀の援護の元、十六夜とジンは宮殿の最奥へと進んで行った。

十六夜達と別れて一足先に最奥まで見つからずに辿り着いた八幡とアリスはルイオスの様子を見ていた。

「警戒心ゼロ、首にはゴーゴン……逆廻とジンが来れば完全勝利確定だな」

『そうだな。これなら正直、八幡が今出なくても十二分だな』

そんな他愛無い会話をしていると、安堵の声を漏らした黒ウサギの声が聞こえてきた。

「——ふん。ホントに使えない奴ら。今回の件でまとめて粛清しないと」

翼の生えたロングブーツを履いて、ルイオスが空を飛んでいた。

「まあでも、これでもコミュニティが誰のおかげで存続できているか分かっただろうね。何はともあれようこそ白亜の宮殿・最上階へ、ゲームマスターとして相手しましょうあれ？この台詞言うの初めてかも？」

それは全て騎士達が優秀だったからだ。今回のように準備が伴わない、突然の決闘でなければ、十六夜達の目論見通りに事は進まなかっただろう。

「ま、不意を打つての決闘だからな。勘弁してやれよ」

「フン。名無し風情を僕の前に来させた時点で重罪さ」

ルイオスはギフトカードから炎の弓を出して構える。

「炎の弓？ペルセウスの武器で戦うつもりは無い、という事でしょうか？」

「飛べるのにどうして同じ土俵で戦わなきゃいけないのさ。それにメインで戦うのは僕じゃない。僕はゲームマスターだ。僕の敗北はそのまま“ペルセウス”の敗北になる。そこまでリスクを負う様な決闘じゃないだろう？僕の代わりに戦うのはコイツさ」

ルイオスは首のチョーカーについてる装飾を引き千切ると投げ捨て、凜猛な表情で叫んだ。

「目覚めろ。アルゴールの魔王!」

光が褐色に染まり、四人の視界を染めていく。白亜の宮殿に共鳴するかのような女の声が響き渡った。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!」

現れた女の発する声は中枢を狂わせるほどの不協和音で人の言葉とは程遠いものだ、女は拘束ベルトを引きちぎり、半身を反らし更なる絶叫をあげる。

「ra、GYAAAAAAAAaaaaa!!」

「な、なんて絶叫を」

「避ける!黒ウサギ!!」

えっ、と硬直する黒ウサギ。頭上めがけ岩塊が山のように落下する、が岩が跡形もなく爆発する、よく見る矢が命中し岩を砕いていた。「飛べない人間は不便だよね。落ちてくる雲も避けられないんだから。今頃君たちの仲間と部下どもは石になってるだろうさ。ま、無能にはいい体罰さ」

十六夜達が石になっていないのは、ルイオスの遊び心だろう、ようやくと訪れた初めての挑戦者。すぐに終わらせては勿体無い。吐く軽口より、内心の闘志は遥かに高まっているのだろう。

「目論見が外れたな。レイシアが戻れば魔王に対抗できると思ったんだろうが、肝心のレイシアは使えない。どうする、例の作戦止めるか?」

「……ですが、僕たちにはまだ十六夜さんがいます。貴方達が本当に魔王に勝てる人材だと言うのなら、この舞台上で僕達にそれを証明してください」

「OK。よく見てな御チビ」

「じゃ、俺はルイオスの相手して良いか?」

八幡が入り口からゆっくり歩きながら銃をルイオスに向けて言う。

八幡が現れた事にルイオスが驚いていた。

「な!貴様、どうして石化していないんだ!!?」

「俺はゲーム始まって数分後にはここにいたんだが？」

「な!？」

「ま、そんな事はどうでもいい。さっさと始めようや」

「名無し風情が、後悔するがいい!」

八幡はルイオスと、十六夜はアルゴールとの勝負が始まった。

十六夜は真正面からアルゴールとぶつかり合う。押し合いになったのは僅か一瞬。アルゴールは耐え切れず押し切られ、その場でねじ伏せられる。

「ハハ、どうした元・魔王様!今のは本物の悲鳴みただったぞ!」

獯猛な笑顔でねじ伏せ、さらに腹部を幾度も踏みつける。それだけで闘技場に亀裂を発生させ白亜の宮殿を砕く程の力だ。

八幡は宙を飛ぶルイオスに向かって銃を撃つ。英雄の子孫と言えど弓よりも速度の速い現代武器を用いられては弓を構える暇もなかった。

「おいおい、どうしたよ。ペルセウスのリーダーさん、これならまだお前の部下の方がいい仕事してたな。アリス、モード『ナイフ』

『手抜くな』

「貴様あ!!?」

ナイフになったアリスが言った事が聞こえたのかルイオスは怒りの形相で距離をつめ八幡にパルパーを振りかぶる。

「……こんなもんか」

少しガツカリした表情を見せながら八幡は目にも止まらぬ速さでルイオスにナイフで薄く切る。

「力があるクセに努力を怠るところなるのか」

「き……貴様、本当に人間か!? いったいどんなギフトを持ってる!？」

「ギフトネーム・ ” 正体不明 ” ーん、悪いなこれじゃわからないか」

「ただの死人だ」

「……もういい、アルゴール。宮殿の悪魔化を許可する! 奴を殺せ!」

ルイオスの命令に従うようにアルゴールは絶叫する。すると黒いしみがアルゴールを中心に広がり、あたりからいろんな魔獣を生み出

す。

「確か伝承じやゴルゴーンにはそんな力あったな」

「そうだ！これが数々の魔獣を生み出したゴーゴンの特性！お前の相手は魔王とこの宮殿そのものだ！逃げ場はないものと知れ！」

「そうかい……ならこの宮殿ごと壊せばいい話だな？」

「え？」

ジンと黒ウサギは嫌な予感がした。十六夜は無造作に拳を振り下ろし宮殿に叩き込む。闘技場が崩壊し瓦礫は四階を巻き込んで三階まで落下する。黒ウサギとジンは息を呑む、翼を持つルイオスも同様に、闘技場には常時防備結界がはられているそれこそ、山河を打ち砕く程の力がなければこの様なことは不可能なのだ。

「……馬鹿な、どういう事だ、奴の拳は山河を撃ち砕くほどの力があるのか!？」

「どうした？もうネタ切れか？」

「やっぱ規格外だわアイツ」

ルイオスは悔しそうな顔を浮かべるがすぐに真顔に戻った。

八幡は十六夜の異常さに苦笑いを浮かべていた。

「もういい、アルゴール。終わらせろ」

石化のギフトを解放した。星霊・アルゴールは謳う様に不協和音と共に、褐色の光を放つ。これこそアルゴールを魔王に至らしめる根幹。天地に至るまで全てを褐色の光で包み、灰色の世界へと変えていく星霊の力、褐色の光に包まれた十六夜は真正面から捉え、

「……ゲームマスターが狡い真似してんじゃねえ!!!」

その光を踏み潰した、アルゴールの放つ光をガラス細工の様に砕いたのだ。

「せ、『星霊』のギフトを無効化——いえ、破壊した!？」

「あり得ません！あれだけの身体能力を持ちながら、ギフトを破壊するなんて!？」

（成る程な。ギフトの鑑定の時にギフトカードがエラーを起こしたんじゃないくて、逆廻のギフトが破壊したのか）

白夜叉が『ありえない』と結論付けた理由。その二つの恩恵は、相

反するギフトのはずなのだ。先も説明したとおり、この神々の箱庭において、「恩恵」を無効化するものなどさして珍しくはない。だがそれは武器などの形で肉体と別に顕現しているものに限る。

「さあ、続けようぜゲームマスター。次はどんな手を使うんだ？」

「もうこれ以上のもものは出ないと思います。アルゴールが拘束具で繋がれてる時点で察するべきでした。ルイオス様はアルゴールを支配するにはまだ未熟すぎるのです」

ルイオスは悔しそうにした俯く。

八幡が思い出した様に呟く。

「あ、そうだ。もしこのまま負けた賭けで約束した三つの要望を叶えてもらうぞ」

「何が欲しいんだ？」

「いいのか？そんなこと聞いて。聞いたら多分、絶対に勝たなくちゃいけないぞ？」

「何？」

「じゃあ言うぞ。一つ目、まあこれが当初からの目的だがレティシアの返却。二つ目、ペルセウスの名を剥奪。三つ目、可能な限り我々”

ノーネーム”にサウザンドアイズ発行の通貨を渡す、だ」

ルイオスは恐怖に顔を歪め怯える。

大方、”ノーネーム”になった自分たちを想像したんだろう。

「や、やめろ……！」

ここで負ければ旗印が奪われ、金もなくなる。そうなれば”ペルセウス”は決闘を断ることをできない。今の状況で戦うなど不可能だ。ルイオスは自身のコミュニティが崩壊の瀬戸際に立たされているのに気づく。

「そうか。嫌か。なら方法はひとつしかないよな？くだらねえプライド捨てて、俺達に勝つしかねえな」

『中々鬼畜な事を言うな、八は……』

自ら招いた組織の危機にルイオスは覚悟を決めて叫ぶ

「負けてたまるか！奴を倒すぞ アルゴオオオオオオール!!」

* * *

「「じゃあこれからよろしく、メイドさん」」

「「え?」」

「ペルセウス」とのギフトゲームが終わり、レティシアを助けて目を覚まして問題児達が言ったのはこの一言だ。

「え?じゃないわよ今回のゲームで活躍したの私たちだけじゃない? あなた達はくっ付いてきたただけなもの」

「うん、私なんて力一杯殴られたし、石になったし」

「あ、それ私も」

「それなら、私もだよ」

「ま、舞台設定から何もかも全部やったのは俺だけだな」

「比企谷達はいらないって言うから、所有権は3:3:3で話は付いた」
「何を言っちゃってんでございますかこの人達!?!」

最早ツツコミが追いつかず黒ウサギは混乱する、同様にジンも混乱する。

そんな中、当事者であるレティシアは冷静だった。

「んっ……ふ、む。そうだな。今回の件で、私は皆に恩義を感じている。コミュニティに帰れたことに、この上なく感動している。だが、親しき仲にも礼儀あり、コミュニティの同士にもそれを忘れてはならない。君達が家政婦をしろというのなら、喜んでやろうじゃないか」
「レ、レティシア様!?!」

黒ウサギの焦りは今までにないくらいだ、尊敬していた先輩をメイドとして扱わなければならないことになるなんて。

「私、ずっと金髪の使用人に憧れていたのよ。私の家の使用人だったらみんな華も無い可愛げの無い人達ばかりだったんだもの。これからよろしく、レティシア」

「よろしく……いや、主従なのだから『よろしくお願ひします』の方がいいかな?」

「使い勝手がいいのを使えばいいよ」

「そ、そうか。……いや、そうですか? んん、そうでございますか?」
「黒ウサギの真似はやめとけ」

ヤハハと笑う十六夜。意外と和やかな四人を見て、黒ウサギは力無く肩を落としながらうなだれるのであった。

* * *

それから三日後の夜。

子供達を含めた“ノーネーム”総勢一二七人十一匹は水樹の貯水池付近に集まり、ささやかながら料理が並んだ長机を囲んでいた。

「ただどうして屋外の歓迎会なのかしら?」

「うん。私も思った」

「黒ウサギなりに精一杯のサプライズってところじゃねえか?」

「そうだな」

「かなりお金使ったね」

「問題ないだろ。ペルセウスから出来るだけ巻き上げたんだから」

”ノーネーム”の財政がヤバイことはアリスやレン、黒ウサギから聞いていた八幡は昨日のギフトゲームを利用して財政難の問題解決をすると決めていた。

今日のサプライズでかなりの出費を出したと思われるが以前の完全な貧困状態からは回復した”ノーネーム”には然程痛手にはならなかった。

「それでは本日の大イベントが始まります!みなさん、箱庭の天幕に注目してください!」

黒ウサギに言われて天幕を見ると大量の流れ星が流れていた。

「この流星群を起こしたのは他でもありません。我々の新たな同士、異世界からの四人とアリス、レンお姉ちゃんがこの流星群の切っ掛けを作ったのです」

「「「「え?」」」」」

「箱庭の世界は天動説のように、全てのルールが此処、箱庭の都市を中心に回っております。先日、同士が倒した“ペルセウス”のコミュニティは、敗北の為に“サウザンドアイズ”を追放されたのです。そして彼らは、あの星々からも旗を降ろすことになりました」

八幡達六人は驚愕する、完全に絶句した。

「……なっ……まさか、あの星空から星座を無くすというの!?!」

「今夜の流星群は『サウザンドアイズ』から『ノーネーム』への、コミュニケーション再出発に対する祝福も兼ねております。星に願いをかけるもよし、皆で鑑賞するもよし、今日は一杯騒ぎましょう♪」

飛鳥の驚きに黒ウサギは笑みを浮かべて返す。

「こいつはいい目標ができたな」

「目標でございますか？なんでございますか？」

「あそこに俺達の旗を飾る」

今度は黒ウサギが絶句する。しかし弾けるような笑い声をあげる。

「それは……とてもロマンがございます」

「だろ？」

「はい！」

「……アリス、レン。俺は逆廻みたいに大きな目標は立てられない。だが、ただの死人だった俺に生きる意味を与えてくれた先生とお前達に恩を返せる様に俺なりのやり方ではあるが努力するよ」

「ああ」

「分かったよ」

その道はまだまだ険しい。奪われたものをすべて取り返しその上でコミュニケーションをさらに盛り上げる。ほかの人は反対しないだろう、そんな予感があった。すべてを捨ててここに来たそれに見合う対価はまだ始まったばかりだ。

あら、魔王襲来のお知らせ？
問題児達を追って火龍誕生祭へ

朝早くから八幡は商店街のギフトゲームに参加していた。

ルールは至って簡単、トーナメント式の腕相撲だった。参加者は大
体百人前後朝早くから始まって残り二人になった所だった。

「さあ、残り最後の二人になりました!!？」 最後の対戦は比企谷八幡
とボルフです!!？」

八幡の対戦相手はボルフと呼ばれた獣人の男だった。

「にいちゃん、若いのにすごいな」

「そんな大した事ないですよ」

「それでは準備はいいですか？」

「おう」

「うす」

「それでは……レディーゴー」

(さっさと終わらせる)

足腰に力を入れて相手の指先を吊り上げてストロークし、体を思い
切り捻る。すると体格差があるはずだが、あっという間にボルフの腕
が下がって地に着いた。

「……勝者、比企谷八幡!!？」

「ふう、終わった」

「はい、優勝商品のお肉と野菜とお菓子ね」

「どうも」

今回参加した商店街のギフトゲームは食材や菓子類を優勝すれば
入手することが出来るゲームだった為、先日”ペルセウス”から可能
な限り通貨を巻き上げたがあまり無駄遣いできないと言う事で八
幡は今回のギフトゲームに朝早くから参加した。

「さてと、帰りますか」

商品を持って八幡は”ノーネーム”に帰って行った。

* * *

八幡が”ノーネーム”に戻るとアリスとレン、レティシアしか居なかった。

「あれ？黒ウサギ達は？」

「帰ったのか主殿」

「その主殿つての辞めてくれ、比企谷か八幡とかで呼んでくれて」

「そうか、分かった」

「で、黒ウサギ達はどこ行った？」

「それがね八幡。実は……」

レンが八幡に持っていた手紙を見せる。

そこにはこう書かれていた。

『黒ウサギへ。』

北側の四〇〇〇〇〇〇〇外門と東側の三九九九九外門で開催する祭典に参加してきます。

貴女も後から必ず来ること。あ、あと八幡君とアリス、レン、レティシアもね。

私達に祭りの事を意図的に黙っていた罰として、今日中に私達を捕まえられなかった場合三人ともコミュニティを脱退します。死ぬ気で捜してね。応援しているわ。

P/S ジン君は道案内に連れて行きます』

「成る程な。火龍誕生祭にアイツらは行って、黒ウサギはそれを走って追って行ったか」

「ああ」

「確かに黙ってたのは悪かったけど、飛鳥達もやる事が悪いね」

「全くだ。コミュニティに関わってくる大事だけは辞めて欲しいものだ」

今ここにいる四人は頭を抱えてため息を吐いた。

「で、どうする。行くか？」

「行くしかないだろ」

「うん」

「私は後から追うつもりではあった」

『アストラルゲート
境界門使うのか？』

「それしかないんじゃないか？」

「うん」

「だが、主殿達は金銭に手をつけていなかったぞ？」

「あく、多分何も考えずに行動を起こしたんだろうな。で、その後には逆廻りりが招待状を送った白夜叉に交渉しに行ったらうな」

「……ああ」

「じゃあ私達は境界門を使うの？」

「それしかないだろう」

「全く、アレって確か使うのに一人金貨一枚必要じゃなかったか？」

「”ペルセウス”から巻き上げたとは言え、痛いな」

「致し方ない」

「罰として、後で逆廻り達には稼ぎ直してもらおうぞ」

八幡達は文句を多少垂らしながら金庫からサウザンドアイズ発行の金貨を持って境界門へ向かった。

北側に着いて……

「さて、北側に着いたがどうする？」

「取り敢えず手分けして捜す？」

「それでいいだろ」

「では二手に分かれるか？」

「そうだな」

「じゃあ……俺とレン、アリスとレティシアでどうだ？」

「了解だ」

「それじゃあ、解散」

八幡達は北側に着くと二手に分かれて十六夜達を捜しに出た。

* * *

二手に分かれて探索を始めてから数分が経過した頃。

「レン、せっかく北側に来たんだ。逆廻達捜しながら観光しよう」

「大丈夫なの？」

「問題ないだろ。さっきアリスの居場所を把握したら動きが止まったから多分久遠か春日部のどっちが捕まったと思う。今はゆっくり進行している。それに、逆廻が此処まで来て素直に高まると思うか？」

「思わない」
「だろ？だから何かしら騒動が起きてから捉える。それまでは観光だ」

「うん。分かった」

それからは暫く商店街を見て、食べ歩きをしたりなどしていた。すると、ふらふらと八幡達の前を歩く子連れの女性が居た。危なっかしいなと思った八幡が近づいた時女性が倒れそうになり八幡が支えた。

「おっと、大丈夫ですか？」

「あ、す、すみません」

「……レン、何か食い物と飲み物を買ってきてくれないか」

「分かったよ」

八幡は女性を支えた時に何かに気付きレンに食べる物と飲み物を買ってくるように要求した。買い出しに行つて暫くしてレンが帰つ

てきた。

「おう、サンキュー。どうぞ」

「え、でも私お金が……」

「顔色も悪く体温も低い、それにかかなり軽いです。多分ですけど此処最近まともな食事をしていないのではないんですか？」

「……ええ、此処最近ほとんど食べ物や口にしていなくて」

「なら遠慮なくどうぞ」

「ごめんなさい。……お金の殆どはこの子の為に使ってしまったっていうか必ず返すわ」

「いえ、それに関しては大丈夫です。……ところでそんな状態でどうして外に出ていたんですか」

「……私、此処の建物や街並みが好きなんです。だから、この子にもこの街並みを見せたくて」

「まるで自分の最後みたいな言い方だね」

「そう、なのかも知れないわね。お金も底をついて、私自身もう体が辛くなつて来た。近いうち、本当に最後になるかもしれないわね」

「今更なんですけど、貴女のコミュニティは？」

「コミュニティ”フェンリル”半年程前、魔王との激闘で壊滅したわ」

「ツ！すみません。思い出したくもないことを」

「コミュニティ”フェンリル”って、確か魔王フェンリルのコミュニティだったはず……」

「ええ、魔王同士の旗の奪い合い。それに負けて私はこの子と放浪状態ってところね」

「そうですか……」

過去の事を思い出し懐かしむような顔をする女性を見て、レンが八幡に問いかけた。

「……八幡」

「ん？なんだレン？」

「この人、”ノーネーム”に勧誘しない？」

「……そう、だな。すみません、良かったら俺達のコミュニティ”ノーネーム”に来ませんか？まだ、復興途中で苦しくはありますが仲間達

は多分貴女とお子さんを歓迎してくれますよ」

「……勧誘、ありがとう。でも、私は夫のいた”フェンリル”が今もなお心にあるから遠慮するわ。ごめんなさいね」

「いえ、俺達の仲間も貴女と同じ思いの奴がいましたから」

「うん。痛いほど分かる」

「食べ物どうもありがとう。最後に貴方達の名前を聞いてもいいかしら？」

「比企谷八幡です」

「レン・ライトです」

「比企谷君、レンさんありがとう。私は、セロ。この子は神牙よ。……じゃあ私たちはもう少し観光するわ、さよなら」

「ええ、さよなら」

「体に気をつけて」

そう言って、セロは神牙を背負って商店街を進んで行った。

二人を見送った八幡達はこれからどうするかを話していた。

「さて、どうするか」

「うん、特に問題も起きなかったね」

「予想が外れたか……」

と、話していたら少し離れたところでざわざわと声が聞こえて来た。

「月の兎がいるってよ」

「月の兎が？こんな下層に？」

「ああ、なんでも人間とギフトゲームをしているとか」

「月の兎だってよ、八幡」

「やっぱなんかやらかしたな」

「行く？」

「勿論」

人が集まっているところに向かうついているとき、八幡は強烈な憎悪や悪意を感じ直様振り向いたが結局、誰だか分からなかった。

「どうしたの？」

「いや、何でもない。行くぞ」

「……うん」

そして、近くまで来たとき瓦礫が崩れる音がしたので、更に素早く移動して目的地に着いたら破壊された建物と包囲されている十六夜達の姿があった。

「……遅かった」

「そうだね。遅かったね」

「とりあえず、逆廻達が連行されたらついて行こう」

「説得と謝罪が必要だね」

「はあ……」

二人はこれからのことを考えてため息をつくのだった。